
陰陽師の憂い

zeyra

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陰陽師の憂い

【Nコード】

N3152Q

【作者名】

zeyra

【あらすじ】

現実から逃げ出して、異世界にいつちやいました。

大変は大変だけど、戻ってこれるとわかると気楽なものです。

狩りをするのは流血表現ですよね。

一応流血表現とR15つけます。

一話一話は短め。のんびりしてます。

序文 してきた事（前書き）

一話P.Cで50～80行くらいで進めていこうと思っています

序文 してきた事

今まで何をしてきたんだろう・・・

代々陰陽師として生きてきた一族に生まれた俺は、当然のように家業を継いだ

幼いころは修練に明け暮れ、現代人としての生活も繕いながら、おかしいことがおこっていると依頼があれば世に知られない様に家業も行う

依頼人は大概世に言う”大物”と呼ばれる者たちだ

この”大物”というのもおかしいもので、本物の偉人は含まれない陰陽師の仕事という悪霊退治と思われるが、実際は違う

世界はひとつではなく、重なり合うように存在する

それが多重世界と呼ばれるものか、2次元や4次元のような次元の違いなのかは分からないが、そこに生きているものの影が映っているのが霊と言われているだけである

その大概が小動物

何か害を及ぼすわけでもなく、こちらをちゃんと認識して寄っている訳でもない

影がこちらに來ている分、何か感じていて、”興味と呼べるような意識”にも満たない、無意識以下のようなものによってそこにいるだけなのだ

簡単に言ってしまうえば、犬が散歩中に停まって耳の後ろを掻いているようなものである

陰陽師の仕事は、その影を戻しているだけ

影の主は何かされたと気づいてもいないだろう

そんなものを気にするのは大物を気取った、張りぼての小物だけである

本物の偉人は気にも留めない

・・・陰陽師としての仕事にどんな意味があるんだろう・・・

赤ちゃんが影のせいで泣き止まないというのなら意味は見出せる
影が何か影響を与えるなら意義を見出せる

何も無いのだ

影といっても、実際に影が見えるわけではない
こそこそ動くのが好きな小物が、見えない影に怯えているだけ
真つ当な人間なら首をかしげて終わりである

これでは、金を持った子悪党が心置きなく小悪を働く為の手伝いを
しているだけではないか

そう思うと、虚しさしかない

そう思っているときに、何があつてだかわからないが、自宅の部屋
に影がやってきた

今までのように影のようなものでは無く、影が見えるだけですらな
く、生きた動物がやってきたのである

それはウサギのようなものだった

何の害も無い

迷い込んだだけ

本来ならばありえないことと、報告やら対策、原因の究明に乗り出すべきなんだろうが・・・

全てが切れた

バカバカしくなったのだ

陰陽師としての仕事にやる意義など無いではないか！

小悪党のおかげで遊んで暮らせるだけの金はすでに持っているのだ
引退しよう・・・

1話 心の扉を開けましょう

生まれてから28年

こんなのを相手にやってきたんだなあ……

歪から出てきたウサギのようなものを見ながら、魂の抜け殻状態
思う

かわいいもんだなあ

人に慣れているのか警戒心もなくチヨコチヨコしている

向こうとはいきなり違うところに出てきたはずなのに、驚いている
様子も無い

ひくひく鼻を動かしてたり、たまに周りを見ているから、何か変だ
な？とか位は思ってるのかな

お？ 寄ってくるよ

ほんとに警戒心ないんだなあ

・・・肉食だつたりしないよな？

見かけでは分かんからな

あくまで異世界の生物なんだ

どんなにそっくりでも、同じかどうかは分からん

でも・・・まあ・・・引退記念に家で飼ってやるかな

草食ならウサギと一緒に飼えば、異世界間のかけ合わせだ

それも面白い

とりあえず一撫でしようと思えばすと、さすがに驚いたのか跳ね
て行ってしまった

・・・異世界へ

なんで？

歪は閉じちゃってるんじゃないのか？

まだ開いてんのかよ！

ちよつと混乱しながらも歪だろうと思われるところに・・・
何か無いかな？

さすがにいきなり手を突っ込むのは怖い

近くにあつたライターを投げてみる

まだ繋がっている様で、壁あたりでいきなり消えた

手近に棒が無いので、仕方なく愛用の刀の鞘を突っ込んでみる
引き戻しておかしくなっていないか確認
所詮飾りとして愛用しているだけなので、綺麗なものだ
何かあつたらすぐ分かる

こんこん

見た目も叩いた感じも異常なし

生きているものが入り出せるんだからあたりまえか

もう一度突っ込んで範囲を確認

両手を広げて立って入れるくらいのサイズがある

周りはやわらかい感じだ

・・・筒を突っ込んで覗いてみたらどうなるんだろ？
面白そうだが生憎筒がない

思いつくのはトイレットペーパーの芯だが・・・まあいい
素直に入ってみよう

何の違和感も感じず、潜り抜けた先は森だった

ああ空気がうまい

家は田舎にあるのだが、それでも空気が違う
田舎だといっても人気が無い程ど田舎じゃない
外食に困らない程度には栄えている・・・

出入り口が分からなくなっても困るので、目印に刀を置いておく
何があるか分からないところで手放すのもどうかと思うが、一応修
行して覚えたものの中には護身に使えるものもある
どころか、割と攻撃的なものまであったりする
今まで使うようなことなど無かったのだが、初めて覚えてよかった
と思えそうだ

手近なところで使ってみる
森でいきなり火を点けると自分が死にそうなので、カマイタチで木
を切断

切り倒すところまではいかないが、斧でつけれるくらいの傷がついた
向こうと同じくらいの効果は出るようだ

幹を切り倒して目印を作るのも大変なので、枝をいくつか切り落と
して目印を作る

場所だけじゃなくて向きも分からないと困るからね
あと用心に歪に枝を一本突っ込んでおく
どうかいきなり閉まったりしませんように

2話 探索という名の散策

おちつかねえ……

異世界への扉というところでもないものと、大自然に抱かれているすがすがしさと随分と鬱屈した気持ちや虚無感やは無くなったが、帰れなくなるんじゃないかという心配が心にこびりついて焦燥に駆られる

暫く周りを軽く見て回ったりしていたのだが、動物は見かけることが無かった

植物は見知っているものもあるが知らないものもあった

虫は少ないようだ

動植物や虫など生きているものに関しては修行の一環としてかなり覚えさせられたので知っている

それでも知らない植物や虫が見られるあたり、やはりここは異世界で生態系も多少違っているのだろう

一度帰ろう

問題は扉をどうするかだ

このまま放置して、変なものに來られても困るのだからといって閉まってしまってもったいない気がする

とりあえずは人払いの法でもかけておいて、扉には木杵でも突っ込んでおこう

後は後日扉を囲って家でも作ってしまおう

手近にある木をカマイタチを何度も使って切り倒す

思えば修行というのもおかしなものだった

実際に仕事としてやっていたのは影を押し返すことだけなのだが、身に付けたものは火水風土空や式などの法術に体術、拳句に山に放り込まれてサバイバルという何の意味があるのか分からないものもある

法術はまだいい

実際に使うのは空の中の空間に干渉するものなので、それを使うための法術を覚えるための段階だともいえる

基礎からやっていなければ、覚えられなかったかもしれないのだからだが、師も体術やらサバイバルなど役に立つはずが無いのは分かってきているだろうに・・・

習っているときなどは悪霊相手に戦うんだと張り切っていただけに、実際にやることを理解して涙した

自分がやったことが虚しいことだと分かって、八つ当たりで弟子をイビってたんじゃないかな・・・

まあ、これからこの異世界で役に立ってくれるだろうからよしとしよう

そんなことを考えている間に木枠完成

扉のふちが柔らかいのを利用して無理やり押し込んだ

筒を突っ込んだらどうなるかの答えが出た

自分の部屋が見える

試しに反対にまわってみると、木枠だけが見えた

この扉には向きがはっきりとあるようだ

帰って飯を食べよう
そして師に連絡を入れよう

3話 つながりませんでした

今日は久しぶりに自炊をしている

仕事に虚しさを感じるようになってからは余りしなくなっていたのだが、これから異世界に出入りする事を考えると心が躍ったのだ
余ったものは向こうで生活する上で使つてしまえばいい

大自然の中で食べることを考えると気持ちよさそうだ

久しぶりにご飯を食べた気になった

心が病んでいると、食べることに楽しみを見出せなくなるようで、「食事」ではなく「栄養摂取」になっていたため食べた満足感を感じていなかったのだ

「ごちそうさま」

・・・声を出したのすら久しぶりな気がする

仕事ですらも話さなくなっていた自分が、一人でご飯を食べて「いただきます」「ごちそうさま」と普通に出てくる

「心が晴れたんだな」

先にあるのが「やる異議の無いルーチンワーク」ではなく「興味を持った事」であるのは素晴らしい

あとは師に連絡だな

ブルルルルル

普段はPCでのやりとりである

プルルルル

必要なことだけのやりとり

プルルルル

回ってきた仕事に拒否は許されないので

プルルルル

内容を確認したらYESと日付を入力して返す

プルルルル

・・・

プルルルル

「・・・出ねえじゃねえか・・・」

さすがに辞めるということをメールで告げるのはどうかと思ってTEIしてみたのだが、普段しない事には向こうも対応の用意がないらしい

「まあ構いはしないか」

人手が多い訳でもないが、足りないわけでもない
「やらない」事を告げてさえおけば、他に廻すくらいの事はするだ
ろう

そこまでモウロクしてはいないはずだ
うまくすれば向こうからかけても来るだろう

「最後になるかも知れないんだから、ちゃんと声で伝えておきたい
よなあ」

戻ってこれなくなるかも知れないのだから
何かの弾みで死ぬかも知れないのだから

まあいいさ
寝てしまおう

4話 お家作ってみましょうか

朝

気持ちがいい

朝日ってこんなに気持ちよくて明るかったんだな
同じ時間に起きても感じ方が違う

まずはPC確認

「お、返事帰ってきてら」

お前は今28だったか？

まだ早い気もするが、好きにせい

だが、引退ではなく休養だ

30になった正月には一度必ず顔を出せ

何かあつたら連絡だけはよこせ

以上だ

・・・俺、一応総帥に直接教わった直弟子だよな？

総帥の孫で、2代先の総帥候補の筆頭だよな？

下手に慰留やら制裁とか言われても困るが・・・いくらなんでも・・・
これでいいのか！？

よし！

陰陽師就任時にもらった家を明け渡せと言われなかった事を喜ばう！

朝ごはん食べて異世界探検だあ！

さて、まずは扉を囲っちゃわないとな

人払いを懸けてあるから自分以外のものは認識できないから問題は無いんだが、気分的に放置は落ち着かない

小屋でも建ててしまえば分かりやすい目印にもなるしね

迷子で扉が分かりませんかじゃ情けなさすぎる

目印なら法を使っておけば感知できるようになるのだが、それだけでは味気ない

まずは敷地だな

近くにある木をすべて切断

これは実際は斧を使ったほうが楽なのだが、攻撃系の法術を使う機会が無かった為、思いっきり使いたかったのだ

かなり疲れるけど

根は周りの土をどけて、皮をはいで細かい板にしてどけておく
乾燥させて薪の完成

次は小屋を建てる範囲を土に干渉して整地

縁取りに板を入れる穴を空けておく

そして扉の下に、目印用に板に血文字で印を入れて埋め込んでおく

しばらくひたすら只管板作り

・・・さすがに倒れた

一度帰ってご飯にしよう

5話 おいしいご飯への望み

家に戻って馴染みの定食屋へ

近所には、都会に馴染めない為自宅でパソコンを使つての仕事をしているということになっている

その為昼を不定期時に食べてもおかしくないと思われるようだ

立派な変わり者である

また、変わっていると思つてもらわないと不便でもあるのだ

農作業も商店も商うわけにはいかない

それでいて自立した生活をできていると思われなければいけない
その上で、詳しく聞かれても困るのだ。

変わり者万歳

「今日はどうするかな・・・ カツ丼定食で」

さすがに向こうでカツなど作るのは大変なので、食べ収めに食べておこう

暫くは向こうにい続けようと思っている

環境の把握はしておきたい

季節や、昼と夜との違い

今はのどかで動物などみかけなかったが、夜になってわらわら出てくるかも知れないのだ

木が動き出したらどうしよう・・・

米・肉・卵・葱・大根・わかめに調味料

材料がこれだけあればとりあえずは同じようなものが、らしく見えるか

わかめと調味料はしんどいかな？

んゝゝゝゝゝゝ

暫くはなべのようなものでがんばりながら、どうするか考えるか
当然まともな台所など作れないのだから

囲炉裏も風情だよな

土器は欲しいなあ

鍋・・・は持ち込もう

塩は必須

香草は探せばありそうだ

沢庵つくりたいなあ

いろいろ考えるのが楽しい

「いじちそうさま」

ちょっと驚いてるつっぱい

いつも無言でいるからな

珍しいことをしてるという自覚はある

・ ・ ・ 考えると、おまわりさんに目をつけられてるかもしれないな・
・ ・

逮捕される事はないだろうが、何か事件があつたらいきなり容疑者にされてもおおしくないと思う

しばらく顔を出さないと、どう思われるかな？

まあいいや

さっさと家を建ててしまおう

6話 お家の完成です

作業再開

空間を操って、地面の凹みに扉分の隙間を空けて板を刺していく
土を寄せて隙間を埋め、板を固定して壁完成
強度など気にしない

囲炉裏用に隙間を残して板を敷き詰め床を作る
囲炉裏は一段下げたほうがいいのだろうか？
使ってみてから考えよう

扉用の木枠の設置

釘などは使いたくないのではめ込み式だ
金槌の代わりに木で叩き入れる
引き戸用に溝も切っておく

作りは似たようなものだが、切る溝が細い分扉のほうが作業が細かい
壁の一部に穴を開け、鍋をぶら下げる為の柱を通す
仕上げに固定化の札を貼り付けて完成

後は屋根

藁葺きもいいのだが、見つけてないので山形に板を組んで乗せておく
これだと雨漏りするので、作り直すことは前提だ

扉をはめて完成

これで家を作るのは2度目だ

中学を出た直後に山に2年放り込まれており、その時にも作っている
あの時よりもよく出来ていると思う

あの時は竪穴式住居だった

地面は元々は傾斜があつたので、おそらくここは山の裾辺りだろう
水害は無いと考えている

水場を探して置かなければ

中に仕切りも作っており、奥は寢床と扉

布団は持ち込みだな

藁があれば、シーツを掛けて寝るのもいいかもしれない

人除けの法を掛けて直しておこう

こんなものが出来ていたら獣が逃げていく
襲われるのはいやだが、出会えないのも困る
毛皮を着るのも面白いと思う

7話 囲炉裏のかほり

今日はここで夜を過ごす

まずは夕飯の準備である
食材探し

見知らぬ食材はとりあえず無しで
いきなりおなかを壊すのは勘弁願いたい

周りを見て回ると、一食分には十分な量が簡単にみつかった

・・・イチゴが多いが

さすがに夕飯をイチゴだけというのはどうかと思う

鍋と共に食材も持ち込もう
囲炉裏を使いたいのだ

しかし問題発生
上から吊るすには、都合のいい鍋が無い

石を組んで、土鍋で行こう

・・・ここですべて用意するにはまだまだ準備が必要だ
まず水すら無いのだから

法術を使えば出せるのだが、水だけ出してもどうしようもない為、
支度は元世界で

昨日の残りの食材を使ってしまう

鍋はいい

さすがにイチゴを入れるのは無理があるが・・・なんでもありだ

鍋を慎重に持つて扉をくぐる

ここでひっくり返したら涙が止まらなくなるだろう
適当なところに置いて石を探す

あとは薪

割り箸程度まで細かくしてしまう

出来上がっても燃え続けていたら、火を消さなければいけないのだ
調節しやすいことが大事

石を組もうとがんばってみたが、なかなか難しい

鍋が小さいのだ

安定させようとすると、薪を入れるスペースができない

しばらくがんばってみたが、あきらめて土を盛り上げて乗せた

土が乾いて崩れたり、煙がこもって目を開けているのが辛くなった

りとハプニングもあったがとにかく完成

薪の残りを削って箸を作った

いただきます

8話 徹夜でしこしこ

感想としては、なかなか美味しい
純粋な味は大した事はないのだろうが、とにかく気分がよい
最高の調味料だろう

食器を持ち帰って片付ける

煤けた感じがないので、空気の行き来は無いようだ

シャワーを浴びる

随分さっぱりと気持ちよくなった

近頃は汗をかくようなことも無くなっていたからなあ

今日は徹夜だ

夜、外がどうなるのか知りたい
その為に・・・

ナイフを一本用意した

ちゃんとした箸とお椀にレンゲ、出来ればお玉と皿を作ろう

切り株の破片を取りに向かう

目標は全て向こうのもので賄^{まかな}うだ
いってみれば原始時代の再現だ

弥生時代かな？

食べ物はありそうだが、畑も作りたい
ついでもあるしね

作るって、創造するって楽しい

・・・まあ石器で刃物は辛いので諦めるがね
ちよつと悔しい

だが、焼き物まではいけるだろうが金属は厳しいだろう
鉄どころか銅ですら難しそうだ

一度調べてみようかね

そんなことを考えながら作っていく
箸は簡単にいける

ささくれが起こりにくいように仕上げにキサゲがけ
お椀は地道な作業だ

外側を整えたら、ひたすら中を抉^{えぐ}っていく

やりだすと止まらない

9話 初めての邂逅

ついにやってきました？

地道にこりこりお椀を削りだしていると、外から音が聞こえたような気がした

ろうそく代わりに薪に火を点けているが、窓など無いので明かりなど漏れている心配は無い

火を土に突き刺して消火

煙の臭いが漏れるのは困る

扉の脇に縁よつて、外の音を伺いながら暫く様子を見る

がさがさ

風の音では無いだろう

何がいるのかな

聞こえる限りでは一匹だろう

少し扉を開けて覗いてみる

見えない

風は微かにあるようだ

扉は山裾に向いていて、風は吹き降ろしている
前方にいない以上開けても問題無さそうだ

靴も履かずにそつと忍び出る

月が綺麗だ

また息を潜める

・・・

左手側　かな？

ゆっくり移動

土の感触がいいな。癒し効果？

あれは・・・狐か？山猫？

狩りの様子は無い。気楽な物見遊山？

そのまま上って行ってしまう

「ふう　初めての邂逅・・・だな」

気長に待てばまた何か来るだろう

ちよつと肌寒いがこのまま外で待とう

月光浴だ

座り込んで目を閉じ、気を静める

足を組んだりはいしないが、座禅だ

狼などの遠吠えなんかあってもいいのにな

「ぐがあああああああ・・・」

・・・明らかに狼じゃないな

大型のモノだろう。山の奥から聞こえた熊？違う。草食でも無いだろう分らない

トラは確か森林に住むものだっとな

豹とかいたら対処できるか？

大型蛇もそうだが、木の上からいきなり来られると辛いなまあジャングルで無し、こんなところにはいないだろうが

探索は十分気をつけたほうがよさそうだ

10話 心配がなくなり脱力です

明け方までがんばってみた

小動物らしきものが動いている感じはあったが、目には出
来なかった

食用としてはどうだろう・・・肉はあまり考えないほうがいいのか
な？

ねずみを食べるのは抵抗がありすぎる

ふと思い立って空間干涉の法を使ってみる
影を押し返すあれだ

・・・扉がひらいた・・・

何か一気に脱力

開いた先は、最初の扉と位置関係が合っている場所だ
世界はちょうど重なっている関係なのだろう

まあこれで、扉がいつ閉まってしまったとしてもいつでも帰れる

元世界から布団と着替えを持ち込み、扉に押し込んだ木枠をはずし
て就寝

おやすみなさい

お昼になって目が覚めた
徹夜明けだしね

顔を洗うのにも困ったので一度帰る
ついでに買出しをしよう。食料とか刃物とか

日持ちしそうな物を適当に選び、ジャガイモを購入
植えてみようと思ったのだ
育つといいな

刃物は斧に鉋なたとナイフ。あと砥石といし
お椀を作るのにはナイフの形を整えないと辛いことがよくわかった
それからタオルとバケツを多めに購入
必要だよな。現代人には

後は鍬くわ

畑仕事のお友達です

あとはロープや紐かな

あると便利そうなものは一通りそろえて、それらを何とか向こうで
作ってみよう

早速非常食をかじりながら・・・
煙突と窓を作ろう

屋根をおろして札をはがす。札貼ったままだと何も出来ないんだよね

壁2面、大きめに窓用に空間を切り取る。屋根との接点もところどころ切り落として隙間を作る

溝をきった窓枠をはめ込み札で固定。引き戸式の窓にしたガラスだと外も見えていいのだが、それは贅沢だろう

煙突は迷ったが、屋根の上のほうに四角い筒を4つ横向きに突き刺した

雨が振り込まないように、穴をふさがない程度離して板を置く

この状態で札を貼って固定。空間を入れ替える形で屋根を乗せる

完成かなあ・・・

なんかしつくりこない

またどこか弄るとしよう

このあと家の隣を少し耕してジャガイモを植えた
育つといいな

11話 お肉はいいね

暫くは付近の探索をすることにした
水場の確認・確保は必須だろう

あと家の山側の土地を畑として、見慣れない植物を移植して観察することにした

周りには落とし穴。荒らされても困るし、落ちたものを捕獲できれば面白い

かなり深めに掘ったことが幸いして粘土質を発見。これで焼き物が出来る

焼き物にあう質の見分け方など知らないが、やってみれば分かって試して見たらいけそう

火加減が悪かったのかうまくは焼けなかったのだが、いけそうな感触はあった。表面が硬くなって水は染み込まない。それだけで十分後はちゃんと中まで火が通って焼き切れれば十分使える

周りを探索していると、ちょっと離れたところに小さな川を発見。
さかのぼって行くと小さいながらも泉があった

ちよつと迷ったが家の近くにため池を作ることを決めた

家よりはちよつと小さい程度の範囲の穴を掘る。深さは腰くらいそれを粘土質で覆って中に薪をつめる

着火

・・・山火事になるかと思った・・・
火って怖いね

風と水を操って火事にならないようにがんばっていたが、途中で断念して消化

表面だけでも軽くでも焼けていればいいや

ここに泉から水を引く

通り道もがんばって粘土質を焼いておく

小さな泉からの恵み。地面に染み込ませたらもったいない
どこで影響が出るか分からないからね

炭は浄化作用があつたはずだからそのままにして開通

溜まるのにどれくらいかかるんだろ？溜まる前に溢れるであろう水の逃げ道を川に繋げておく

溢れて水浸しは泣ける

随分環境は整ってきたと思う

あと、狩りも出来た

熊とよく分らないもの。どちらも肉食だろう

草食動物は逃げ足が速い。見つけるのも大変だが、狩るのはもっと大変だったのだ

その点肉食はいいね。逃げない。襲い掛かってきてくれる

山の頂上目指して登っている時に熊に出くわした

後ろ足で立って威嚇してくる。この間がありがたかった

いきなり法を使って首を切り落とした。ひたすら楽勝である
問題は。。。どうやって持ち帰るかだ。只管重い！

頭だけ持って、後は空間転移で家まで運ぶ

山登りは中止である。

解体作業も大変だった。とにかく大きい皮を剥いで、肉を部位ごとに切り分ける

そして全て燻製

燻製には家の中でやった・・・

当然布団は非難。他も出来るだけ非難させた

燻製小屋を作ろう。毎回こんなことをしていたのではたまらん。においも染み付いちゃうし！

さらば木の香り・・・

もう一匹は灰色と緑の縞々の動物だった。猫科かな？

後ろから襲われた。

踏み切りの音で気づいたのだ。これぞ間一髪！

避けたのはいいが、動きが速い。すぐに襲い掛かれるところに刀一閃。

避けられるが、にらみ合い状態。体制を立て直す

のどが渴く

が、にらみ合い状態になれば簡単。風で切っておしまいだ
野生の勘も何も無い。逃げようが無いのだから

肩から腰に掛けて切ってしまったので毛皮としては残念な感じだ
肉はこちらのほうが美味しかった

11話 お肉はいいね（後書き）

本来熊の肉は寄生虫とかでマジで死ぬ危険があるらしいですが、作品の中では無視します

12話 毛皮っていいな

本格的に毛皮の手入れを始めた

当たり前なのだろうが、ただ燻すだけでは着る気になれなかった

PCで調べて実践

中性洗剤で洗ってミョウバンと食塩を溶かした水につける。防腐効果
あと油を染み込ませてから、霧吹きで水気をつけて揉みしだいて乾
燥の繰り返し

獣臭さも取れていい感じになってきた

やっぱり全身熊一色でいくべきか？

おそらく今は春先。これから暖かくなる。そんなの着ていた日には・
・・・

秋まで放置だな

代わりにもうひとつのほうを加工する事にしよう

灰色と緑の縞々

趣味は疑われてもしょうがないものになるだろう

だが毛は少なめでしなやかな感じがして気持ちいい

着るならこちらだな

しかしまあ・・・きり方が悪かったな。服にするには形が悪い
短パンと靴くらいだな

しかし毛皮の短パンを穿いているのに上はシャツ

おかしいね

短パンの分を残してまず靴を作ろう

5枚ほどの皮を重ねて底として、それと足を包むように皮を整える底はズレないようにしっかりと縫いとめる。縫いとめる紐の端は人差し指の両脇を通るように外に出して結ぶ。あとは切れているところを縫い留めながら足首で縛って完成

かなりしなやかで足裏に馴染み、足音も立てない
難点は毎回紐で縛らなければいけない事か

近場での作業には下駄を作っておこう

もっと毛皮が欲しいな

ここでは動物愛護も何も無いだろう

あと、布ってどうやって作るんだろう・・・
地道すぎる作業になるかな？

あと調味料も探しておきたいな
岩塩だけは発見した

これは。。。火山による隆起でここは山になったのか？だとしたら
非常に心配だ

死火山になっていることを切に願う

この世界に来て、開放されていることを感じる

幕間 探し物

赤い木の実・・・

どれくらい中に入っていけば見つかるのかな？
聞いたのは、「山の中」とだけ。

お父さんはいない。昔狩りに行った時に死んでしまったそうだ。
お母さんは体が弱い。あまり歩いたりできない。
兄弟はいない。私とお母さんの二人家族。二人だけの家族。

村の人は誰も手伝ってはくれない。

私もお母さんも髪の色が薄い。

力の無い証拠だ。

力の無い者にはみんな冷たい。

役に立たないからだ。

私にはお嬢さんは来てくれない。

弱い私と弱いお母さんの面倒を見ることが分かっているのは、誰も相手にしてくれない。

お母さんはあまり出歩けないのでご飯は私が取ってくる。

でも私ではあまりご飯を取ってこれない。

近くにある木の実、みんなが取るのですぐに無くなってしまふ。
森に入れば食べ物はあるが、怖くてあまり中まで入れない。

動物を狩ることが出来れば、あまり怖くもなくなるのかもしれないが、私では狩れない。

小さな動物は動きが速い。捕まえられない。斧を当てられない。弓は下手くそもっと駄目。狙った方に行かないし、行っても刺さらない。弱すぎるのだ。

だからあまりご飯が食べれない。

だからいつもお腹が空いている。

だから余計に力が入らない。

どうしようもない。どうにもならない。

でも、赤い木の実を食べると力が付くと聞いた。誰かが話しているのが聞こえた。

私でも、食べたら強くなれるのかな？

お母さんが食べたら、元気になれるかな？

ぶどうを見つけたので食べた。甘くておいしい。

お母さんにも食べさせてあげたいな。

でもまだ駄目。赤い木の実を見つけなきゃ。

ここで帰ってしまったら、もう一度上ってくる勇氣は出ないと思う。

風で葉っぱが揺れる。がさがさいっている。

怖い。風でがさがさいってるのか、動物が居てがさがさいっているのか分らない。

ちょっと怖いけど、後ろを振り返ってみる。

「あ・・・赤い木の実がある！」

上っている時には気づかなかったのに、そこに赤い木の実があった。

いっぱいある。

どれがいいのか分からないけど、全部持っていっておかあさんと食べよう。

そのまま食べるといいのかな？

焼いて食べるといいのかな？

近づいていったら・・・落ちた。

「ぎゃーーーーーーー」

13話 罨に落ちた天使

昼飯の用意をしていると、悲鳴が聞こえた。畑のほうだ。落とし穴にかかったのだろう。時々何かが罨にかかる。

何もしなくても捕まえられるのはありがたい。今では落ちたウサギを2羽飼っている。

増えてくれるといいのだが、まだそんな気配は無い。当たり前か。

しかし不思議だ。悲鳴？この世界にも人が居るのか？それとも、似たような泣き声を出す動物がいるのだろうか？

この世界に来て二月ほどになるが、どちらにもまだ出会っていない。いってみれば分かるか。

向かってみると、女の子が落ちていた。

・・・全裸で。

太ももに枝が刺さっている。罨の底に仕掛けた罨だ。大型なら怪我をさせて弱らせれるし、小型なら問題無く生け捕りに出来るからだ。

しかしこれは可愛そうな事をしたな。血を流して気絶している。

土を盛り上げて穴から出して、枝を抜き取る。

血が盛大に出るが無視して水を掛けて洗い、火の法で傷を焼いて止血。

家の中に連れて入り、布団に寝かせてから治癒の札を患部に貼って

おく。

痛みも治まるし、これで2、3日で治るだろう。

しかし何故ハダカなんだ？

この世界には服を着るといふ考えは無いのだろうか？

あまり見入るのも気が引けるし、汚れてはいるようだが体を拭くのも気が引けるので、そのまま布団の中に眠らせた。気が付けば起き出すだろう。

とりあえずはご飯の用意を続けよう。

匂いで起きるかもしれない。

鍋が小さいから二人で食べると少ないか。少し肉も焼いておこう。

「美味しそうな匂い・・・」

彼女は目を覚ましたようだ。迎えに行こう。

「目を覚ましたようだね。大丈夫かい？ごめんな、動物用の罠に落ちちゃったんだ。」

「え・・・罠・・・てなんですか？落ちた穴はあなたが掘ったんですか？あと・・・ここは？」

まだおぼろげの状態で、ぼんやりしているようだ。

「ご飯、食べるかい？」

14話 未知との遭遇

かわいいなあ……

小柄でしなやかな感じ。150cm無いくらいかな？色白だ。

髪は薄い金髪。目も薄い……金色？不思議な魅力だ。

起き出そうとすると流石さすがにまだ足が痛むようなので、布団までご飯を用意して一緒に食べている。

この娘は鍋と焼肉を見て驚いていたようだが、今ははふはふ言いながら美味しそうに食べている。

この世界の人は、どんな風にしてどんなものを食べているのだろう。食べ終わったらいろいろと聞いてみよう。

「ごちそう……さまでした。」

なぜかものすごく寂しそうに言う。

「おいしかったかい？」

「はい！とても、とても美味しかったです！」

「それはよかった。ご飯を食べて気持ちも少しは落ち着いただろうから、いろいろ話を聞かせてもらえる？」

「はい。なんでも聞いてください。答えれる事なら何でも答えます。」

「じゃあまず・・・服を着たりとかはしないの？」

自分の着ている毛皮を示しながら聞いてみる。

「私は狩が下手で、獣が狩れないので毛皮が取れないんです・・・」

「じゃ、他の人は着ているんだね？」

「はい。他の人はみんな着ています。着ていないのは私とお母さんだけです・・・」

「そっか、君もお母さんも狩ができないんだね？」

「はい・・・」

「じゃ、とりあえずいくつか持つてくるから、とりあえず着てもらえる？その・・・裸だとちょっと・・・話にくいからさ。」

「え・・・」

予備に作つてあるものを一揃え持つてくる。ちよつと大きめにはなるが、まあいいだろう。

「これ、着られるよね？あと、落ちたときに土とか付いちゃってるから、よければこれで体を拭いちゃって。」

そつ言つて服と水を汲んだ桶とタオルを渡し、顔を壁に向ける。

「あの・・・これ、なんですか？」

しまった。当然タオルなんてものはないよな。・・・布も無いのかな？裸だし。

「あゝ・・・これはこうして、これで体を擦るんだ。汚れたらまた水につけてきれいにしてからまた使って。」

タオルを濡らしてから絞り、顔をふいてあげる。

「ありがとう・・・？」

よく分かっていないようだが、がんばって拭いているようだ。何度も濯いでいる。

・・・ずっと濯いでいる・・・

綺麗になるまでって・・・のがいけなかったのか？しょうがないよね。

「ごめんね。やってあげるね。」

これはしょうがないよね

15話 初めて名前が出ました

理性が飛びます。

体を拭いてあげてる時に「気持ちいい」とか言われた時はほんとに危なかった・・・

気持ち逸らそうと拭きながら話をする。

「名前、ある？僕はケイっていうんだ。」

「名前、あります。ミレイっていいいます」

ほう、名前が体を現してる。美麗（当て字）

「いいね。綺麗な名前だね。」

「ありがとう。」

照れた感じがいいなあ。

体を拭き終わって服を着せようとしたら、すごく驚いている。

「これ・・・もしかして風の悪魔の皮!？」

・・・すごい名前だな・・・熊の後に狩った、灰色と緑の毛皮だ。あれから3頭狩って、一揃えそろえたのだ。

今自分が着ているのはおそらくヤギのもの。畏に落ちたものを捌いたのだ。

メスなら飼って、乳搾れたかもしれないのに・・・

「風の悪魔というのがどういふのか分からない。でも、こんな毛皮してるのは他に見たこと無いから、多分そうなんじゃないかな?」

見る目が変わってる・・・

驚きの中に少し怯えがある。確かに強い獣だったからね。普通では狩るのは大変そうだ。

「・・・これを着ても・・・いいの・・・?」

纏う毛皮に何か意味でもあるのかな? 聞いてみる。

「毛皮は強さの象徴。そして強い獣の毛皮を着せるのは求婚の証。私と結婚してくれるの?」

え・・・・・・・・・・・・・・・・

そんな意味・・・・・・・・どうしよう???

頭真っ白です。

ミレイも嫌がったとかそんな感じではなく、普通に驚いている。

「あゝ・・・ごめん。そんな意味があるなんて知らなかったんだ。混乱させちゃったね。」

「そうだよね・・・こんな髪の上に結婚なんて申し込まないよね。」

ん???

「髪の色? 綺麗な色だと思うけど、髪の色にも何か意味があるの?」

「え? 髪の色は強さを表す。こんなに薄いのは弱い証・・・」

色素が薄いのは弱い証なのか・・・それともこの世界では特殊な何かがあるのかな？

「そうなんだ・・・でも、それって重要なことなの？」

「???? 重要・・・だと思う。みんな気にしてる。それは当たり前なこと。・・・？」

「そうなんだ。でも、そんなこと知らないから、僕は気にしたこと無いんだ。じゃ、僕の髪の色はどうなの？どんな風に思っの？」

「黒い悪魔と同じ色。とても強いと思う。すごいと思う。」

「ちょっと待ってて。」

熊の毛皮を持ってこよう。

16話 何もしないで真っ黒だ

「この毛皮！ 黒い悪魔！ すごい！！ みんな、これに出会ったら死んじやうって言うてる！ 狩ることなんて出来ない、逃げることも出来ないって！！！」

熊ってやっぱり強いんだな。

敷物にしようと思も残してあるものを持ってきたのだ。分かりやすいよね。

出来るだけ傷を残さないようにと腹を縦に割いて、ひたすら逃げて死ぬのを待ったのだ。二度とやらない。大変すぎる。

「黒い悪魔ってこれのことだったんだね。黒い悪魔と同じ色だから黒髪は強い色なの？」

「よく分からない・・・黒い色が強い色。だから黒い悪魔は強い。黒い髪は強い。」

「ミレイが住んでる所にも黒い髪の人、居る？」

「居ない。一番強い人。茶色。すごく濃い茶色。」

やはり色素の問題だね。少し脱色しようかな。あまり目立ち過ぎたくは無い。

「ここ、ケイさんのお家？ 木のお家？ あと、このふかふかしたの、なに？ さっきご飯食べてた入れ物、私のは木だった。あなたの使ってたのはなに？ お肉置いてあったのはなに？」

焼き物は無いようだ。縄文時代より前？えらいとこだな・・・

「ミレイはどんなところに住んでるの？先に教えて？」

「地面に丸く穴を掘る。真ん中に棒立てる。上からはっぱ被せる。」

「寝るときはどうしてるの？」

「はっぱを敷いて寝てる。皮を持つてる人は、はっぱに皮を被せて寝てる。」

「ご飯はどんなもの食べてるの？木の実？」

「うん。木の実とはっぱを食べる。あとはお肉を焼いて食べる。」

ん？肉以外は生？焼き物が無いなら煮込んだりできないか。大変そうだなあ。

「あ！赤い木の実！私は赤い木の実を取りに来たんだ！」

「赤い木の実？外にあるのかな？ちょっと待ってて。」

畑にあるものを取りに行く。あるのはトマトと唐辛子、ユスラウメに知らない小さな実だ。

「どれのこと？」

「分からない。赤い木の実を食べると強くなるって聞いた。だから食べたかった。お母さんに食べて欲しかった・・・」

「どれのことだか分からないな・・・この小さな実の事かな？他の人に聞けば分かるかな？」

「多分分かると思う。誰かが話してるのを聞いたの。だから、話してた人は知ってると思う。」

ふむ。

「じゃ、みんなのところに行こう？聞いてみよう。この木の実全部あげる。服もあげる。お肉もあげる。でも、代わりにお願い聞いてもらえる？」

「なに？どんなこと？助けてくれた。ご飯もくれた。お願い、何でも聞くよ？」

「ありがと。じゃあ、僕が住んでるこの家の事。そのふかふかの物の事。あと、僕が言わないで欲しい事。誰にも、お母さんにも言わないでくれる？」

17話 まさかこの年で・・・by28

出かける準備をするので、用意が出来るまで怪我もしてるしミレイには休んでもらう。

やはり髪は脱色しよう。いろいろ聞くには、人に馴染むには特別では無い方がいい。

扉をくぐるのを見られるのは困ると思ったが、おとなしく目を瞑っているようなので一安心。

元世界に帰って急いで脱色。まさかこの年でこんな事をするとはねえ・・・

あまりに焦っていて、毛皮のまま出かけるところだった。危ない危ない。

準備といってもこれくらいなだけだね。

カラーコンタクト買いに行くには時間がかかる。所詮は田舎。今度時間を作って買いに行こう。

これはミレイを混乱させて細かい事をどうでもよくしたいという思いがあったが。

村の人にいろいろ聞かれても、よく分からないと言ってくれるとありがたい。

「準備できたよ。そろそろ行こうか。日が暮れちゃう前に。」

「あ・・・おはようございます・・・」

「はい。おはよう。」

汲んでおいた水を差し出す。

ほんとに眠っていたようだ。むにむに言いながら飲んでる。ここま
で怖かったんだろうし、気疲れしてるんだろうな。

出かけるにあたり、武器は弓を持っていくことにした。刃物は目立
つだろう。

あまりうまくは無いが無いよりはいいし、持っておかしなもので
もない。旨くすれば何か狩れるかもしれない。はずすと、すごいと
思ってくれているだろうだけにかっこ悪いけどね。

矢は4本用意した。腰紐の後ろに刺しておく輪を作っている。

あとは桶。丸太の中をくりぬいた物だ。重いが、ちゃんと組んで作
る自信が無かったのでそうした。

これに食べ物を入れていく。取っ手には革紐を編んだもの。縄を作
るいい材料ないかな？

まずは今あるもので、風の悪魔の燻製肉と赤い木の実を入れる。あ
とは道々取って行こう。

あと服。お母さんも着ていないらしいからね。服は持ってもらおう。

「ここからどれくらい歩いた所にみんなはいるの？」

「ん・・・たぶん、お日様が沈む少し前には着けると思います。あ
・・・でも、来る時ゆっくりだったかもしれないので、もう少し早く
着くかもしれません。」

1時間から2時間くらいかな？結構あるなあ・・・怪我もしてるし
・・・でも、抱えてて何かに出くわしても困るしなあ・・・

「痛いと思うけど、がんばって歩いてもらえる？もう少し下に行ったらおんぶしていくから。」

「え。おんぶ？え、あ、いえ。歩いていきます。大丈夫です。」

「ん。じゃ、辛くなる前に言ってね。それじゃ、行こうか。」

「はい。。？あれ？髪の色、茶色くなってます？あれ？」

「うん。茶色くなったんだよ。黒じゃない。みんなにも黒かった事言わないでね？」

「はい。分かりました。でも、目は黒いままですね？」

「うん。でも、今度会う時には茶色くなってるかも知れないから、何も言わないでね？黒い色だって言っと、みんな驚いちゃうかもしれないから。」

「はい。黒い色って言わないほうがいいんですね？分かりました。」

ゆっくりと話しながら歩いていく。

18話 うまくいってほっとした

不思議なことがいくつもある。

何故ミレイと言葉が通じるのだろうか？

何故育っている野性の植物がおいしいのだろうか？

何故総帥は「まだ早い気もするが」と言ったのだろうか？

考えられる事はある。

しかし・・・そんなことがあるのだろうか？

「食べ物を見つけたら言ってね？取るから。」

「はい。お願いしますね。あ、あれ、ぶどうです。」

取る食べ物は、木の実ばかりだ。葉物や根菜はない。豆も無い。煮る事が無いからかな？生では食べ辛いだろう。

草の向こうにうさぎ発見

身振りで言葉を止め、桶を持ってもらう。

弓に矢をつがえて・・・

手ごたえあり！

「わ、うさぎです！すごいです！一発で仕留めちゃいました。」

目がきらきらしてる・・・かわいいなあ・・・
かわいい娘に喜んでもらえると、うれしいね。 単純だな・・・

「これ、捌くことはできる？」

「はい。やり方だけは知ってますし、お母さんはやってましたから。」

「じゃ、帰ったらやって見せてね。」

「どうやるのか見ておきたい。人がどう捌いているのかは知らないのだ。普通はどうするんだろう？」

「あ、村が見えてきました。あそこです。あの木の向こうにある柵の所です。」

普通に村って言うんだね。村って言う表現が無いのかと思っていた。森を抜けてちよつとした平原になっている所に、区切り程度にしかならないであろう柵がある。

家はたぶん・・・10軒位かな？ 少ないな。
建ち方に規則性はなく、それぞれが少し離れて立ててある。

夕焼けが綺麗だ。これなら目の色はよく分からないだろう。

「あの・・・やっぱり、抱っこしてもらっていいですか？」

爆弾ですね。僕が言ったのはおんぶなんですが？
抱っこって、やっぱりお姫様抱っこですよ？

19話 村に到着しました

「ねえミレイ。抱っこって、どんな意味があるの？なんかさ、結婚とか？」

「え・・・と、あの、その・・・意味はないと・・・思います・・・」

めちやくちゃ不信です。結婚相手がいないと言ってたし・・・周リから絡めとる？意外と強か^{したた}か？

「意味は無いんですけど・・・ちよつと、憧れなんです・・・」

「憧れなんだ。結婚の儀式とかだったらどうしようかと思っちゃったよ。」

僕さ、ちよつと訳があつて、今暮らしてる家に用があるからあまり離れられないし、いつまで居られるかも分からないんだ。結婚しちやった後にいきなり居なくなるとちやいけなくなるかもしれないから・・・結婚は怖くてできないんだよ。」

30になった正月に顔を出せと言われている。何を言われるか分からない。何があつてもいいように心算^{こころざし}はしておいたほうがいい。

「いえ、そういうんじゃないんです。言い伝えであるんです。怪我をした村の娘を抱っこしてきた黒髪の知らない男が、村を助けてくれたって言う言い伝え。すごく憧れてるんです。」

村の人に思いつきり勘違い・・・てか、期待されそうで怖いな。

怖いけど・・・いつか？多分手助けはするだろうし。黒髪ばれないようにしておけば、たいしたこと出来なくてもそれほど落胆はされないだろう。うん。

「ん。わかった。その憧れ、叶えましょう！でも、そうなると絶対髪の色とか言わないでね！すごいことになりそうだから。」

「あ、そうか。ケイさんは黒髪なんだもんね。ふあ・・・素敵です・・・」

しまった。気づかせてしまった・・・お願いだから、あまり期待しないで・・・

「じゃ、行こうか。荷物は持つてね。」

抱っこした後、荷物はおなかの上に置いてもらった。あらら。顔が真っ赤だ。いいなあ・・・

村につくと、いくつかに分かれて焚き火を囲んで食事をしているようだった。

柵の切れ目あたりに居る人たちの内の一人が気付いたようで、こちらを指差しながら周りと話している。

「こんにちわ、はじめまして。森でこの娘が怪我をしていたので、連れてきました。」

ざわざわと話している。まあいいや。ミレイの家を送っている。

「ミレイ、どの家？」

「あの、端^{はじ}にある家です。」

「ん、分かった。お母さんは中にいるのかな？」

「はい。多分中で寝ています。」

20話 お母さん・・・元気ですね？

家の前に着き、ミレイを降ろす。

「お母さん、ただいま。」

そういつて草を掻き分けて中に入っていくミレイ。

中に入りたいのだが・・・呼ばれるまで入れないよな。

「ミレイ！おかえり。遅かったじゃないか、心配したんだよ？ どうしたんだい？大丈夫なのかい？怪我でもしたのかい？」

「ごめんなさい。怪我しなかったりして、いろいろあつて遅くなっちゃった。でも、はい、これ。ごはんいっぱいあるんだよ。毛皮ももらっちゃったし、いっぱいもらっちゃったの。」

「毛皮をもらったのかい？誰にだい？とうとうおまえにも・・・つて、その毛皮かい！？」

なんかえらい人から毛皮をもらえたみたいだねえ・・・でも、風の悪魔を倒せるようなの、村に居たかいねえ？」

「ごめんね、おかあさん。この毛皮、結婚の証じゃないの。そういう事、知らない人なんだって。村の人じゃないんだよ。あ、今入り口にいるんだ！ごめんお母さん、今入ってもらうね！」

あ、存在を思い出してもらえた。このまま忘れられてたらどうしようかと思った・・・

「ケイさん、ごめんなさい。中に入って？お母さんに紹介するから。」

「んー、紹介の前に、まずお母さんに服着てもらって？着てもらったら声掛けて。入るから。」

「そうだった。裸は駄目なんだっけ。わかった。着てもらったら声かけるね。」

そういつて中に入っていくミレイ。着方は分かるよね？

「どうぞ入って。」

「おじゃましまーす。」

中は暗い。まあ屋根が草なんだから、火は熾おこせないもんね。これによく見えるな・・・

「お母さん、こちらがケイさん。怪我した私を治してくれたの。ケイさん、これが私のお母さんです。」

「どうもはじめまして。ケイといます。」

「娘がお世話になったようで。母のミリヤです。」

「いえいえすみません。私が仕掛けた罠にかかってしまって、怪我までさせてしまって申し訳ありませんでした。」

「あら、そうなんですか？罠というものがどんなものかわかりませんが・・・？あなたがミレイを怪我させたんですか？何したんです

か？」

「穴を掘った所に落ちてしまったんです。」

「穴に落ちたんですか？・・・ミレイ、ちゃんと周りは見なさいよ・・・」

「だって、木の実を見つけたんだもん！穴なんて見えなかったんだもん・・・」

「あゝ、畏つて言うのはですね、それなんですよ。真ん中に木の実を置いておいて、周りに穴を掘っておいて、穴って分からないように草を被せておくんです。そうすると、木の実を食べようと近づいた動物が穴に気付かず落ちるんです。自分で取らなくてもご飯が勝手に取れるんですよ。」

「ごはんが勝手に取れるんですか？それでミレイが怪我したんですか？よくわかりませんが・・・」

「あ、ごはんいっぱい取ってきてあるので、食べてください。」

「そうだ、お母さん食べよ？久しぶりにいっぱいあるんだよ！」

「そうだね。食べようか。ケイさんも一緒にどうぞ。」

「そういえば、赤い木の実でしたね。誰かに聞いてきましようか。」

「そうだ！赤い木の実で力が付くんだって！どれの事が、聞いてくるね！」

「いや、僕が聞いてくるよ。二人は食べてて？あ、お肉は焼かなくてもそのまま食べれるから。」

さて、村の人と交流してきますか。

21話 旨い話なんて無いよね

「すみませーん、ちょっといいですか？」

食事を終え、くつろいでいるであろうところに声をかける。

「お？ミレイを連れてきたやつだな。どうした？」

「はい、はじめまして。ケイと言います。ミレイから、赤い木の実を食べると力が付くって聞いたんですが、この中にありますかね？」

「うん？そんな木の実は聞いたことがないなあ・・・おい、誰か知ってるやついるか？」

「もしかして・・・今朝話してるのを聞かれたか？」

「なんか知ってんのか？」

「知ってるってか・・・ああこの実の事なんだけどな。すつごい辛くてよ、食べるとえらいことになるんだよ。その時なら黒い悪魔にでも立ち向かえそうな気になるくらいによ。って話してたんだ。それ聞いて勘違いしたんじゃないかねーか？」

唐辛子を指している。

ま、食べただけで力が付くような物、ないよなあ・・・

「そうなんですかー、確かにこれを不用意に食べるとえらいことになりますね。」

「お、お前も食ったのか？俺だけが食ったんじゃないと思うと、愉快だね。同士よ。」

「食べ方によつては美味しいんですけどね。じゃ、この実はどうです？これ、知らないんですよ」

ついでなんで、この中で唯一知らない木の実も聞いてみる。

「こりゃあ・・・腹は壊こわさねえから食つてみな。苦くいが、後口は悪くねえ。」

ふむ。後口がいいなら試してみるか。

（お・・・これ、コショウじゃないか！これはいい発見だ！）

「確かに苦いですねー。これ、肉と一緒に食べるといい感じになりそうですよ。今度やってみますかね。ありがとう。」

「ほう・・・そんな風にするといいかもな。ところでよ、ミレイとはどうしたんだ？もらいにきたのか？」

「あー・・・かわいいとは思いますがね、まだ結婚とかは無いですよ。上手く狩が出来ないって話なんで、暫く一緒に狩りに出て狩りの仕方を教えようとは思いますがね。」

「えれえ余裕だなあ。まあいい。ここでは自分の食いもんは自分で用意するつてのがルールだ。余裕があるなら面倒見てやるのはいいが、他のものにまでつきあわせるなよ。おめえと違って余裕なんてねえからよ。」

「そんなに大変ですか・・・ ま、これからちよくちよく来ると思うんで、よろしく。」

「おう。わからねえ事があつたら聞きな。知ってることくらいなら答えれるからよ。」

「そうですね。何かあつたら聞きますよ。じゃ、ミレイのところに戻ります。」

「おう。まあこれからがんばんなあ」

ひとつ分かった。ここでは結婚するのに容姿は気にしないようだ。強さが全て。

ここにいた女性はみんな厳いかついマッチョだった・・・

それとも、そういう美的感覚？

21話 旨い話なんて無いよね（後書き）

最後のは個人的な趣味です。気分を害されてる方が居りましたら申し訳ありません m (_ _) m

22話 また今度ね

「戻りましたー。いい話はそうそうないですね。力の付く実では無かったようです。」

草を掻き分けて家の中に入っていく。

「おかえりなさい。そうですか、違ったんですか・・・」

「ええ、話してたのはこの実の事みたいなんですが、これはものすごい辛いもので、食べた時は確かに力が出るような気になるんですが・・・ほんとに強くなる訳でもないし、後が大変ですよ。試してみます?」

「いえ、そんな風に聞いてしまうと怖いです・・・」

切実な望みだっただけに悲しいだろうな。半信半疑?

「ま、そうだよな。これもこのまま食べるんで無ければ美味しく食べれるんで、今度食べ方教えますよ。あ、うさぎ捌くのはまだです?」

「食べ方があるんですか?でしたら教えてくださいな。食べてみたいです。捌くのは明日にします。夜やると何が寄ってくるか分かりませんから。」

残念。でも、確かに家の中でやると臭いとかえらい事になりそうだしね。外でやって血の臭いに危険なのが寄って来たら村ごと危なくなる。

「そつか。じゃ、今度捌くの見せてくださいね。明日は僕用事があるので来れないんですよ。」

「あ、すいません。捌くのが見たくて下さったのに・・・」

「かまいませんよ。また取ればいいんですから。明後日一緒に狩りいきませんか？何か出ても守ってあげられますし、いろいろ教えますよ。」

「ありがとうございます、是非お願いします！」

「分かりました。じゃ、明後日の朝また来ますね。お母さんともうお休みに？」

「はい。今日は心配掛けてしまったので、疲れたんだと思います。そうでなくても日が暮れちゃいましたしね。」

「そうですね。食べ物はいっぱいあるんで、明日も食べられるでしょう。ミレイも怪我して大変だったんだから、明日はゆっくりしたほうがいいよ。」

「そうそう言い忘れてた。怪我したところに貼ってあるの、明後日まで剥がさないでね。」

「分かりました、これに何かあるんですね。剥がれない様に気をつけます。」

「そうしてください。あ、この三角の小さい粒はこのままでは食べにくいので持って帰りますね。それじゃ、僕は帰ります。」

立ち上がろうとすると、ミレイが驚いたように引き止める。

「これから帰るんですか？夜に森って危ないですよ！泊まっています！」「

「ありがと。でも大丈夫だよ。襲われても倒しちゃうから。」

そういつてミレイの頭を撫でた。完全に日が落ちたようで、暗くて表情が見えない。

「でも心配です・・・」

服をちよんとつまんでくる。かわいいね、そんなに心配してくれるんだ。軽く抱きしめて耳元でささやく。

「大丈夫だよ。僕の髪の色は何色だった？目の色は何色だった？」

まだ心配はしてるみたいだけど、納得もしてくれたようだ。

23話 一人ではない

さて困った。獲物に出てきてもらわないとどうしようもない。

予備の服がない。

今着てるのと予備二つ。それだけあれば十分だと3着しか作っていなかったのだ。

水洗いが出来るものではないので湿ったタオルで拭いて陰干しするだけだが、それでも替えたほうが気持ちいい。

今ある毛皮は熊やら猪やら、やたらと暑そうなものばかりなのだ。今は夏。そんなものの着たく無い。

風の悪魔が出てきてくれると大きさも毛の感じもいいのだが・・・趣味は悪いが。

しかし凄い名前だな。

”黒い悪魔”が”熊”のように、”風の悪魔”にも何か名前があるのだろうか？

それとも、ここでは”熊”という名前は無いのだろうか。

あと、神とか悪魔はいるのかね。

宗教観があるからこそその呼び名だと思う。

黒くて羽のあるのが集団で襲ってきたら嫌だな。

森の中だけで生活してきたから、他がどうなってるのか分からない。

草原に行くとライオンとかいるかな？

黄色の服もいいかもしれない。

虎は森では見てないな。どこかには居るのだろうか。

ミレイには、まず鍋をプレゼントしたい。

なましょく
生食ではない食べ方があると便利だ。

根菜は火を入れないと辛いだろう。

ああ、焚き火の放り込んで焼き芋でもいいのか？

アルミ箔に代わる物・・・無いだろうな。炭になるか。

完成させるには結構な日にちがかかる。乾燥やら二度焼きやらと工程が増えたのだ。

おかげで以前よりもずっと陶器と言える物になっている。

やり始めた時は本当に土器だった。土器だと水漏れが凄いいし簡単に壊れるのだ。

作り直すのが追いつかないほどで、ちゃんとした作り方を研究したほうが楽だと思い知らされた。

家に帰ったら鍋を焼く準備をしておこう。

そして久しぶりに向こうの世界で風呂に入ろう。

こちらでも風呂に入れるように風呂桶を焼き上げたのだが、この時間から湯を沸かすのは時間がかかる。

これから土をこねているとかなり遅くなりそうだ。どうせ明日は向こうに行ってコンタクトを買いに行くのだから、向こうで済ませてしまおう。

ごはんはどうするかな。

あれこれと考えながら家に向かう。
一人の時ではありえなかった楽しさを味わいながら。

24話 田舎もん ドッキドキ

翌日

近くの街まで足を伸ばす。住んでる町には眼鏡屋が無いのだ。それでなくても、同じ町の人に髪色を変えたとは知られたくない。気さくな人を演じていたならいいのだろうが、変人をしていただけにどのように思われるかを考えると気が重い。何も言われず可哀想な目で見られる気がするのだ。

迷ったのはヒゲだ。

髪は伸び放題ではあるが、綺麗にまとめて後ろに縛っておけば、まあよしとできる。

しかしヒゲはそうも行かない。

伸び放題。

似合っていればいいのだろうが、童顔のためまったく無理。色を抜いてあっても外人で通るわけではないのでどう考えてもおかしすぎる。

どうせ知らない人しか居ないのだからと無視するか？

剃り落として、向こうで不思議がられるか？

不思議がられよう。

こちらの世界で痛い目で見られる根性が出せなかった。

ヒゲが伸びていると、なかなか剃り難いにくという事が分かった。電気シェーバーは全く役に立たず、剃刀でもうまくいかない。

先ずはさみで短くして・・・短く整えた。

中間でいこう。

似合いはしてないだろうが整えてあるし、真っ黒ではないのでそれほど強い主張もしないだろう。

童顔を気にしていると思うってくれるとありがたい。

完全に剃っている訳でもないの・・・向こうでもいいんじゃないか？

髪を纏めてるのと合わせて、何とか言いくるめてしまおう。

「すみません。カラコン欲しいんですが。」

普段石鹸を使わない生活をしていることもあり、少し香水もつけてきている。

がんばってる感出てるのか、店員さんの営業スマイルが崩れることは無かった。

ものすごくほつとした。

あとは昼を食べて帰りますかね。

帰ったら調べ物と・・・決断をしなければ。

人として関わっていくか。

神として関わっていくか。

25話 結局上から目線じゃね？

ミレイに会いに行く。

約束通り一緒に狩をするために。

「おはようミレイ。今日も綺麗だね。」

丁度家から出てきたミレイに、いきなりな言葉をかける。
おー、真っ赤だ。

「お、おはようございます・・・」
俯きながら答えるミレイ。

「ここら辺だと、水場って何処にあるの？」

「少し行った所に川があるんですよ。これから顔を洗いに行くんですが、一緒に行きます？」

「ええ。一緒に行きましょう。」

昨日いろいろ考えた。

結果、やはり人として関わって行きたいと思う。

同じ人、同じような生活をする人として。

一緒に歩む仲間でいたい。

誰かの助けになれる。

役に立てる。

居る意味を見出^{みいだ}せる。

知るものの傲慢かもしれないとも思うが、役に立てると思う。

この世界の人間社会を発展させる。

人がより住みやすい世界に変えてやる。

その思いが、見るもの全てを輝かせているのだ。

・・・そうでなくてもミレイは綺麗だと思っけどね。

・・・ミレイに対する下心では無いと信じている・・・

「結構近くだね。これなら便利だ。」

「はい。ケイさんは何か川に用があつたんですか？」

「いや？単純に近くにあるのかなって知りたかったただだよ。」

「そうですか、では行ってきますね。」

川の向こうは草原になっている。何が居るんだろ。ちょっと楽しみだ。

先ずは森での狩り。森のほうを食べ物多いからね。楽しみは先延ばし。

26話 やつぱり、やじり欲しいよね

「じゃ、弓矢使ってみようか。」

森に入ってミレイに言う。まずどんな感じなのか見ておきたい。

「はい。じゃ、あそこの木を狙いますね。」

左足を前にして、右手に矢をつがえて引き絞る。
はずれ。

「矢をあるだけ全部やつちゃって。」

当たらない。癖も決まっていらないようで、てんでバラバラに飛んでいく。

「腕の問題じゃなくて、道具の問題かな。撃つ前にも見たけど、やつぱり飛び方が一定じゃないもん。」

矢が曲がっていたりするんだよね。羽も無し。
これでは難しいだろう。

「そうですか？でも、みんなはこれで狩ってますよ？」

「その方がすごいよ・・・じゃあまず、僕の矢を使ってみて？」

「鳥の羽が付いてますね。あつたほうがいいんですか？」

「その確認の為に撃ってみて。さっきと同じ感覚だね。」

「はい・・・えい！」

狙った木には当たったが、刺さらない。まあ鏃^{やじり}つけてないからね。

「当たったね。おめでとう。」

「はい、ちゃんと当たりました！ でも、刺さらないです・・・」

「まあそれはいいよ。大した問題じゃないから。弓が弱いんだしね。力が付けば強い弓も引けるようになるから問題無いよ。それに、木に刺さらなくても獲物に刺されればいいんだし。」

「そうですね・・・」

「あー疑ってるね？でも、多分僕が撃つても木には刺さらないよ？でも、うさぎは取れたもん。だーいじょうぶだった！」

「え？ケイさんでも刺さらないんですか？」

「うん。試してみようか？」

自分の持つ弓で撃つ。

木に当たって先が潰れる。

ちよつとびっくり。こんな風になるとは思わなかった。

「確かに刺さりはしませんでしたね・・・でも先が潰れるって、どんな力なんですか!？」

「僕も驚いたよ。いつもは小さいのを狙ってるんで、外れても地面に刺さるだけだから。でもまあ、刺さらないのは分かったでしょ？」

「そうですね。木に刺さらないのは当然なんです。ちょっと安心しました。」

「後は矢の改良だね。矢をまっすぐに削るだけでも結構いけると思うけど、羽なんて落ちてる物を拾ってつけちゃおう。んーで、力を付けるためにいっぱいごはん食べようね。」

「はい。いっぱい食べたいです。」

「じゃ、いっぱい取ろう？お肉はまだ取れなくても、食べれるのいっぱいあるからさ。」

木の実を集める。

鍋ができたら根菜なんかも食べれることを教えてあげよう。

27話 恐怖に歪む顔

「これだけあれば、お昼には十分だね。」

「はい。3人でお腹いっぱい食べれます。」

うれしそうに笑う。幸せそうだなあ。

「こんなに安心していっぱいごはん採れるなんて、夢のようです。ケイさんのおかげです。」

「じゃ、これから一緒にいっぱい採ろうね。そして、いっぱいいるんなの食べようね。ミレイが知らないだけで、他にも食べられる物、いっぱいあるんだよ?」

「そうなんですか?どれです?」

「今採っても食べにくいものだから、食べるための道具が出来たら教えてあげるね。楽しみにしておいて。」

「その道具があれば、あの赤い木の実も食べられます?」

「うん。その為にも今作ってるから、楽しみにね。あと、お母さんもごはんが食べやすくなるよ。お肉とかだと、弱ってる体には重たいからね。まず食べやすいもので元気になってもらおう。」

「そうなんですか・・・いつもお母さん、ごはん採ってきてもちよつとしか食べなかったのって、その所為なんですね。私に遠慮してるのかと思ってました。」

「ミレイにいっぱい食べて欲しいって思ってるのもあると思うけどね。」

親子助け合ってるんだなあ。感心感心。

お・・・何か気配。狙われてるか？

「ちょっと待って、ミレイ。何かいるみたい。」

「え！」

「ゆつくりこっちに来て、身を低くして。大丈夫。ちゃんと守るから。」

そう言って弓を取る。矢は残り2本。どうせこれでは倒せないだろうから、矢と一緒にチカラを放ってしまおう。

何処から来る？後るか？風は左から。なら右か？

ミレイの右側に立つ。

上！？

焦げ茶色に黄緑の斑^{まだら}。知らない奴だ。木の枝から飛び掛ってきた。右上に向けて矢と風を放つ。飛び掛ってきている以上、避けることなどできないはずだ。

矢は右肩に刺さり、風は頭を半分に切り裂いた。体には慣性が働き、結果抱きかかえるように倒れることになった。

血まみれである・・・

着替えもうないんだよな。

そんなことを思ってたため息をつく。

ミレイを見ると、もう一匹居た！

ミレイは恐怖に全く動けないでいる。

「ミレイ！」

死体を抱え込んでいるため起き上がれない。まともに動けない。チカラを使うにも集中も足りない為、身振りで補う。左手を振り、その五指の軌跡に合わせて風を飛ばす。

見事に胴を輪切りにした。

五指の分全てで切り裂いているので細切れになっている。

問題は・・・ミレイも血まみれだ。

肉片をかぶってしまったている。

「ミレイ、大丈夫かい？」

恐怖に固まっている。声も出ないようだ。

抱き起こして「もう大丈夫」と声をかけるも効果は無さそうだ。

幸いここは自分の家に近い。連れて行って休ませよう。

28話 もう落ち着いた？

家に到着。

獲物は空間転移で運んだ。今は燻製小屋に置いておく。

ミレイは抱っこしてきた。未だに僕にしがみつき、震えている。今まであんな体験は無かったのだろう。

震えが修まるまではこのままでいてやりたいが、飲み物くらいは用意しておきたい。

符術紙ふじゆしとナイフを転移で持ってきて、形を整えて血を付け式神つくを創りだし、飲み物を用意させる。

落ち着かせようとミレイの背中をさする。

もう大丈夫だから。安心して。

湯が沸いたので火を消し、ハーブを入れる。微かすかながらすっきりとした香りと少しの苦味のあるもの。おそらくこの世界特有のものだ。茶葉やコーヒーはまだ見つけていない。

熱くては飲めないだろうから、温ぬるくなった頃合を見てミレイに勧める。

「少しは落ち着いた？これ、飲んでみて。」

ぎこちないながらも少しずつ飲んでいる。飲むことが出来るなら、もう大丈夫だろう。

「ごめん、怖い思いさせちゃったね。」

「いえ・・・それでもケイさんはちゃんと守ってくれましたから。」

そつと微笑むミレイ。強いな。

「もう落ち着いたみたいだね。それじゃ体を綺麗にしようか。血まみれのままじゃ、お母さんが驚くよ。」

「そうね、確かにこれじゃあ驚かせちゃうね。近くに川つてあるの？」

「川じゃないけどね。体を洗うところを作つてあるんだ。行こう。」

風呂には水は張つてない。沸かす必要もないから貯水池で水浴びでいいだろう。

貯水池は汚れてしまふが・・・まあ諦めよう。一応流れてるしね。

「ここ。川がちょっと遠いから、作つたんだ。上がったらこれで体を拭いてね。」

タオルを置いておく。

「これを作つたんですかあ・・・凄い事しますね。」

「服も一緒に洗っちゃつてね。」

服を脱ぎだしたので、一声かけて燠製小屋に向かう。この間に皮を剥いで吊るしておこう。

皮を剥ぐのは未だにナイフだ。早く代わりを用意したい。

金属を作るようになるのが一番いいのだが、黒曜石でもいいから

見つけたい。

今のままでは見せられない。

村で肉を捌いてるなら、村の人たちは見つけてるのかな？
今度確認してみよう。

29話 異世界といえば魔法でしょ

小走りに村に向かいながら思う。

ミレイと交代して自分も水浴びをしたが、すっかりとはしたが水が冷たかった。

いつもは夜に少し暖めて風呂に入るのだが、昼間だから大丈夫だろうと思ったのが甘かったようだ。

ミレイは平気そうだ。いつものことなのだろう。

だからこそ余計に侮^{あなご}つてしまった。

これは風邪を引けるかな。

二人とも身綺麗にしたので急いで村に向かう。お昼は過ぎている。

ミリヤさんを心配させるし、お腹も空かしているだろう。

そこで思ったのだが、鍋が出来上がるのを待たなくても今まで使っていたものを持っていけばいいのではないだろうか。

そこに思い至らなかったのが情けないが、思いついたのだから持つて行こう。

昼はすでに待たせているので諦めて、夜は一緒に鍋を食べよう。

自分で鍋の道具一式を持ち、ミレイには昼用に採った食べ物を持ってもらっている。

小走りとはいえ、ちゃんと付いて来ているミレイ。

本当に弱いのだろうか？

それとも周りが強いだけなのだろうか？

「ミレイ大丈夫？」

振り向いて聞くと、声を出すのは辛いみたいでうなずいている。息は上がっていたのね。ちょっと安心。他の人が力の塊だったらどうしようかと思った。

まあみんなマツチヨだが。

男も女もムツキムキだが。

子供ですらなかなかのモノだった。

それ位でないと生き残れないのだろうが、それだとよくミレイは生き残れているものだ。

神に感謝しよう。

「ちょっと歩こうか。流石に疲れたよ。」

そう言って歩き出す。

それにミレイも合わせて、隣に並ぶ。

「ありがとうございます。このまま行ったら転んじゃってたかもしれません。」

お母さんには悪いが、もう少し我慢してもらおう。

「でも、さっきはどうやって風の悪魔を倒したんですか？いきなりバラバラになってましたよ？」

やっぱり気付くよね。

しかしあれも風の悪魔扱いなのか。多分違うものだよ？

「本当は、僕が狩りする時って弓矢使わないんだ。ああやって倒してるんだよ。」

もうチカラの事も話してしまおう。

「そのうちミレイにも教えるから、それまでは話さないでね？あれを見たミレイでも変だと思うでしょ？」

「そうですね。何が起ったのか分かりません。あんな事、誰でも出来るようになるんですか？」

「多分出来ると思うよ？ でも、誰でもできる物だって分かってもらってからじゃないと怖がらせちゃうかもしれないからね。だから、ミレイが出来るようになるまで内緒ね？」

よかった。チカラの事を思い出しても怯えているわけでは無さそう
だ。

「やっと村が見えてきたよ。」

30話 そよ風に落ち着く

「遅くなつてごめんなさい。」

家の中に入ると、ミリヤさんは寝ていた。

実はかなり具合悪いのかな？前に見たときは意外と元気そうに思ってたんだが。

でも、凄く痩せてるから体力無いんだろうね。

「お母さん寝ちゃってるね。どうする？起こした方がいいかな？」

一応聞いてみる。

「いえ、休んでいるところを起こすのもどうかと思いますから、このまま寝ててもらいましょう。」

まあそうだよな。

「じゃ、お母さんの分は取って置いて、先に少し食べちゃおうか。そして夕ご飯の準備しよう。ミレイの知らない事ばかりだと思うから、時間かかると思うしね。」

「そうですね。夕ご飯お母さんが気持ちよく食べれるんですよ？支度ががんばります。」

中にお母さんの分を取り置いて外に出る。

食べるなら外のほうがいい。中は暗いんだもん。寝てる人の傍でこそそそしないほうがいいしね。

桶で食べ物を持っていつて川原で食べる。後で水を汲んで持つていこう。

「風が気持ちいいですね。」

そよ風に髪を撫でられ目を細めているミレイ。

「そうだね。川原でそよ風を感じながらのんびりご飯食べるのも気持ちいいね。これから時々こんな風に外でご飯食べようね。」

「はい。調子がよければお母さんも一緒に外で食べましょう。ところで、夕飯の準備って、どんなことするんですか？」

「先ずは普通に食べられるものを採ってくるんだよ。ミレイが知らないものばかりだと思うから、しっかり覚えてね？」

「知らない食べ物ですか？やっぱり森の奥にあるんでしょうか・・・」

「あー、ごめん。言い方が悪かったね。食べられるって知らないだけで、見た事はあるものばかりだよ。」

大体が葉っぱや根っこなんだ。葉っぱや根っこを食べた事って、ある？」

「いえ、流石にそれは無いですよ。そんなの誰も食べませんよ？」

「まあ、そうだと思うよ。そのままじゃ食べられないからね。でも、そのままじゃなければおいしいんだよ？怪我した時に家で食べたの、おいしかったでしょ？」

「はい、おいしかったです。あれが葉っぱや根っこだったんですか？」

「そうだよ。もちろんそれだけじゃないけどね。じゃ、採りに行くか？」

「はい。なんだかワクワクします。」

調味料は塩に唐辛子に採りたての胡椒。気に入ってくれるといいな。

31話 自分の事は自分で・・・だったよね？

「とりあえずは、これくらいあればいいかな？」

ジャガイモ人参キャベツにトマト。説明しながら採り集めた。

「これが食べられるんですかぁ・・・ちょっと信じられないですね。」

「人参やキャベツはこのままでも食べられるけどね。あと味付けするものが欲しいから、また家に寄るね。」

そう言つて家に向けて歩き出す。

昼ご飯を持つていくときに一緒に持つて行つても良かったのだが、肉の血抜きに時間がかかるから、一緒に取りに来ようと思つてこなかったのだ。

ついでに、人避けの法があるからミレイ一人では入れないことを知つておいてもらつたのだ。

何かの時に、訪ねるつもりで迷子になられても困る。

「さて、家に着いたんだけど、ミレイ分かる？」

「え、着いたつて・・・家なんて無いですよ!？」

「うん。ちゃんと着いてるんだよ。でも、ミレイには分からないよ。うになつてゐるんだ。一人の時に来ようとしてもたどり着けないから、気をつけてね。」

「よく分からないですけど・・・ケイさんつて、本当に不思議な事

ができるんですね・・・」

「これは本当に特殊な事なんだけどね。だから、これはミレイには多分教えないと思う。覚えるのにすつごく時間がかかったから、それなら他のものを覚えて慣れた方がいいと思うからね。

じゃ、入るよ。僕に捕まって、目を閉じて、ただ付いて来る事だけを考えて。」

「はい、わかりました。」

後ろに回って服を抓む^{つま}ミレイ。
ゆっくり歩いて境界をくぐる。

「ほら着いたよ。目を開けてごらん？」

「ふあ・・・本当に家があります・・・」

「ちょっと待っててね。必要なものを集めてくるから。あ、後ろに下がると外に出ちゃうから気をつけてね。」

肉。塩。唐辛子。胡椒。欲しいものを集めてくる。

しかし、手荷物が多いなあ・・・毛皮を風呂敷代わりに使うか？いや、今手頃なのが無いな。

しょうがないか。最後の木桶も持っていってしまおう。

何かかごを作れるような蔓^{つる}を探さないとな。

「おまたせ。さ、戻ろうか。」

ミレイはまだキョロキョロしていた。

発見は、切るのに黒曜石を使っていた事だ。

肉を捌くのも、矢の先を尖らせるのもこれを使っているそうだ。

実際使ってみると、本当に切れ味がいい。これは便利だ。

鏃^{やじり}として矢の先に付けたりはしないのかな？金属が見つかるまではそうしていた筈なんだが、そこまで至っていないという事なんだろうか。

薪をまな板代わりに唐辛子を細かく刻んで胡椒は石ですりつぶしてトマト仕立てで鍋を作った。

お母さんは普段食べているのが重かったらしく、食べやすいといっぱい食べてくれた。

問題は鍋が小さいことだ。所詮は一人用に作ったものだからね。

大きいのを早く作ろう。3人では全然足らなかったので3回も作り直した。

その為か匂いの為か、周りの人たちも興味を持ったようだ。だから4回目の鍋はみんなに振舞うために作った。

食べさせてみると、みんな驚きながらも美味しいと言って喜んでくれた。

無駄になるかとも思いながらも一応と思い、鍋は5組焼く準備をしているが、無駄になるところか足りない感じだ。

焼き方を教えて自分たちで作れるようになってもらおう。

幕間 村人の会話

「おい、おまえは食ったか？」

「あの鍋ってやつか？ああ食った。」

「夏に食うのはちと熱いが、うまかったな。」

「ああ、うまかった。採ってきたモンをあんなふうにして食うのもいいな。」

「ああいいな。これから寒くなるんだ。体も暖まるし、もっとうまいと思えるようになるぞ。」

「そうだな。ミリヤのこのミレイが連れてきた奴が教えてくれたんだろ？」

「ああ。それで鍋をみんなにもくれたんだ。いい奴だな。」

「ああ。礼はいらないってんだろ？なんでこんな事してくれんだろうな？」

「礼の変わりに、これが気に入ったら、他に知りたいと思う奴がいたら教えてやれってんだろ？」

「ああ。礼を求めずに教えてやれつつってたな。」

「他の奴って誰なんだろうな？ここ以外に人居るの知ってるか？」

「知らねえな。でも、どつかには居るんだろうな。」

「ま、わざわざ教えに行く事はねえが、聞かれたら教えてやるさ。」

「ただでか？」

「ああ。されたことはしてやんねえとな。それが条件なんだから。」

「まあそつだな。食えるモンが増えたんだ。食うモンには困らねえしな。」

「代わりに知らねえ事があつたら教えてもらうのはありだろうけどな。」

「違うない。なんかいい事教えてもらえりゃ儲けモンだな。」

「教えてやるんだから、ただで教えてもらうのはかまわねえはずだもんな。」

「そつだな。誰か聞きに来ねえかな。」

「聞きに来ねえかな。」

32話 洋の東西

ミレイ親子だけではなく、村に受け入れられた。きっかけは鍋だった。

ミリヤさんには生食は重いと思い、調理する道具として鍋を用意したのだが、それが村人にもうけた。

調味料という物もなかったからそのままの味しか楽しめなかったのが、塩や胡椒で味を付ける事が良かったようだ。岩塩の在り処と胡椒を乾燥させて使うことを伝えると、凄く喜んでくれた。

それをきっかけにして、会えば軽く会話をするようになった。

そして驚いたのがミレイだ。

教えたのは江戸末期に起こった裏世界での西洋との技術交流で取り入れた西洋魔術の基礎のようなものだが、これを簡単に覚えてしまった。

西洋魔術で先ず思い浮かべるのは魔方陣だが、これは上級魔術でこちらには伝わっていない。

宗教や歴史背景、言語形態やらと絡むものが多すぎて、さわり程度の研究でも把握は大まかに出来てはいるのだが扱えないのだ。

扱おうとすれば出来はしたのだろうが、そうすると陰陽師としての技術を扱えなくなるし、両立や折衷ではどちらも駄目になるという事が分かったため、素直に独自技術を扱うことに決まった。

ちなみに、こちらの技術に基礎の修練はあっても基礎の術はないので、修練方法や概念を伝えている最中に匙さじを投げられたらしい。

西洋の技術は西洋で扱えばいい。代わりにこちらの技術はこちらで

扱う。

お互いの技術は取り入れられないことが分かったため、技術の秘匿など必要がないことが分かった事から関係は良好になっている。世情交換や手伝いなどが普通にある。

話がそれた。

基礎としての技術は、意識を4元素に重ねて扱うというものだ。これは教わったものから概念のみを取り入れ、扱えるようにしたものだ。

この世界に来て、頻繁に使っている風で物を切ったり土を動かしたりしているのがこれだ。

それをミレイは簡単に扱えるようになったのだ。扱えるだけでまだまだ未熟で、風で切るのではなく風を起こす事が出来ないし、土は石などの塊は動かせないし、火は枯葉に火は点くが薪に直接火を起こす事はできないし、水は手が湿る程度だ。

しかし、これは本来6歳頃から2年程かけてやっと扱えるようになるものだ。

大人に成れば成るほど覚えるのは難しくなる。

それなのに、おそらく17〜8歳に成っているであろうミレイが3日のできるようになったのだ。

しかしそれで、この世界の人はチカラを扱う才能があるのだろうか。他の人にも教えてみたが、なかなか扱えない。

ミレイ以外に扱えたのは、比較的髪色が薄いガズという少年だけだった。

色が濃いと体力に優れ、薄いとチカラに優れているのだろうか？
最近体調が良くなってきたミリヤさんが扱えるようならそうなのだろう。

今度教えてみようと考えている。

しかしチカラを教えるためにチカラを披露した為、どうやら恐れとか敬いとかの感情を持たれてしまったようだ。

やっと気軽に話せるようになってきたと思っていたら、また微妙に距離が離れた感じ。

ミレイの事があって安心していただけにちょっと怖い。

知らないことを教えてくれる便利な奴から、普通ではできないことができる特別な人になってしまった。

まあ、誰も扱えないチカラではないことが分かっているだけでもよしとするべきだろう。

33話 分業になりました

「ではみなさん、狩りがんばってきてくださいね」

狩りに出かける人たちをミレイが見送る。

村の人43人のうち10人が固まって狩りに向かう。

鍋が契機となり、各家庭ごとで食料を調達することから、村で調達する事変わった。

肉が主食だったのに比べて野菜を食べるようになってからは、肉は切羽詰った食糧確保という感じから食事を彩る食材という感じに変化した。

村人全員分で小動物2匹取れば十分な事から、それぞれが食事を用意することから分業になったのだ。

大人の内、狩りには10人、野菜採取に5人、休む者5人。
それを日ごとに交代で。

それ以外に焼き物を専門にする人が2人。

小さい子は留守番。大きい子供は好きに覚えたいものに付いて行く。

ここにケイとミリヤは含まれない。

ケイは村の人から特別扱いで、やりたい事を好きにやっていればいいとなっていて、体調の優れないミリヤは免除。

これも食糧事情が楽になったため、病人の面倒を見ている余裕ができたおかげだ。

それと、ミレイ働きのお礼という意味もあるかもしれない。

火・水・土・風を操る事を教えたのだが、その感覚を応用してか、

作物を生長させる事と怪我を治す事ができるようになっていた。
これはケイの一族でも知らなかった事だ。

元の世界でも医者とは古来より特別なものであったが、今まで怪我をしても治す手立てのなかったこの世界ではとても重要なものになる。
そのミレイがみんなと一緒に働いているのだ。代わりにミリヤを休ませることに異を唱える者などいない。

最近のケイは、ガズにチカラの使い方を教える事にしている。

「まず手を見て、手にに意識を集中してごらん？　手が重いような暖かいような感じになってくるかい？」

「ん・・・なんとなく暖かくなってきた・・・かな？」

「じゃ、その手をこの枯葉に翳かざす様にしてみて。」

「ん。」

「それじゃその手の暖かさを、ゆっくり枯葉に移してみて？　できるかい？」

「ん~~~~・・・むずかしいよ・・・」

「はは、ちょっと力みすぎかな？　力を抜いて、ゆっくりちゃんと呼吸しながらね？　息止まってたよ？」

「すーはー・・・もう一回やってみる！」

「焦らなくていいんだから、気楽にやればいいんだよ。コツとして
は、火が点いて下さいってお願いする感じかな？」

「うん・・・ あ！火が点いた！」

「やったね！おめでと〜」

「うん！ありがとう！」

「ミレイに続いて二人目だ〜 みんな喜ぶぞ〜」

「やったね！僕にもできた〜」

「一度できれば、後は簡単だからね。これからはもっと簡単にできるようになるよ。」

「じゃ、今日のご飯のときの火は僕が点けるね！みんなに自慢するんだ〜」

これがケイのすることがなくなった瞬間である・・・

34話 ただ伝えるんじゃ無いんです

「ミレイ入ってもいい？」

家でミリヤさんに付いているであろうミレイに声をかける。

「どうぞ、入ってください。」

相変わらず中は暗くて狭い。

そのうち家の作り方も変わっていくだろう。

「ミリヤさんの具合はどう？」

「もう随分よくなってるみたいです。今は眠ってますが、ご飯食べたら散歩に行こうと思ってますよ。」

「そりゃよかった。じゃ、そろそろチカラの使い方とか覚えてもらってもいいんじゃないかな？」

「そうですね。お母さんもその気になってますから、説明とかしていこうかと思ってます。」

「じゃ、それについてもちよつと話があるんだけど、外いいかな？」

「はい、わかりました。」

ミレイを外に連れ出す。

教え方とか聞きたいことなどがあるのだが、これはあまり他人には聞かれないのだ。

「今まで教えていなかった、教え方のコツを伝えておくれ。説明はミレイが聞いたことだけじゃなくて感じたことをできるだけ詳しく伝えていけばいいんだけど、実際にやってもらうのは、ただやってもらうだけじゃないほうがいいんだよ。」

「え？説明したことをやってもらう以外にどうすればいいんですか？」

「もうミレイはちゃんとできるように成ってるから言うんだけど、ただやってもらうだけじゃなくて、教える側が教わる側に意識を重ねて、できやすいように導いてあげるんだよ。教わってる時は気付かなかったでしょ？」

「はい・・・全然分かりませんでした。私やガス君にしてたんですか？」

「そうだよ。手伝いがあってもなんでも、一度出来ると後は出来やすくなるからね。でもそれを聞いていると、あまり効果がなくなっちゃうから出来る様になるまでは教えないんだ。」

「そうだったんですかあ。でも、それはどうすればいいんでしょう？ 意識を重ねるのは分かりますけど、どう導くんでしょうか？」

「意識を重ねると、結構分かるものんだけどね。相手に集める場所を言うと、意識をそこに向けようとするじゃない？ そのとき相手に意識を重ねていると、その感じがなんとなく分かるんだよ。僕に意識を重ねてみて？」

「はい・・・重ねてみました。」

「意識を集めてみるね。」

「あ、すごい！なんとなくですけど、手に集まってるんだって分かります。不思議なものですね。」

「集まる感じが分かるんだから、変な感じになっていたら教えてあげれるし、集まりやすいように後押しもしてあげれるんだよ。で、ここからはミレイが気をつける事。」

「はい？」

「相手に重ねられた状態だと変に操られちゃったりしやすいから、重ねられてると感じたなら跳ね除ける事！」

「きゃあ！・・・頭がふらします・・・」

「重ねられてる意識にさらに重ねる感じで、それを外に弾く感じで押し出すんだ。教えるために意識を重ねるのはいいけど、本当はこれって凄く危険だから教える目的以外ではしないようにね。」

「分かりましたけど・・・惨むじいです。すごい衝撃でしたよ？」

「そうだよ。でも、その衝撃も含めて知っておいて欲しかったからね。いきなりでないと構えちゃうからさ。」

「まあ分かりました。でも、ケイさんはいじわるです。」

「そう言われるのもしょうがないと思うけどね。でも、教えた相手にはちゃんと教えないと駄目だよ？ガズがちゃんと使えるようになる

って暫くしたら、ガズにも教えておいてね。」

「え？ケイさんが教えるんじゃないんですか？」

「ん？その方がいいとは思っただけだね。でも、僕は草原の方に行ってみようと思ってるからさ。ミレイにお願いしようかなって。それで、草原の事教えてくれる？」

35話 怖いところなんだ

「草原に行くんですか!？」

「うん。どんな所だか知らないからさ、行ってみようと思って。」

複雑な顔をしてミレイは言う。

「とても危険な所だと聞いています。そして食べる物の無い所だつて。だから、絶対に行っちゃいけないって言われていますし、誰も行こうとしません。」

「そつか・・・草原じゃ食べ物はないかも知れないね。それじゃ食べ物を用意して行く事にするよ。」

チカラだけでなく法も使うことを考えれば、大抵の危険は無視できる。それならば一度行って見てみたいものだ。いろいろな動物も居るだろうし、植物、特に綿などあってくれと嬉しい。

「でもちよつと残念だな。どんな危険があるかとか草原の先がどうなってるのかが分かると便利だなと思つてたんだけどね。」

「すみません。私を知る限り誰も行った人がいないもので、誰にも詳しいことは分からないんですよ。」

「いやいいよ。未知の冒険だと思えば楽しみだからね。」

「はぁ・・・そんなものですか? 私には怖いだけなんですけど・・・」

「

「そんなものです。ま、危険に関してはあまり心配してないって言うのもありますけどね。」

「それはまあ、ケイさんですからね。確かに心配は要らないかもしれませんがせんね。でも、暫く行っちゃうんですよね？会えないと思うと寂しいです。」

「ありがとう。でも、ずっと行ってるわけじゃなくて、先ずはちょっとみてすぐ帰ってくるよ。ちゃんとね。」

「はい。待っていますね。それでいつから行くんですか？もしかしてこれからとか？」

「いや流石にそれはないよ。今日は家に帰って、明日・・・明後日にしようかな。」

「出かける前に一度寄って行って下さいね。食べる物採っておきますから。」

「ありがと。それじゃ今日はこれで帰るね。」

今日は大人しく帰ってゆつくりしよう。

最近はお教えたり狩りに同行したりでゆつくりした時があまりなかった。

元々は一人でいる生活に慣れていたのだ。ミレイには随分馴染んでいるようであまり気疲れは無いのだが、それでも人目はまだ少し疲れる。

今日はゆっくりお風呂に入って休もう。

明日は買い物に行くかな。

久しぶりの元世界だ。食事もう恋しくなっているしね。

定食屋のおばちゃんも元気にしてるかな？

草原に行くに当たって何を用意しようかな？

荷物を持っていくなら荷物を入れる袋がある。袋を持っていくなら、格好も毛皮ではなく服でいいかな？

人には出会わないように気をつけよう。

危険だと言われているなら人に会うこともないだろうけどね。

一応符術紙は多めに持っていこう。

式神を多用したほうがいいだろう。

36話 うまくいくといいな

久々に感じる文明のありがたさ。

閉塞感を感じてしまうが、隙間風は無い。

秋になってからは朝寒さを感じるようになった。
季節はどちらも同じように変わっていくようだ。
多少気温の変わり方に違いがあるが。

これが環境破壊によるものなのだろうか。
それとも異世界は気温が低めなのだろうか。

低めだとすると、冬が怖いな。

雪が積もった状態で食べ物を探すのは大変になるだろう。

人は基本的には裸足だった。

最近は履物を作るようになってきているが、雪の中を動くにはかなり厳しいだろう。

ミレイが何かするかな？

チカラを覚えてからのミレイは凄い。

思いもしなかった使い方をしてくれる。

これが才能というものなのだろうか。

以前は村の人相手にも萎縮していたところがあったんだろうと想像できる。

非力・無能とみられていて、ただ親子二人食べるだけで精一杯だった。

たのだから萎縮するのも当然のような気もする。

その反動もあつて、チカラを身に付けて他人に認められるのが嬉しいのだろう。

役に立てるのが誇らしいのだろう。

以前見下されていたのに、チカラを身に付けたのに他人を見下さないのはありがたい。

チカラの有無による差別にでもなられたのでは都合が悪い。

あの世界の人には、朴訥^{ぼくとつ}でいてもらいたい。

こちらの世界のようににはなつて欲しくはない。

そうならないようにしていきたいと思っている。

その為に文明を伝えて、チカラを伝えた。

ミレイならば大丈夫だと思つての事ではあるが、今後どうなつていくのだろうか。

自分のしたことが原因で争いなどおこってしまったては、取り返しはつかない悲しみに潰されるだろう。

勝手な思いで世界に干渉したことが、いい事なのか悪いことなのかは分からない。

判断する基準など無いと思う。

いいことだと思えるように見守つて行きたい。

今日一日はゆっくりしよう。

食事の後はドライブでもするかな。

街まで行ってブラブラしてみよう。

相変わらず馴染めはしないだろうが、空気を感じてみようと思った。

芝生で横になるのもいいな。

大自然に包まれている割に、そんなことをした覚えが無かった。村にいろいろと落ち着かなかった。妙に声をかけられる。何かをしていないといけない気になる。

とりあえず車に乗ろう。自分の足以外で移動するのは久しぶりだ。先ずはそれを楽しもう。

37話 あたたかいね

さて、どうやって草原に出ようか。

洋服を着て行こうと思っていたのだが、出かける前にミレイの所に寄ると言ってしまった以上洋服はまずいだろう。

そうなると袋が問題だ。

草原では薪にも困りそうだし、荷物無しでは無謀だと思う。

せめて風呂敷を違和感無く使えるようになっていればよかったんだが・・・

籠を作る材料も何かみつかるといいな。

とりあえず今は式神にがんばってもらおうか。

人に見つからないように持ってきてもらおう。

服は皮で行くしかないか。村に寄ってから着替えるのも馬鹿らしい。

「ミレイ来たよー。」

丁度狩りに出かけるところのようだ。

これから狩りだと、餞別（？）は無いかな？

「ケイさんこれから出るんですか？」

「うん。早いほうがいいと思ってね。」

「じゃあ、ちょっと待ってくださいね。ごはん用意してありますから。」

朝ごはんがあるってことかな？

朝は軽くパンを食べてきているんだが・・・

「はい、どうぞ。食べる物と、あと必要になりそうな物を用意しておきました。もって行って下さい。」

皮を風呂敷代わりにして一包みに荷物が纏められている。

こんな大きな皮、まだあったんだ？使えそうな物は全部服や靴になったと思ってた。

「まだこんな大きな皮あったんだね。知らなかったよ。」

「いえ、丁度昨日採れたんですよ。だから急いで用意したんです。あると便利ですよね？」

「そうだね。凄く助かるよ。ありがとう。」

「いえ、いつもケイさんには好くして貰ってますから。では、氣をつけて行ってきてくださいね。」

「ミレイも、みんなも氣をつけてね。行ってきます。」

みんなにも無茶をするなよとか笑顔で見送ってもらえた。本当に氣のいい人たちだと思う。

いつまでもこんな感じでいてくれるといいな。

コンタクト外しているのにも気付かれ無かった様だ。

もう黒い事を気にしなくてもいいのかな？

いきなり色が変わったとしても、そうなんだで済ませれるような氣もする。

樂觀しすぎかな？

打ち解けていると思っているが、大丈夫だろうか。

最初に誤魔化した事をちよつと後悔する。

38話 でちゃったよ・・・

川を挟んだ向こう側、なだらかな上り坂になっている草原。たどり着くのにはまず川を渡らなければならない。

急流なわけでも深いわけでも無い、夏に子供が水遊びするのによさそうな程度の川はあるが、橋など当然ない。

渡る為に橋を作っても、草原を忌避する村の人たちには迷惑だろう。

岩で飛び石でも作ろう。

村の近くで作るよりも、少し下流に作るのがよさそうだ。

子供が万が一川で流された時などには助けやすくなるだろう。

そう考えて川原を少し下流に歩いていくと、川の半ばあたりに岩が顔を出している所があった。

適度に村から離れているし、ここが都合がよさそうだ。

他に岩が無いか周りを見渡すが、良さそうな物は見当たらない。

森から持ってくるか？それもどうかと思う。

ふむ。

地面に手を付いて辺りに意識を浸透させてみる。

注意して感じしてみると、土と石と岩の判別ができた。

早速岩を二つ、チカラを使って掘り出す。

なかなかゴツゴツとした岩だ。足場としては安定してはいないが、自分が渡る為だけなのでかまわないだろう。

それを空間転移で川の水面から落とす。

それほど大きな音はしなかった。

盛大に「どつぱーん」とやると気持ちがよさそうではあったが、村まで聞こえて驚かすのもどうかと思うのでやめておこう。

間隔はちよつと広めになった。

またいで足が届く距離では無いが、ちよつとジャンプすれば楽に渡れる。

岩の上をひよいひよい渡って川向こうに到着。

先ずは丘の上に上^{のぼ}ってみよう。

見た限りにおいて、動物はいない。

水場の脇にこれだけ草が生えているんだから、草食動物がいてもいいだろうに。

村の人たちが狩り尽くした訳でもないだろうし、何かあるのだろうか？

ちよこちよこ小さな花がみられる。

何か面白いものでも生えていないか見ながらのんびり歩いていき、丘の上に立って先を見て驚いた。

恐竜がいた。

それほど大きそうにも見えないが、見た感じとしては草食の恐竜だ。体は丸い山形で長い首と尻尾。色は濃い緑だろう。

そんなのが群れているわけではなく、ちらほらと点在している。

なんだこれは。

全体的にのんびりした感じなので、それほど危険だとは思わないが、人と恐竜が一緒の時代に居るとは・・・

確か恐竜は、もっと温暖な気候だから生息できた爬虫類。
四季のあるここでは冬などどうしているのだろうか。

呆然と見つめる事しかできなかった。

39話 届かない手

どれくらい呆然としていたのだろうか。

時間の感覚が無くなっていた。

太陽はまだ真上にはきていない。それほど長い間立ち尽くしていたわけでは無いようだ。

もう少し近くで見ようと思おうと前に進もうとして、前が崖とまでは言わないがかなり急な下り坂になっている事に気がついた。

まだショックが抜けていないようだ。あと3歩も歩いていたら、下まで転がり落ちていただろう。

間違いない大怪我をしていただろうし、最悪死んでいたかもしれない。

一息深呼吸して、気を取り戻す。

ここを降りるのはかなり危険だし、降りたら登ってはこれないだろう。

周りを見渡してみる。

この急斜面はかなりの長さ続いているようだ。なだらかになっていく所は見当たらない。

この急斜面のおかげである恐竜のようなものは村の方には来れないのだろう。

まずは降りれそうな所を探そう。

右も左も分からないのだ。適当に先ほどの川の下流側に向かって崖にそって歩く。

足場はしっかりした土だ。

硬い岩場ならば分かるのだが、何故こんな急斜面ができあがったの

だろうか。

地殻変動で隆起したのなら崩れているだろう。
かなり不思議な地形に思える。

お昼を挟んで歩き続けたのだが、どこまでも続いている。

下には草原だけでなく、時には森林、時には池などがあつた。遠くには山もある。

動物が狩りをしている様子も見られた。

しかし、大自然の営みの中に人は居ないようだ。

家や火などの人が生活している痕跡は見られない。

もちろん人の姿も。

日暮れ近くに池を見つけたので、今日は諦めて夕飯と寝床の用意に取り掛かる。

先ずは待機させてある式神に荷物を持ってくるように伝える。

今まで持つてこさせることを忘れていたのだ。

下からは見えない位まで下がって薪に火を起こす。

食べ物に火は要らないが、随分涼しくなってきたので暖をとるためだ。

火を見ていると落ち着く。

村で生活していたのが嘘の様だ。

ここはどんな世界なのだろう。

未だにうまく働いていない頭でつらつらと考えていると荷物が届いた。

夕飯にはミレイからもらった分の残りを食べて満足したが、追加で

荷物からプリンを取り出して食べる。

疲れたときなどには甘味がいいと持ってきておいたものだ。
疲労のためというよりは気分転換の為に食べたくなった。

石器時代にプリンを食べるのもなかなか不思議な感じが味わえるとは思っていたが、さらに恐竜が居るところで食べると思うと妙に笑えてきた。

40話 お仲間発見

寝袋での目覚め。

池で顔を洗って朝ごはんはんにパンを食べる。

昨日に倣^{なら}って今日も崖沿いを歩く。

そうして少し歩いて行くと滝があった。村の近くにあった川がここで下に流れていくのだろう。

だとすると、先ほどの池はこの滝の手前にある貯水池といった状態になるのだろうか。

なんとも都合がいいことだ。雨が少なくてもこの池まで来れば水には困らないだろう。

川に土で橋を架けて渡って先に進む。

ここまで来て、草原に出るより先にこの崖がどこまで続いているのか気になり、確かめてみようと思うようになったのだ。

家に付けてある印からあまりに遠くなる様ならまた考えるが、この崖が丸く円を描いているように思えてきたのだ。

もしかしたらこの場所は崖で一段高くなっているのかもしれない。そう思えてくる。

ミレイには2・3日で帰ると言っておいたが、ずれても大した問題では無いだろう。

家がある森が山の中だという事を考えると、一周回るのは10日では足りないか？

一月かかることは無いだろうと思いたい。

幸い川がなくなっただからか、森が崖の近くまで来ている。食べ物に困ることは無さそうだ。

水はそれこそ自前で出してしまえばいい。

もともと一人で森の中に住んでいたのだからなんとでもできるという思いがある。

どこまでものどかな散歩。

何かに襲われることもないし、下の世界も別世界と見下ろしてられる。

たまに肉食の恐竜に追いかけて群れで逃げていく動物を見かける。

あれはティラノサウルスか？

頭が大きいこともあって形は似ているが、小さい気がする。

確かティラノサウルスはかなり大型だったと思う。違う種類のものだろうか？

向こうの世界と全く違ってもおかしくないんだから、違う進化を辿っていると考えたほうがいいのだろう。

プテラノドンなんかがいってくれたら、乗って空を飛んでみたいと思う。

見かけた鳥型は、地面を走っていた・・・

翼があつて、羽ばたいているのに飛ばない。

体を軽くしているのだろう。速さはものすごく早くて、逃げることに成功したようだ。

遠くのほうに海らしきものが見えた。

最初は湖だろうと思っていたのだが入り江のようで、くびれた先は広がっている。

遠いなあ・・・

昆布にわかめ。海産物も欲しいと思う。

夕暮れ頃、前に人影がみえた。

流石に人があの村だけという事は無かった様だ。

行き来するか拒絶するかは分からないが、にぎやかになりそうだ。

41話 コミュニケーションの取り方は？

見つけた子は、まだこちらに気付いた様子も無く何かを抱えてチョコチョコと森のほうに歩いていく。

夕日で分かりにくい緑の髪に茶色の毛皮を着ているようだ。

また緑の髪色とは珍しい。

髪の毛の色は薄いか濃いかだと思っていたが、他にも種類があるようだ。

そうすると、目の色も違うのかな？

とりあえず声をかけてみようと思ったが気付いた。

子供じゃない。とゆうか、人じゃない？

頭が大きくて・・・4頭身くらいか？

身長は1m程だ。

そして髭が生えている。

髭の生えている子供は居ないだろう。

もう森の中に入ってしまっただけ見えなくなったが、あれはなんだろうか？

下手に近づいて行って、襲われたら大変だ。

チカラがあるから戦っても勝てると思うが、人型のものを殺すのは勘弁願いたい。

どうするか？

とりあえず式神を呼び出してどこにいるか探し出してもらう。
存在の薄いものだから気付かれる事はそうそう無い。
その上で気付かれないように注意して探すように伝える。

小人だ・・・

小人と言えば白雪姫の7人の小人？

まさにそんな感じだ。　つぶらな瞳とかだといいな。

鋭い目で、にたらつと笑われたら怖い。

西洋にはそんな怖い小人の話もあった気がする。

式神から知らせが来た。森に少し入ったところに穴があり、その中にいるらしい。

外には居ないようなのでゆっくりそちらに向かう。

穴は木の根元にあった。自分で掘ったのだろう。

そしてその穴には蓋がされていた。

金属で。

結構な塊である。

どこからこんなものを見つけてきたのだろう。

精製したのだろうか？出来るのだろうか？

だが、これでなんとしても話をしてみたくなった。

金属は欲しい。なんとしても欲しい。

金属があれば刃物が作れる。とても便利になるのだ。

今まで探してもみたのだが、見つからない。

単純に金属がどんな形であるのかが分かっているのだから、見つ
けられないのも当たり前なのだが。

さて、どうやって仲良くなるのか・・・

41話 コミュニケーションの取り方は？（後書き）

磁石を持ってきて引きずっていれば砂鉄が集めれるという事を忘れていました。

主人公も忘れていたという事で・・・

42話 意外な行動

日が落ちて暫くの間待っていたが、出てくる様子は無い。

おそらく抱えていたのは食料で、今はもう眠ったのだろーと思いい自分も眠ることにした。

明日どうやって話しかけようかね？

まあ・・・暫く観察してから考えればいいか。

観察するにも出てきてくれなければ見る事もできない。

朝起きてから木の上ですっと見ているのだが、出てこない。

もしかして違うところにも出入り口があるのだろうか？

不安にもなるが、まあ気長に待ってみよう。食事を取る以上いつかは出てくるのだから。

夕方まで待ってみたが、出てこない・・・

抱えていたのは食料ではなかったのだろうか？それとも貯え？

ただ木の上で待っているのに飽きてしまったので、一度地面に意識を通して地下がどうなっているのか確認してみよう。

木から降りて少し離れてから地面に手を付いて意識を通してみる。

穴を確認。思ったより小さい？

生き物が住んでいるのなら蟻の巣のように中で広がっているかもしれないと思ったのだが、ただの寢床のようだ。

部屋のようなものが2つあるだけ。

しかし穴の壁は金属で隙間無く覆われていた。
どうやってそんなことをしたのだろう？まさか部屋を作って埋めたわけではあるまい。

部屋の造りに驚いていると、向こうも何か慌てている。ばたばたと二人急いで出てきて周りを見回している。

丁度いい。声を掛けて見よう。

「どうしたんですか？」

「あんた、何かしたのか？」

「はい？ いえ、何もしてませんが・・・ どうしたんです？」

「分かんが、急に大地が騒ぎ出した。おまえさん外に居ったんだろ？何かなかったか？」

これは・・・意識を通したのを感じたという事だろうか？

「あー、もしかして、この所為ですかね？」

そう言って地面に意識を通してみる。

「おまえさんか！いったい、どうやってやったんじゃ？何をしたんじゃ？」

「えー、地面に意識を通したんですが・・・意味分かります？」

「いや、よく分かん。分かんが、おまえさん、もう一度やってみてくれんか？」

「あ、はい。いいですよ。」

何が何やら全く分からないが、とにかく言われたとおりに地面に意識を通すと、

「おお！」

と言って二人とも土を掘って食べた。

「え。」

あまりの事に固まってしまった。土を食べた????

「むう。うまいが、持ち上げちまうと大人しくなっちまいよるな。すまんがもう一度頼む。」

頭の中は固まったままだが、言われるがままに従う。
今度は地面に腹這いになって直接食べ始めた。

「最高じゃ！わしの勘に狂いはなかった。騒いでおる時に食つと滅茶苦茶うまい！」

うまいんだ・・・

43話 交渉してみた

「いやあ、すまなんだな。あまりの美味うまいさに取り乱しちまったい。」

そうとう美味しかったらしく暫く騒いでいたが、やっと落ち着いてくれた。

話を聞いてみると、この人達には名前が無いらしい。

二人だけで生活をしているので名前など要らなかったそう。

そして今までお互い以外では同じ種族の人にあつたことは無いそう。

それどころか、この二人には親も居なくて、元々は一人だったのが別れたんだそう。

自分でもよく分からない時から居て、ある時もの凄く眠たくなったから眠って、目が覚めたら二人に別れていたそう。

確かにそれなら名前など無いだろう。

付けてあげても良かったのだが、見た目が同じで名前をつけても区別できそうも無かったのでやめておいた。

しかしまあ・・・細胞分裂？ どう見ても単細胞では無さそうなのだが・・・

なかなか特異な体をしていらっしやる。

そしてこちらにとって重要な事。

部屋や入り口をふさいでいた金属は、土を食べた後の二人の食べカスらしい。

歯に詰まるわけでも尻から出てくるわけでもなく、出そうと思う時

に体から滲み出すそうだと。

普段は手から出して、入り口の塊に擦り付けるようにしているとの事。

それだけでも十分不思議だが、極めつけは彼らは自分で出した金属を割りとは簡単に形を変えられるそうだと。

指で抓んでウニウニと。

なんとも不思議ながら便利である。

部屋の壁に付けているのは、地下に住むものが落ち着くが虫が出てくるのが鬱陶しいから入れない様にする為だそうだと。

地下が好きで土を食べるのにミミズや幼虫は嫌なんだ。
なんか不思議な気がする。

口に入れた土に入っていたらどうするんだろうと？

入り口にある塊は最近の遊びで、大きくしてみようと出した物を二人ともあそこに擦りつけているんだそうだと。

だから、もはや二人にもどうにも出来ない状態になっている。

自分の出した物でないと弄る事はできないんだってさ。

見た目そっくりで元は一つの体だったとしても、今は違う別個の人だという事だろうと。

今度出した金属で何かを作ってもらう約束をした。

報酬は意識を通した土で。

見事なギブアンドテイク？

あんな塊じゃ、持っていく事も加工する事も出来そうにない。折角二人の成果なんだしね。

新たに用意してもらって作ってもらおうと。

やっぱり刃物かな？黒曜石でも切れるけど、すぐ欠けちゃうんだよね。

今すぐ材料が出てくるわけでは無いみたいなので、今度来た時に作ってもらう事にした。

見本にナイフを持ってこよう。

そんなやりとりをして、その日はお互い眠りについた。

44話 次いつてみよー

朝目覚めて、今日からまた旅立ちだ。

彼ら二人は引越す意思はないそうだ。この場所を離れたくないらしい。

睡眠時間はやたらと長いらしく、昼前に起きて夕日が沈む前には寝てしまう。

おかげで見送られる事無く気楽に旅だてる。

彼らは・・・ノームの様な者なのだろうか？

金属を扱えることから考えるとドワーフだろうか。

なかなか面白い人たちだった。

二人だけで生活をしてきていたのに良くしゃべる。

あっちの土は癖があって面白い味だとか、味は落ちるが石は歯応えが心地いいとか、獣に出会っても襲われる事が無く、たまには背に乗せてくれるものも居るらしい。

獣達が怪我をしないようにと出した金属をそこらに捨てるのではなく一箇所に纏めたのが入り口にあった塊の始まりらしい。

環境やご近所さんに配慮出来る人たちだ。

獣と仲がいいなら、獣を食べる自分達とは上手くやっていけないのだろうか？

拒絶されたくなくてまだ告げていない。

告げた方がいいのだろうか？

彼らからしたら、他者を殺して喰らうのは恐ろしい事に思えるだろう。

それとも、獣同士で行われる食物連鎖・摂理と割り切るのだろうか？

これから仲良くしていけたらいいな。

二人の下から離れて3日程歩き続けた。

他にも知らない種族や人などが居ないか期待しながら辺りに目を向けたが、流石にそう居るものではない。

いつそ恐竜から進化したような人でも居てくれたら面白い。

思いつきで思ったただけだったが、

「実際に居てもおかしくは無いのではないだろうか？」

と思い至ったら恐ろしくも惜しくもなかった。

元が恐竜ならばおそらく相当な強さだろう。

そして、恐竜が進化したなら祖先である恐竜を狩ることに抵抗があるだろう。

あれが本当に恐竜と呼ばれる物かは分からないが、一度食べてみたいし皮などは重宝する物だろう。

それらに手をつけることを諦めなければいけなくなると思うともったいないと感じてしまう。

自分の想像に身勝手さを感じてあきれたした頃、新たな村を発見した。

場所はおそらくミレイの村の丁度反対側辺りだろう。

ミレイに村は家から真っ直ぐ降りた辺り。

そして今感じている印の位置は自分と山の頂の延長線上だと感じる。

真反対の位置にあったのでは、今まで出会う機会など無かつたろう。
山の森は普通に入るにはかなり危険だ。

熊や風の悪魔やらに遭^あう危険を犯してまで奥に入る理由など無いだろうし、裾野を歩いて反対にまで行かなければならない理由も無い。

自分のように興味本位で歩き回るような余裕などあるはずも無いのだから。

では、出会いに行つてこよう。

45話 大変な事になってるんですが・・・

村の規模はミレイの所と同じくらいか？

10件程の家が、真ん中の小さな池を囲むようにドーナツ状にある。

そろそろ夕食の時間になろうとしているのに、村人は池の傍に寄つて屈みこみ、暗い感じに落ち込んでいるように見える。

大人子供合わせて30人くらいは居そうだから村人のほぼ全員が集まっているのだろう。

「こんにちわ、みなさんどうされたんですか？」

出来るだけ軽い感じに声をかけてみた。

「あんた誰だ？何の用だ？」

「私はケイと言います。向こうの方から歩いてきました。何かあったんですか？」

「ここのお水様が元気をなくしちゃってるんだよ。このままだと俺らも生きてけねえ。もうどうにもならねえんだよ・・・」

「ここのお水様？ よくわからん。」

「お水様って何です？そちらに行ってもいいですか？」

「お水様はお水様だ。他に何かある？ 来るのはいいが、水はやれねえぞ。」

お水様と水は違うもののようにだ。池の事でも無いよな？

行ってみてみればいいかと近寄ってみると、不思議なモノが居た。

これが妖精っていうものなんだろうね。

池の中に、水で出来た人型のものが居た。

池にとつぷりと浸かっているのに、同じ水で色の違いなど無いのに何故かちゃんと形が分かる。

お水様だ。

「お水様ですね。今まで見た事も無かったですが、これがお水様だって分かりました。どうされたんでしょうか？」

「わからねえ。ここんとこ、どんどん元気をなくされてたんだが、とうとう動けなくなっちまったみてえなんだ。」

「お水様の事教えていただけますか？もしかしたら元気になってもらえるかもしれないんですが。」

「何いつてんだ？知りもしねえのに、何かできるってのか？」

「もしかしたらなんですけどね。お水様ではなく（ちょっと違うが）土の精なんですが元気にはできたんですよ。だから、もしかしたらお水様も元気になって貰えるかもしれないなと。」

「ほんとか？また元気になって貰えるかもしれないねんだな？なら何でも聞いてくれ。元気になってもらえるならなんでもするぞ。」

「お水様って、普段何をされてるんです？」

「この池が枯れないように水を満たしてくださるんだ。」

「じゃ、どうやってこの水を満たしてくれてるんです？ あと、普段何を食べてるんですかね？ 分かりますか？」

「わからねえなあ。ただ水が無くならない様にしてくれてると聞いているだけだ。何かを食べてるのは見た事がねえ。」

「後もう一つ。お水様って、水から出てても大丈夫なんですかね？」

「それは大丈夫だ。時々池から出てきなさる事もあった。」

「わかりました。いくつか試してみたい事があります。何とかできるかもしれません。まあ出来ないかもしれません。」

何か水を汲むものつてありますか？ お水様が入れるくらいの大きさがあるといいんですが。」

思いつきり安請け合いですね。

46話 ミレイ復活！？

自分が作ったような、木を繰り抜いた桶があるそうだ。

随分昔から池で直接洗い物をしたり水を飲んだりするのはお水様に失礼だと、必ず桶で水を汲んで使うようにしているとの事だ。

洗い物にも使うため、結構な大きさの桶だ。

先ずその桶を受け取り、池の水ではなく自分で出した水で桶を満たす。

そうすると周りの人が驚いて平伏しだした。

これはもう水に対する信仰ですね。

水が無くては生きていけないところに、お水様なんていう摩訶不思議なモノが水を用意してくれていたんだから水に対する信仰の様なものができていておかしくない。

というか、当然かもしれない。

これはある程度誰にでも出来る事だと説明して、後で適正のある人には出来るように教えると伝えておく。

ここには髪の色が薄い人が多い。使える人は結構いそうだ。

桶を地面に置いて、お水様を両手で救い上げて中に入ってもらう。

触った感じはスライムの様な感じだ。プニョプニョしていて冷たくて気持ちいい。

手を掴んで引つ張るとどこまでも伸びそうな気がしたが、今やつていい事ではない。

流石に入れただけでは何の反応もなし。

もしかしたら水が汚れたからとか何か変な物でも混じったとか、池

の水の所為だったならこれで良くなるかもと思ったのだがそんな事は無かった。

では第2案。桶の水に手を触れ、水に意識を通す。

お！反応あり。ピクツと動いた。

「気がつきました？」

一応声をかけてみるが、答えは無い。

水に意識を通したまま少し待ってみるがそれ以上動く事は無さそう
だ。

では第3案。両手を水に入れて、お水様を包むようにして直接お水
様に意識を通す。

感じとしては水を出すのではなく、お水様を慈しむ感じで。

すると反応があった。

今まで”つるん”としたクリオネの様な姿だったものが、より人間
らしくなっではつきり顔が浮き出てきた。髪まである。

女性の様・・・というか、ミレイを小さくしてみたみたいだ。

色も水と同じだったのが全体的に濃淡のある青い色がついた。

そつと目を開いてくれた。

「ありがとう。気持ちいいわ・・・」

そう言つてまた目を閉じた。

「・・・もう大丈夫なんだよね？」

そう言ってからチカラを納める。

「ああんもう！何でやめてしまうの！？　せつかくいい気持ちだったのに！」

見かけはミレイだが、中身は随分違うようだ。

がばりと起き上がり、腰から上を水から出して腰に手を当ててご立腹のご様子。

その声を聞いて、今までずっと平伏していた人達が顔を上げてこちらに擦り寄ってきた。

お水様が元気になったのを見て感嘆の声を上げて喜んでいる。

が、今は放置で。

「随分元気になったみたいですね。楽しむのは後にして、何で元気を無くしてたのか教えてもらえますか？」

47話 どうしたんでしょう

「なんで元気を無くしたかですって？そんなの決まってるじゃない。元気が無くなったからよ！」

んー・・・すばらしい。

これはどう相手すればいいんでしょうか？

いっそ放置で帰っていいかな？ そんな訳にはいかないけど。

「ごめん。聞き方を変えるね。今までなんでここにいたの？」

「さあ？」

「村の人を助けてたみたいだけど、なんで？」

「なんででしょうね？」

「池を水で満たしてたそうだけど、大変じゃない？」

「大変なんでしょうね？」

「普段何かたべてるの？」

「あなたのお水は美味しかったわ。」

「ちゃんと答える気ある？」

「ちゃんと答えてるじゃない！質問はもういいわよね？じゃ、さっきの続きよ。気持ちよくしてー！」

何かやらしい言い方だと思ってしまう事に罪は無いはずだ。

まあいいか。気持ち良くなってくればちゃんと話してくれるかもしれないよね。

「はいはい、分かりましたよ。どうですか、気持ち良いですか？」

「・・・あなた私の事馬鹿にしてるでしょ。」

「いいえ、そんな事ありませんよ。お役に立てれば幸いです。」

「・・・だつてしょうがないじゃない。よく思い出せないんだから。」

「うん？よく思い出せないの？」

「そうよ。なんとなく覚えてるんだけど、はっきりしないのよ。池の底にあるのは分かるのに、水が濁つてて良く見えないような感じ？すっごくイライラしちゃう！」

「なんとなく分かったよ。もしかしたら、さっきこうやってキミに意識を重ねちゃったからかもね。キミの記憶に僕の意識がかぶっちゃったのかも？」

「じゃ、あなたの所為ね。私は悪くないわ。」

「姿も変わっちゃったしね。何かおかしいとか痛いとか、嫌な感じはある？」

「それは大丈夫よ。こうして気持ち良くしてもらってるんだもん。おかしかったとしても分からないんじゃないかしら？」

それはすごく問題だと思うよ・・・

おそらく、意識を重ねて癒そうとしたのが、効果が違って生まれ変わっちゃったみたいなものか？

これはもう、本人に聞くよりも村の人に聞いたほうが良さそうだ。

48話 火を扱うのが人の証

村の人に聞いてみると、やはり今とはかなり違うようです。

姿は最初見た時のように”四肢のあるもの”程度の姿で、今のように人のような姿ではなかったとの事。

声も昔は淡い感じに響くように”そう聞こえる”程度の言葉でしかなく、今のように人と全く区別がつかない様なはっきりしたものはなかった。

声に抑揚がついた所為か、今でははっきり感情が表れているが、昔は感情など感じ取れなかった。

意識を通した結果、お水様の自我がはっきりしたということだろうか？

これは進化したという事だろう。

お水様は意識の塊という事だろうか？

チカラは意識を通すことによって通した物に願い通りになってもらう力。

お水様に通したチカラには癒しをイメージしていた。

本来は癒しのチカラで癒されるのだが、癒しのチカラを取り込んで自意識をはっきりさせた。

僕の中で癒しの人はおそらくミレイ。そんな無意識的なものまで取り込んだから姿がミレイに似たんではないだろうか。

村の人に聞いても村がいつからあるのかも、いつからお水様が居るのかも分からない。

当然何故お水様が助けてくれたのかも分からない。

お水様に意識を通し続けて、意識を与え続けると二つに分裂したりするのだろうか？

いつか試してみたい。

今は日暮れ。

村の人は今日ついに水様が動かなくなってしまうて、狩りをする事も忘れてずっと集まって嘆いていたそうだ。
当然ご飯など無い。

「申し訳ありません、ケイ様。お水様を助けていただいたあなたをもてなしたいのですが、今は何も食べるものが無いのです。すぐ何か採ってきますから暫くお待ちください。」

「もう随分と暗くなっていますが、大丈夫なんですか？」

「森の奥にまで入って探そうと言うのでは無いので、御気使いには及びませんよ。その分量も種類も大したものでは無いと思いますが、本当に心ばかりの物になってしまおうと思いますが、ご容赦下さい。」

折角もてなそうとしてくれているのに、自分も採りに行きますとも言えない。大人しく待っている事にしましょうか。

「わかりました。楽しみに待たせてもらいますね。その間に火を起

「こしておきますね。」

「え、あ、申し訳ありません。本当に申し訳ないのですが、火を起すのは止めて頂けますか？お水様が嫌うものですから・・・」

「そうなんですか？ちよつとお水様に聞いてきます。」

水は火を嫌う？

しかし、意識の塊であろうモノなら構わないのではないか？

確認したい。

49話 相性って何？

「火を嫌がるって、ほんと？」

単刀直入いきなり聞いてみる。

「はあ？ 何言ってるの？私を知る訳無いじゃない。火って何？」

池は分かっても火は知らないんだ。その認識程度なら、火を嫌がらなくなってるのかな？

「覚えてないなら大丈夫かな？ じゃ、一度点けてみるね。」

一歩下がって手のひらの上に火を一瞬だけ作ってみる。

「今のが火？一瞬じゃよく分からないわよ。でも、嫌な感じは感じてないわよ？もう一度しっかりやってみて。」

お許しが出た。今まで火を使ってきていないここでは薪など無い。どうするかな・・・手の上で出し続けてみるか。

「どうです？何か感じます？」

一瞬だけとはいえ、火を出しても嫌な感じを受けていないんだ。わざわざ離す必要もないだろう。

しゃがんで、お水様の目線で火を出してみる。

しかし、これは普通にチカラを使うよりかなり集中が辛い。手に触れると熱いから”手から離れた状態”で、”何も無い所に安定させる”のはかなり疲れる。

「これが火か」。なんかあったかいね。　うん、気持ち良いかな。」

お？真逆の反応。相当に意識に影響を与えている様だ。
癒しの中には”温もり”も含まれるもんね。

「だめだよ！」

手を火の中に突っ込もうとするとは思わなかった。あわてて火を消したから触れてはいないが、また倒れちゃったり蒸発しちゃったら大変だ。

抵抗が無さ過ぎるのも問題だね。この場合は常識の欠落かな？

「お水様は”水”だからね。火にあたっていると、水は蒸発して無くなっちゃうんだよ？」

「あらそう？私には気持ちよかったけど？」

チカラで出したものだからかな？火と水のチカラを合わせるとどうなるんだろう？

今試すにはリスクが高いな。

また今度の課題だね。どこかでゆっくり確認してみよう。

「今度大丈夫かゆっくり確かめてみようか。今はごはん食べるために火を点けても大丈夫か確認したかっただけなんだ。そろそろ何か採ってきてくれると思うから、向こうでごはんの為の準備をするよ。ありがとね。」

では薪を拾いに行ってくださいかね。
今まで火を使っていなかったんだから簡単に集まるでしょう。

今まで火を使わずにどうやって食事してたんだ？
お肉を生で食べてたんだろうか・・・

結論。

普段は果実しか食べていなくて、肉を食べる時は池から離れたところに火を熾おこしていたんだそうだ。

50話 法則がわからん

やはり薪は簡単に集まった。

問題は薪を集めてから起きた。お水様が火を嫌がったのだ。

なーんーでー？

離れたところで火を熾していれば大した問題では無かったのだろうが、主賓扱いで中心に招かれていたため、お水様の近くだったのだ。村の人に納得してもらう為に、手の中に火を熾して大丈夫な事を確認したのだが、薪に火を移した途端に嫌がりだしたのだ。

すぐに消したのでお水様は治まったのだが、村の人の目が痛い。火が大丈夫だったのをみんなにも確認してもらったのに・・・

中途半端に”お水様を治してくれた”と思っているだけに、村の人たちの目が複雑で落ち着かない。いつそ追い立てられた方がずっと楽だと思う。

「お騒がせして申し訳ないです。」

「いやいや。しかし、先ほどは大丈夫だったのに何故なんでしょうな？」

ほんとにねえ。

「まあとにかく今夜は感謝の宴じゃ。みなも喜びを分かち合おうぞ。乾杯。」

乾杯って・・・水ですか。

確かにお酒は無いだろうからしょうがない。
池の水美味しいからこれもありで。

水での乾杯と共に食べ物もいただく。

食べ物はどうや無花果^{いちじく}。ほんとにこれらを食べてるだけで生活で
きるのだろうか？

「でも、ほんとに何でさつきは大丈夫だったんですかね？」

誰にとも無く言葉を零^{こぼ}すと、お水様が答えてきた。

「あれが同じ物だなんて信じられない！全然感じが違ったわよ！」

「そうなの？僕には違いが分からないんだ。どう違うの？」

「あなたの手の中に有ったのは気持ち良さそうだったのに、その後
のは気持ち悪かったわ。もっと言えば、怖かった！」

聞いてもよく分からない。意識を通したものだから大丈夫という事
か？

また火を点けて見る。

「このままなら平気なんだよね？」

「そうよ。平気どころか近くに居たいと思うわ。暗くなってきたん
だし、そのままずっとそうしてなさい！」

うわゝ無茶言いますねー。

じゃあさっき薪を取ってきた時に見つけた椎茸を炙ってみようかね。

「木に火が点くのは嫌だけど、このままなら気持ちいいままよ？ほんとに何でなのかしら？」

手を翳している。

その手をゆっくり近づけて・・・火に手を入れた。

「全然問題無いわね。蒸発しない。それどころか・・・これが美味しいって事なのかな？中に入ってくる。いい感じよ？」

水って火を食べるんだ・・・

51話 深夜の内緒話

宴という名のお食事会の後、真っ暗の中村の人はそれぞれの家に帰っていった。

そして当然ながら、ここに自分の家など無いので自分の寝る所が無い。

村はずれまで行って軽く穴を掘って寝床とした。

あまり拘こたわって作る訳にもいかないので、屋根は無し。

代わりに細かくした薪に埋まるようにして眠る。割り箸に埋もれている様な感じになった。

眠りに落ちかけた所にお水様がやってきて声をかけてきた。

「あなたって不思議な人なのね。」

「お水様は眠らないの？」

「眠らないわ。眠くならないもの。多分今までもそうだったんだと思う。」

「ふーん。じゃ、夜は一人なんだね。今まではどんな風に過ごしてたんだろうね。」

「どうだったのかしらね。それよりも、これからどう過ごしていくかの方が分からないわ。」

「寂しいって思う？」

「そうね。ねえ、火を出してくれない？」

眠らせてはもらえないようだ。諦めて体を起こして火を出す。

「不思議よね。何故こんなことができるの？」

そう言いながら火にじやれてくる。

「なんでだろうね。でも、できるのは僕だけじゃないよ？この山の反対にある村にもできる人がいるんだ。僕はそこから来たんだ。」

「なぜ来たの？」

「いろんなものが見てみたかったからかな。」

「そうなの。私も付いて行ってもいいかしら？私もいろいろ見てみたい。」

「お水様が居なくなっちゃったら村の人が困るよ。それにさ、お水様はここに居ることに何か意味があるんじゃない？」

「ここに居る意味？」

「そう。この村ってさ、お水様が居たからできたんだと思うんだ。なら、お水様は村ができる前からここに居た事になるじゃない？ただ居ただけなのかもしれないけど、元々ここには水が無かったのにここに居たなんて不思議だもん。」

「そうなのかな？でも、確かにみんなの事を考えたらここに居ない訳にはいけないから、ここに居る意味が有っても無くても動けない

んだけどね。」

「お水様は優しいからね。みんなの事を考えない訳にはいかなそうだもん。」

「優しい？」

「そうだよ。だってさ、倒れちゃうまでみんなの為にがんばってたじゃない？これは優しさだよ。」

「そっか。ありがとう。」

ねえ、私に名前付けてくれない？あなたにはお水様って呼ばれたくないの。」

「どうしたの？ いいけどさ。」

名前ね。名前なまえ・・・ミーシャでどうかな？」

「ミーシャ。ありがとう。この名前、誰にも教えないでね？この名前で呼んでいいのはあなただけだから。」

「それは光栄だね。でも、他に人が居る時はどうする？」

「それは・・・その時は”ねえ”とか”ちょっと”とか呼んでくれればいいわ。」

「それは嫌だなあ。じゃ、ウィンディーネって呼ばせてもらっよ。今は多分だけとお水様と呼ばれてた時とは違っちゃってるから、違う名前で呼ぶよ。」

「そうなの？ ちょっとややこしくなる気もするけど・・・いいわ、

そうして。それじゃ、もう眠りなさい。火、ありがとね。」

おやすみ。

52話 優秀な弟子

翌朝。村の人たちには日常が戻ってきた。

目覚めて、お水様改めウインディーネの心配が無くなった事にやっ
と実感できた様で、笑顔があふれていた。

みんな池に集まり、ミーシャの元気な様子に安堵して声をかけ、水
を掬^{すく}って身支度をして狩りに出かけている。

しかし・・・水を掬うのはいいが、池の畔^{ほとり}で顔を洗って口をすすい
でいる為、水は池に戻っていく。

掬う意味あるのかな？

やはり水を浄化したりしていた所為で倒れちゃったんじゃないだろ
うか。

だとすると、どうにかしないとミーシャに負担がかかる事に変わり
はない。

やはり川から水を引いた方がいいんだろうな。

ミレイの村の近くの川はかなりの水量だ。少しくらいならこちらに
引いてきても問題無いと思う。

早々に誰かにチカラの使い方を教えて、川を引いてこよう。
そうすればミーシャも気軽に動けるようになる。

朝の狩りが終わってみんなが朝ごはんを食べた後、髪色が特に薄い
人から3人選んで教えることにした。

大人しそうな男の子ジェンと、昨日からやたらと懐いてきていた女

の子ヒューイ、おそらく一番年上の女性ヒエン。年は推定で13歳に8歳に50歳くらいだろうか。

最初はジエンだけに教えようと思っていたのだが、そうするとヒューイが騒ぎ出し、それなら狩りに行かずに村に残っているヒエンさんも一緒にどうですかと誘ったのだ。

一番年上という事は、当然一番お水様に接してきていた訳だし、おそらく体が動かなくなってきた子供達の世話になっているのだろうから他にやれる事を見つけるのもいいと思ったのだ。

おそらく一番覚えが悪いだろうから、ジエンが覚えた後の教える相手になってもらえるという思いもある。

本人にもそう伝えた。

ヒエンさんの子供にはまだ子供が居ないらしく、孫と接する様な気持ちになれると喜んでいた。

教えてみると・・・夕方頃には拙いながらもジユンは予想通り扱えるようになったが、それと同じくらいヒエンさんも使えるようになった。

おかげでヒューイが拗ねた。

ジエンにはもつと慣れて楽に扱える様になる為に練習を積む様に伝え、ヒエンさんには教え方を伝えてヒューイに教えてもらえる様にお願いした。

この世界の人は、異常にチカラの覚えが早い。

早いおかげで、これでこの村を離れる事ができる。

明日の朝にはこの村を出るとミーシャに伝えたと、寂しそうにしな

がらも笑顔でうなずいてくれた。

そして3度目の正直！

薪に火をつけても嫌がる事はなくなっていた。

昨日散々火と戯れていたのも、おそらく火のチカラを取り込んでいるから大丈夫だろうと思っての事だったが上手くいった。

これで村人も火を扱いやすくなる。

次に来た時にはもつといろんな物が食べれるだろう。果物ばかりはつらい・・・

それに、これから冬が来る。火無しではかなり辛いと思うのだ。

それこそ今までどうやって生きてきたのだろう。雪でも降ったら死んでおかしくないと思う。

53話 なつかしさ

「それではまた来ます。」

「いろいろお世話になりました。ありがとうございました。」

「もう行っちゃうの？嫌だよちゃんとヒューイが覚えるまで居てくれなきゃ！」

「次に来るまでにはちゃんとケイさんぐらい扱えるようになって見せます。」

「ちゃんと来なさいよ！待っててあげるんだから！」

「「「それではお気を付けて。」」」

手を振り笑顔で村を後にする。

一部を除きあつさりとした別れ。ここでは死別以外に分かれる事がないだろうに、随分あつさりしたものだった。

死別以外の別れだったからこそそのものだろうか。

次にまた会える。その思いがあるからこそその。

この村の事に思いを馳せながら、ミレイのいる村を思い出す。

みんなは元気だろうか？

ミレイはもつとチカラを扱えているんだろうな。どんな事ができる様になっているだろう？

ミリヤさんはどうしているだろう。元気になってるかな？ミレイに

教わっているのだろうか。

ガズはヤンチャしていないだろうか。 火が得意そうだったから、
事故でも起こしていないといいのだが。

これも里心なんだろうか。

2・3日で帰ると言っておきながら、随分と日にちが経ってしまっ
ている。

心配させちゃったかな。

心配してくれているだろうか・・・

これで忘れられていたらどうしよう。 あまりにも悲しすぎる・・・

少しだけ足の運びが速くなった。

ミーシャのいる村を出て3日目。

平坦に背の高い草が生えていえる草原。 山の膨らみは随分内側に引
っ込んでいる。

その先、一部山の膨らみと共に森が張り出している所があり、その
袂たもとに家が建っていた。

今度の村は5件の家しかない。 随分と小さな村だ。

しかし、何故あんな森の脇にあるのだろうか？

あれでは森の動物に村が襲われたりはしないのだろうか。

風が暖かい。

54話 ケナフ発見！

この村はミーシャの所とは逆に、お火様（？）が居るようだ。家と森で囲われた場所の中心にお火様がいて、それを囲むように8個の焚き火がされている。

「こんにちは」

「おう、こんちは。あんた、どこから来なすつたい？」

「ここらを旅してるんですよ。一応向こうの方から来たんですけどね。多分最初に居たところは反対側なんですよ。」

「おう？なんか謎かけの様な事言い出しやがったな。まあいいや。ここに何か用かい？」

「いえ、通りがかっただけですよ。今日ここに泊めてもらってもいいですかね？」

「ああかまわねえよ。夏場にここに来たら熱くて大変だったろうが、最近は涼しくなってきたんでね。ここにいらっしゃる火炎様の力であつたかく過ごせるぜえ。それに、なんか危ねえモンが襲ってきても火炎様がやつつけてくださる。安心して眠れるぜ。」

それで森に近いのか。退治してもらえれば、ついでに肉も手に入るしね。

しかし夏場でなくてよかった。夏場にこんなに焚き火をしていたら熱くて干からびてしまう。

「それではご厄介になります。空いてる家なんてありませんよね？」

「そりゃねえよ。まだ日は高いんだ。がんばりや作れるかもしれないぞ？」

「そうですね。じゃ、がんばってみますよ。ところで、どこかに水ってありますか？」

「その木の向こうをちょいと歩きや川がある。川に行く前に火炎様に挨拶ぐれえしてってくれ。」

「そうですね。そうします。」

挨拶しておかなくて、外敵扱いされてはたまらない。

「こんにちは、はじめまして。今日一晩ご厄介になります。よろしくお願いします。」

「んあー・・・zzz」

・・・どうやらお休みのようです。
火炎様は寝るんだ・・・

挨拶は目が覚めたらにして、川を探しに行く。
この村は火炎様に守ってもらえて、水も近くにある。なんでこんなに人が少ないんだろうか？

暫く歩くとせせらぎの音が聞こえる。
生活するにはちよつと面倒に感じる距離かもしれない。
しかし、周りを見渡していいものを見つけた。明日いづらか採って

から出かけよう。

川につくと、服を脱いでの水浴び！

自分で出す程度では体を拭くのがせいぜいだったので、水を浴びれるのが凄く心地いい。

ついでに服もお洗濯。

川は流れも随分緩やかになっていて、ゆったりと浮かんでいられる程だ。

冷たいことには目をつぶろう。

・・・いや無理。寒いものは寒いから・・・

急いで服を着て、火炎様の下に向かう。早く乾かさないと風邪引いちやうよ。

55話 そりゃ無茶だつて！

「寒い！」

とにかく急いで火に当たる。まだ火災様はお休み中らしい。

常に火があるというのも便利なものだ。薪の用意は大変だと思うが、自然に囲まれたここでは大した手間でも無いだろう。

そうでもないか？

これだけの焚き火をするのに、一日に木一本位の量の薪を使っているのでは無いだろうか。

そのうち森が禿げる……

木の無い草原がこれだけ広がっているのも、もしかしたらそれが原因かもしれない。

「水浴びでもしてきた様だな。」

先ほどの人に声をかけられる。

「ええ。久しぶりに水が有ったので思わず。ですが、やっぱり寒いですね。焚き火がありがたいです。」

「そりゃそうだ。まあ火に当たりながらでいいから、ちつといいかい？」

「ええ。なにか？」

「おまえさんが居るんだ。ここ以外にも村があるんだろ？」

「はい。こちらをいった所にはウィンディーネっていうお水様が居る村があつて、反対を行くとおそらく僕の居た村があります。」

「ほう、ここ以外に二つも村があるのか。今まで一度も出会った事が無かつたんだがな。どれくらい離れてる？」

「僕の居た村は分かりませんが、ウィンディーネが居るほうは3日くらいですね。行ってみるんですか？」

「ああ。このままじゃ、村が無くなっちまうからな。」

「え！何かあつたんですか？」

危険から守ってもらえて、水も食料もあつて、何故村が無くなるんだろうか？

「いや、お前が心配するような事じゃねんだよ。ただ、この村にや女が生まれてきてねんだよ。」

あー、単純にしてどうにもならない問題だ。

子供が生まれてこなければ確かに村はなくなるわな。

「あー・・・じゃ、嫁さんもらいに行くって事ですか。でも、ただ行つて嫁に来てくれって言つても無理だと思いますよ？」

「無理か？」

え！大丈夫だと思つてたの！？

56話 利用しちゃえ♪

無理だとは思っただけど・・・この世界の人たちの結婚ってどうなんだろ？

ミレイにいきなり結婚したいみたいな態度取られた事あったな・・・

「まあ、一度言ってみる分にはいいんじゃないですか？
ただし！無理やりさらってきちゃ駄目ですよ？」

やってみれば分かるよね。交流を持つきっかけにはなるだろうし。

「そうだな。言ってみるぐれえいいよな。じゃあさっそく・・・」

「今からですか？！ そろそろ日も暮れてくるでしょうから、明日からでもいいじゃないですか。他の人にも言ってからでないと、みんなに嫉妬されちゃいますよ？行くなら一人じゃなくて何人かで行けばいいじゃないですか。」

「早く嫁さん欲しいんだがなあ・・・それもそうだな。」

「じゃ、僕は家を作りますね。あなたは狩りでもしてきたらどうですか？」

「そだな。行くにも食いモンいるからな。悪いが焚き火見といてくれ。そうそう、おれあギユってんだ。よろしくな。」

「僕はケイといいます。参考までに家を見せてもらえますか？」

ここにある家は、しっかりした物では無いが木造だ。

板を縦に地面に打ち付けて壁にして、そこに板を立てかけて屋根にして隙間を板で埋めている。

地面を掘り下げた床にも”すのこ”の様に板を敷いている。何より他の村と違うのは、中でゆったり立っていられる事だ。

さすが肉体派。

家を作っている時に村人が戻ってきたのだが、みんな髪色が濃い。もしかしたらまだ見かけていない人も居るかもしれないが、髪色が薄い人がいない。

火災様のお世話するのにチカラを使っって訳にはいかないかもしれないな。

このまま焚き火してると森がどんどん禿げていく……

あー……チカラを使えるようになってもらえれば川を引くの手伝ってもらえたかもしれない……

そうか。ただ行くよりは、ウィンディーネの為に川を引いていつてもらうのはどうだろうか？

僕がやるうとしているのを、話を聞いて気前良く手伝ってくれた気の良い人なら嫁に来てくれやすくなるかもしれない。

提案してみよう。

そういえば、行く間の水はどうするつもりなんだろう。何か入れ物でもあるのかな？

水無しで行くには遠過ぎると思う。

なんかせつかちな人みたいだから、何も考えてなかったのかもしれない

ない。

言葉もなんか江戸弁みたいな感じがあるし。

なんかちよつと楽しくなってきた。

それぞれの村の交流に自分が巡って繋がりを持たせようと考えていたけど、直接村の人が行き来した方が繋がりは強いしね。

そうこうしているうちに家完成。

未だ火災様はおねむです。

57話 起きるのかな？

食事の時にミ・シャの村へ川を引く事を話した。

ただ行つて嫁に来てくれと言つよりも、手伝う事にしたほうが良いと言つて納得してもらつた。

実際水無しではたどり着けないしね。

そこら辺はやはり考えていなかったそうだ。そそっかしい。

ちなみに食事は「自分の分は自分で確保」という事で、分けてはもらえなかったので干し肉ときのこ。

粗食には慣れてる・・・

ここでは干し肉という形で保存などはしていないそうだ。

食べ物には常にその日に、たとえ雨が降つても採りに行く。それでも何がしかの肉は捕れるらしい。

食べ方はただ焼くだけではなく、葉っぱに包んで蒸し焼きにしていた。

ちゃんと料理になつてる。肉の香草焼き。すつこいい匂いしてた。貰えなかったけど。

食べながら聞いてみたのだが、村の人たちも川がどこからどう流れてきているのかは知らないそうだ。

まずは上流がどうなっているのか確認しておいてもらおう。

上流がミ・シャの村の方ならば上から直接引いていけば良い。そうでなければかなりの長さになる。

村の人は総勢9人。あまりにも少ない村だ。

内4人がお年寄りで、男3人女1人。あとの5人がその子供だそうだ。

5人兄弟。年は17〜30歳くらいだろうか。

父親は誰だかはつきりはしていないようだ。

この状況では夫婦とか言ってられなかったんだね。

ちなみに村のボスはその女の人。ま、誰も逆らえないだろうね。

しかしまあ・・・ちょっと理解しにくい。

独り占めすると争いになるだろうけど、だからって仲良くやってこれるものなんだろうか？

誰か嫁に来たら・・・どうなるんだろう。

聞くのが怖いので聞かない。聞けない。

親と火炎様の面倒を見るために3人残り、二人で川を調べることになった。

残っている人にはある仕事をしてもらおうと思っている。

森で見つけたケナフだ。

これを外側と内側の繊維をとってもらって、糸を作ってもらう。

上手くいけば服が作れる。袋ができる。縄が出来る。

布が作り出せるのだ。

これが作れたら生活が変わるだろう。

その間に自分は一度ミレイの村に向かう。

おそらく3日くらいで帰ることが出来るだろう。

しかしまあ・・・一日30km歩いたとして30km×11日で30kmになる。

かなり大きな円を回った事になる。一日に40km歩いてたら440kmだ。

平坦な道だったとはいえ、これ、かなりとんでもない事なんじゃないだろうか？

考えたら一気に疲れた気がする。

とにかく今日はもう寝よう。おやすみなさい。

火災様は未だに寝たまんま。どんなけ眠るんだろう。

起きるのかな？寝てるんじゃないかって倒れてるとかじゃないよね？
なにより、これ、守ってくれてないよね。

58話 面倒だよ

翌朝の目覚めは気持ちよかった。

焚き火のおかげで暖かい空気に包まれての目覚め。最近はず分冷え込んでいたのもありがたかった。

まずは川に行つて顔を洗う。今まで水は手で拭うしかなかったのだが、もしかしたらタオルが出来るかもしれないと思うとうきうきしてくる。

その為にも何本かケナフを収穫。持ち帰つて試してみよう。

まず根と先を切り落としてから半分に割る。その上で乾燥。自然乾燥のほうが良いだろうから焚き火からは離しておく。

完全には今すぐ出来るわけではないが、試すくらいはできるだろう。乾かしている間に飯を採つて来ますかね。

森の中を歩くと、柿を見つけた。

そういえば元の世界でもここでも、あまり食べた記憶が無い。

3個もいで川で洗つて齧つてみる。皮はこっそりナイフでむいた。

皮はそこらにポイ捨て。森の肥料になつてくれるだろう。

カリッという音が心地いい。こんな音を出せる食べ物、他には何があるかな？

戻つて繊維の取り出し。ちょっと大変ではあるが、出来た。

これなら自分だけではなくて他の人にも出来るだろう。より大変ではあると思うが。

これをよつて糸にしてみる。ちよつと粗いかな。

しかし出来た。繊維を継いで行く事で長さも問題ない。

糸ができた。この世界で初めて出来た糸だ。これがこの世界の生活

を変えてくれる！

これをお年寄り4人に話してやってもらおうと思っていたのだが・
こんな訳も分からないものを誰もやってはくれなかった。

それもそうだね。

別に無くても困っていないだろうし、話してもどれだけ良いものは想像でしかない。

出来上がった現物を見なければ分からないだろう。

残念には思うが、ここで作ってもらうのは諦めてケナフと柿を収穫してミレイの村を目指す事にした。

一応火災様にも挨拶しておこうと思ったのだが、未だ寝てる。絶対何かおかしい。

挨拶代わりに火災様に意識を通しておいた。炎をイメージしたのではなくて水をイメージしたのはご愛嬌。火というと荒々しいイメージがあるので、穏やかな方がいいなという自分の勝手の為だ。これで炎であつても雨を嫌がる事が無くなるだろうしね。

今まで人に見つからないようにこっそりカバンを持ってきてくれていた式神に、ケナフも持ってもらう。

長さは4 m程あるが器用にバランスを取って運んでくれた。便利だねえ。

そういえば・・・ノームさん達が言っていたな。暫く眠っていて、目覚めたら二人になっていたって。

もしかしたら火災様もそうなのかもしれない。

毎日焚き火に囲まれて、言ってしまうえば毎日たっぷりの栄養をもら

っているのだ。

蓄えられた栄養が体に満ちたので、分裂する為に眠りにについているのかもしれない。

だとすると・・・最後の挨拶はまずかったかな？

そうでもないか。

放っておいたとしても分かれたんだろうし、分かれたとしても別に困ることがあるわけでも無いだろう。

自分以外に同属が居るっていうのは嬉しいと感ずることだと思ふ。

一人と感ずているのは寂しい。

もしかしたら、火災様にしろミーシャにしろ、村の人の手伝いをするのには孤独が寂しかったからなのではないだろうか。

誰かを手伝う事で、役に立つ事で孤独の寂しさを埋めていたのかもしれない。

そうになると、ミーシャにもっと意識をあげれば良かったな。

二人になれば嬉しいだろ。

そうすると、二人ともミーシャなのかな？

59話 どうするかなあ

川沿いを歩く。

火災様のいる村のすぐ傍そばに川があるって事は、それを辿ればミレイの居る村に着くという事だ。

もしギユイがミレイの村に行つて嫁に来てくれと言つたら、ミレイなら喜んで付いて行つていたかも知れない。

ギユイがこつちに付いて来なくてよかった。

ちよつと企んだけど。

ミレイは渡さない。なんか悔しいから。

あれだけ懐いてくれていて、あれだけ可愛くて、あれだけ覚えのいい弟子だと愛着わも湧く。

ほんとに嫁にしちゃおうかな？多分断られはしないような気がする。

しかし・・・自分がこの後どうなるかを考えると、分からないだけに行動に移せない。

再来年の正月には顔を出せ。

実家を捨ててこの世界に住んでしまつてもいいかと思うこともあるが、この世界の事は実家にばれているような気がする。

自分がここに居るかどうかまでは分かつていないかもしれないが、この世界には誰かの手がすでについている。だろう。じゃないかな？そんな気がする。

下手なことをして実家の反感を買つと、この世界まで来る様な気がする。

来たとき、何をするか分からない。

分からないのが怖い。

自分を連れ戻すだけでなくミレイにまで手を出されるかもしれない。

今までにもここに来ているなら下手なことはいらないとも思うが、自分の存在を無かったことにする為に村ごと潰されるかも知れない。

・・・身内だけに恐ろしい・・・

一度、正月まで待たずに顔を出したほうがいいのだろうか？

先が分からないから不安なんであって、分かっていたら安心できるかもしれないし、諦めがつくかもしれない。

ギユイが移ったかな・・・

今はこの世界に関わる事を楽しもう。

ここを一周回る事によって金属が手に入りそうになっている。 布
が出来そうになっている。

随分楽しくなってきたと思う。

後は人を増やしたいな。今のままでは少なすぎる。

・・・やっぱ結婚かぁ・・・

いつそ何も考えずにいっぱい種まいちやおうかなあ。

でもそうすると、後で後悔することにもなりそうだしなあ。

子供も出来れば可愛いだろうし。でも別れなければいけないか
もしれないし。

ここで生まれたら、向こうでは当然戸籍無いしなあ。

連れて行っちゃったら母親とは別れなければいけないだろうし

なあ。

後悔しそつだなあ。

一度落ち着いたら顔を出しに行こうかな。

60話 ただいま

なつかしのミレイの村が見えてきた。

村に名前が欲しいな。今度提案して付けてもらおう。

今は火炎様の村から4日目の昼である。予想と違って日にちがかかった。

煙が上がっているので、丁度ご飯を食べているところなのだろう。旅の間、ずっと汁物を食べていないのだ。一緒にお相伴あずかに与れないかな？

式神にはケナフだけここに置いてもらい、他の荷物は森の中の家に運んでもらう。

「ただいま。美味しそうなご飯ですね、僕にももらえませんか？」

「ケイさんおかえり！えらく長い間出かけていたんだね。ミレイが心配してたぞ？」

「おかえりケイさん。こんなに長い間居なくなるなら言つといて欲しかったよ。ミレイを見てて可哀想になっちまったよ。まずはミレイの所に行ってやんな。」

近くに居た夫婦が声をかけてくれた。

そんなにミレイは心配してくれてたんだ。申し訳ないけど、ちょっと嬉しい。

「じゃ、ミレイに会いに行ってきますね。僕もずっとミレイに会いたかったんです。」

「ええええ、早くいつてあげなよ。喜ぶわよ。」

他の人達にも声を掛けながらミレイを探す。みんなミレイが心配していた、早く行ってやれと言ってくる。本当に凄く心配してくれていたようだ。

しかし、他の焚き火の所を見てもミレイは見当たらない。家の中に居るのかな？

「ミレイ居る？ケイです。今帰ってきました。」

「あ、ケイさんお帰りなさい。ちょうど良かったです。なにかよく分からないモノが居るんですが・・・ケイさん心配したんですよ？ケイさん見てもらえますか？」

「ミレイさんちょっと混乱してる？でも、よく分からない」モノ”って結構失礼じゃないかな？確かによく分からないけど。」

「ん？誰か居るの？って、隠れる所も無いけど姿が無いよ？うん？」二人寝転がったらいっぱいになるような家なのだ。隠れたり、見えないところなんて無いはずなんだけど・・・？

ミレイが出ようとしている様なので、出入口の前からどいて中から出てきてもらう。

「会いたかったですケイさんに会いたいなってずっと考えてたらしいの間にこの子が居たんですなんでしょう？」

「いいからミレイさんはちょっと落ち着こうね。キミがケイさん？」

こんにちは、はじめまして。僕も名乗ればいいんだけど、名前が無いんだ。たぶん。よろしくね。」

目の前にふわふわと浮いている、20cmくらいの人。向こうが透けて見える。

見た感じとしては、自分そっくりなミーシャ。
だとすると、この子も妖精？

何故自分にそっくりなんだ？

61話 生まれちゃった？

「まずはミレイ、落ち着こうよ。」

「そうですね、落ち着きましょう。」

「じゃ、まずはただいま、ミレイ。遅くなってごめんね。」

「はい。おかえりなさい、ケイさん。本当に遅かったです。ずっと危ない所だつて聞いてたから、すつごく心配してたんですよ？」

抱き寄せて頭を撫でる。そうすると背中にも手を回してくれた。

そしてそれを見ている自分そっくりな精霊。温かみのある笑顔だ。

「ごめんね、そしてありがとう。でも、結局草原の、あそこの向こうには行かなかったんだ。ていうか、行けなかったんだ。」

「え、行けなかったんですか？じゃ、どうしてたんですか？」

「あそこの先つてさ、崖になってたんだ。だから、降りれそうなところを探してあるいてたら、ぐるっと回って戻ってきちゃったんだ。」

分かりやすく土で形を作つて説明した。

「こんな風になってるんですか。じゃ、崖から落ちちゃうから危ないって事だったんですね。」

「それもあるだろうけど、崖の下にとつても強そうなのがいっぱい

居たからね。確かに向こうには行かない方がいいと思うよ。そのうち行ってみたいとも思っけどね。」

「いつか行っちゃうんですか？」

「いつかは行ってみたいね。ま、どうやって行くかは分からないんだけどね。」

チカラを使って降りる道を作ってしまったえば降りれるけど、今は言わないほうがいいだろう。まだ暫くは行っている暇は無いだろうから。

「それでミレイ、僕が居ない間にいったい何があったの？」

「ケイさんが行っちゃってから、暫くは大丈夫だって自分に言い聞かせながら生活してたんですけど、3日たっても10日たっても戻ってきてくれないじゃないですか。」

だから落ち着かなくて、狩りに行っても狩りなんて出来なくて、襲われちゃったりしましたし、危ないから家に居なさいってみんなが言ってくれたから家に居たんです。

それでも落ち着かなくて、ケイさん帰ってきてくださいってずっと考えてたんですよ。

そしたら今日、この子が声を掛けてきたんです。」

「いっぱい心配してくれたんだね、ありがとう。ごめんね？で、君はどこからきたの？」

「さあ？僕は気がついたらミレイさんの目の前に居たんだ。それまでどこに居たのか分からないよ。」

そう言っつてミレイの目の前に行った。本当に目の前、というか胸の前。

触れるか触れないかぎりぎりの所だ。

「そうそう、その時のミレイさんの腕、その時の様にしてみて。」

そう言つてミレイの腕をぽんぽんと叩く。ミレイはお祈りをする時のように手を組んだ。組んだ腕の中にすっぽりと納まるように精霊は居た。

これは・・・ミレイのお祈りによつて精霊が生まれたって事だろうか？

もはや何でもありませんね。

流石にこんなのは西側の魔術でも聞いたことが無い。

62話 おなか空きました

ぐう~~~~う

ミレイのお腹が元気を主張した。

「あ、あら、そういえば最近ちゃんとごはん食べてなかったですね・
・ケイさんを見て安心しちゃったらお腹空いちゃいました。」

「おや、ケイさん帰ってたんですか？ちょうどご飯の用意が出来た
ところですよ。まだ食べてないのでしたら一緒にどうです？ ミレイ
も最近ちゃんと食べてないんだから、今日こそはちゃんと食べなさい
ね！」

ミリヤさん登場。裏の人と一緒にご飯を作っていたようだ。
もうすっかり元気になっているようで安心した。声が元気になっている。
いる。

「ではケイさんも一緒にいただきますしょう。」

「そうですね。最近は暖かいご飯食べてなかったんで楽しみです。
僕もいただきます。」

そう言って、ミリヤさんについていく。
すると精霊君も一緒についてきた。

「キミも食べるのかい？」

聞いてみると、意外な答えが返ってきた。

「いや、お腹が空いているとか分からないけど、なんかケイさんと離れたくないんだ。」

自分そっくりな姿の奴にそんなこと言われてもねえ・・・
まあいいさ。食べながらいろいろ聞いてみよう。

「それではいただきます。」

「どうぞどうぞ、ミレイもケイさんもいっぱい食べてくださいね。」

「いただきます。」

たまねぎにジャガイモ、椎茸ごぼう。これは生では食べられないものばかり。本当に久しぶりだ。

あと何かのお肉がはいつていて、デザートにりんごがついていた。

味付けに塩コショウだけじゃなくて、味噌とかあるといいなあ。

そういえば大豆をどこかで見たような気もするな。がんばって作ってみるか？

「キミも食べてみる？」

掬ったスープに意識を通して食べてみるように進めてみる。

「あれ？何故かいきなり欲しくなっちゃった。お言葉に甘えていただきます。」

「んー、やっぱり名前が無いと不便だねえ。ミレイ、何かいい名前あるかな？」

「え？　そう言われても・・・ケイさんに懐いているみたいですし、ケイさんが付けてあげませんか？」

「うーん、そうだなあ・・・じゃ、ジンでどうかな？」

まんま精霊です。

63話 美形化計画失敗だぁ・・・

命名 ジンで決定しました。

間違いなくこいつはミレイが生み出したのだろう。

属性は何だろう。大気？それとも思い？まさか属性が僕って事は無いと思うけど・・・

懐いてくれているなら都合がいい。いつそ色々な属性を持って役に立ってもらおう。

そう思つて、食べるものにはいろんな意識を重ねていった。

単純に火や水、大地に風。あとは温もりとか冷たさ、成長に癒し。変わったところで喜びやら悲しみといった感情。

どこまで効果が出るのか分からないが、いろんなものから栄養を取れるようになってもらつて、いろんな効果を出せるようになってもらいたい。

その方が便利だし面白い。

あと、姿も何とかなつて欲しいと色々な姿も入れておいた。

微笑むミレイ。怒るギュイ。悲しむミリヤ。喜ぶガズ。などなど。

同じ姿で並んで居るのも恥ずかしいものがあるのだ。

理想は中性的で中肉中背。平均が良いな。平均というものが一番美しいものらしいから。

そう考えて思い出した。ミーシャの姿はミレイにそっくりだ・・・
自分が嫌な事を他人にしてちゃ駄目だよね。

お水様を癒す時に、癒しのイメージとして、教えていない・自分自身も知らなかった治癒のチカラを扱えるようになったミレイを連想してしまったのだ。

おそらくそれが元で姿がミレイに似てしまったのだろう。

そして中々帰ってこない自分の事を考えていたためジンは自分の姿になったのではないだろうか。

そう考えてチカラの中に色々な姿を混ぜておいたのだが、ジンの姿は一向に変わらない。

お水様はウィンディーネになる時に変わったのにジンは変わらない。お水様は元々はつきりとした姿を持っていなかったのが、意識を重ねたときに初めてはつきりとした姿を手に入れたのだろうか。そして一度持った姿はもう変わってくれないのだろうか・・・

残念ながらジンの姿は諦めなければいけないだろう。

これからは自分のミニチュアと一緒に居ることになるのか・・・

・・・結構へこむ。

食事を終えて、一度家に帰る事にした。

ずっとお風呂に入っていない。川での水浴びは寒くてすぐに出てしまったのだ。ゆっくりお湯に浸かりたい。

そう言つて家に帰ろうとすると、ミレイがついて来た。

今まで行方不明だったので、一緒に居たいと言ってくれた。ほぼが緩む。

「じゃ、おいで。ついでに今日は家に泊まるかい？」

「え、いいんですか？行きます行きます。ついでに泊まっちゃいます。」

「じゃ、ちゃんとミリヤさんに泊まること言っというてね。」

ケナフを持って家に向かう。

大変だとは思うが、今晚中にがんばって糸の作り方を覚えてもらう。

ミレイならがんばってくれると信じている。

そして当然のようにジンもついて来ていた。

早速お風呂を沸かしてもらいましょうか。

64話 これは役に立つ

「じゃ、目を閉じて。」

家の中に入る為、ミレイには目を閉じてもらう。

「ジンはそのままついて来て。もしはぐれちゃったらここで待って。すぐ迎えに来るから。」

この人避けの法は、その範囲に向ける意識を逸らす効果があるものだ。

だから真っ直ぐ敷地に入ろうとしても、真っ直ぐ進んでいると認識しながら脇に進んでいくことになる。

目には映ってはいえる筈なのだが、その範囲にあるものを脳が理解しないのでそこに”ある”物があると認識できない。

つまり、目を開けてついてこようとしても中には入れないので目を瞑って手を引かれないと入れない。

おそらくはジンもそうなのだが、それを確認する為に一度試してみる。

「ま、入ってこれないよね。」

もしかしたら、大気を司っていたら大気と繋がっていて、すでに中にあるものと繋がっていれば入れるかもしれないと思って試してみたのだが、やはり入れないようだ。

中の物を取ってきて貰うというお使いは頼めないわけだ。

改めてジンにも中に入ってもらい、ミレイには家の中で一休みして

もらっつ。

その間にお風呂を沸かしてしまおう。

「ジンはついて来て。ちょっとやってもらいたいことがあるんだ。」

半分地面に埋まっているドラム缶状の風呂桶のある場所まで来てもらっつ。

「ありゃ、中の水抜き忘れてたのか。洗うのが大変だな。ごめん、ジんにやってもらっつ事、もう暫く先になるから向こうでミレイと休んで。」

「いや、何をするのかここで見ているよ。それとも何か手伝える事あるかい？」

「この中を綺麗に洗おうと思っただけど、できる？」

「・・・どうすればいいのかわからないや。大人しく見ているよ。」

下の方についている栓を抜いて水を一度捨てる。その間に綺麗な水を汲んできて、ブラシで風呂桶をブラッシング。

ブラシは動物の毛を使って作った。猪の毛は硬くていい。

洗剤は無し。時々ブラシを水で濯ぎながら^{すす}ブラシで擦るだけ。

洗剤無しはちょっと抵抗があったのだが、この世界で洗剤という化学製品を使う事には抵抗があったので、洗剤無しの生活に慣れることにしたのだ。

慣れてしまえば気にならなくなるものだ。

何度か中を水で濯いで、土をチカラを使って圧縮する形で栓をして

終わり。

後はひたすら中に水を溜めて暖めて完成。
水を張る作業と暖める作業はジンにも手伝ってもらった。

今まで暖めるのは下から火を焚いていたのだが、これをジンに頼んだ。

先ほど意識に織り交ぜたチカラを取り込んでいてくれれば火を使わずにちゃんと暖められるはずだ。
やり方わかるかな？

「この水を温めればいいんだね、わかった。やってみよう。」

どうするのかと見てみると、中にとぶんと入って直に湯気が立った。
これは早い。

65話　お願いします！

やはり風呂は良い。

本当の五右衛門風呂だと風呂桶が熱くなって落ち着いて入ってられないのだが、この桶は三面が土に接している。

その所為で熱が逃げやすくすぐ冷めてしまふのだが、代わりに触れても火傷する事が無いのでもたれることが出来る。

縁に腕を掛けて入れるのが魅力だ。くつろげる。

どうせ石鹸も無し、他に入る人も無いので風呂の中で体を擦ってしまふ。出ると寒いんだよね。

しかし、湯船が汚れると出る時に汚れが体についてきてしまった。

気持ち良さにばかり目が行っていて考えていなかった・・・

十分体は温まっている。最後に水をかぶっておこう。

小一時間の入浴を終えて戻ると、ミレイが布団の上で寝そべり撫でていた。

「あ、おかえりなさい。」

起き上がってこちらに歩いてくる。

「ここには不思議なものがいっぱいありますね。中でもこれが一番不思議です。前にも思ったんですけど、すっごく気持ち良いですね。」

「でしょう？ミレイの家にもあるといいんだけど、これしか無いんだよね。今度ミレイがこれ、作ってくれない？」

「ケイさんでも一つしか持っていないんですか。どうやって作るんですか？私にも出来ると良いんですけど。」

「作る手始めとしてやってもらいたい事があるんだ。それを覚えてもらえる嬉しいなって思ってたて来てもらったっていうのもあるんだよ。」

「何をすればいいんでしょう？」

「旅の途中で見つけたんだけど、あの持って来た植物。まずはあのケナフっていう植物から繊維を取り出して欲しいんだ。まずはやってみるね。」

「うわ・・・細かい作業でなんすね。私の家でやると飛んでつちやいそうです。」

ほぐして繊維を取り出して、糸を紡ぐ。

流石にこんなのは自分もやった事は無かったのだとどしくはあったのだが、それでもミレイには見た事やったことの無い作業だ。面白そうに見ている。

「僕もうまくは無いからちよつと不恰好だけど、こんな感じになるように、太さが同じようになるように作ってくれる？」

自分でも分かっている。無茶振りである。

それでもミレイならやってくれると期待している。

自分のいう事なら従ってくれるだろうというのもあるが、何より出来上がった物が分かっているのだ。

布団があると気持ち良い！

その目標の為にがんばってください。

いきなり布団は無理だから、まずはタオルからだけどね。
何より綿も羽毛も無い。

騙しているのかな？

見つからなかったら、とりあえずは布を中に詰めておけばいいよね。
今は何も無いんだから、それよりはずっといいはず。

66話 拗ねちゃいました

「そうだ。ミレイもお風呂入るかい？川で体を洗うより暖かくてさっぱりして気持ち良いよ。」

そういえば、未だにお風呂は伝えていなかった。

実際風呂桶を作るのは大変だという事もあるが、それなりに暖かかったこともあるし川での水浴びで十分だった事もあり後回しにしていた。

自分だけはここに帰ってきて入っていたのだが。
だからこそ余計に伝えるのが後回しになったのだが。

「そうなんですか、でしたら入れてもらえます？」

「ちょっと待ってね、用意するから・・・いや、ミレイにも用意するの見てもらったほうが良いかな。こっちに来て。」

さつきは桶の中で体を洗ってしまったので、水を交換したほうがいい。

そこからやってもらって、村で作るかどうか考えてもらおう。

「そういえば、ミレイはチカラ上達した？」

「はい。火や風は相変わらずですが、飲める位のお水を出す事が出来るようになりましたよ。」

「じゃ、ミレイも旅をしようと思えば出来るんだね。ガスはどうだろ？」

「ガス君は水を出すのが苦手みたいです。いつも「水なんか川から汲んでくればいいんだ！」って言ってます。火は随分大きなを出せるようになってるんですけどね。」

「ミリヤさんは？ミレイが教えてるんでしょう？」

「はい。お母さんは・・・なかなか上手くいかないみたいです。でも最近になって怪我の治療は出来そうになってますよ。火とか水とかはまだ駄目なのに不思議です。」

「へー、怪我を治せるようになりそうなんだ。すごいね。」

話している間に用意ができた。後は暖めるだけ。

「さっき僕が入るときはジンに暖めてもらったんだけど、ちょっと僕が温めれるかやってみるね。」

「ジンさんが温めたんですか？ジンさんもチカラが使えるんですね。本当にどこから来たんでしょう。」

ジンにご飯を食べさせた時に入れた意識と同じ様にやれば温まるはず！とやってみたのだが、ジンのようにはいかない。何が違うんだろう？

それなら、温めるなら水の中で火を熾してやろう。と考えたのが間違いだった・・・

「あちち！」

手の中に火を出したら、その周りがすぐに温まり、熱くなり、腕を

やけどしそうになった・・・
上手くないものだ。

「大丈夫ですか？」

師匠としての面目立たず。心配されてしまった。

「暖かくなるようお願いすればいいんですよね？」

そう言つて手を入れると・・・湯気が立ち始めた。
師匠の面目・・・

「ミレイは本当に何でも出来るね。今度僕に教えてくれない？」

これが陰陽師として法を使えるようになったからなのだろうか。チカラは元は西側の物。東側には扱えない側のものなのだ。

ため息をつきながら言つと、ミレイがあわてていた。

「あわてなくてもいいよ。ミレイがあまりにも凄^すいから、ちょっと拗^すねただけだから。ミレイがいろんな事出来るようになってるのは素直に喜んでるんだよ。」

本当にね。自分以上になってくれた方がありがたいなんだから。

67話 計画的ですか？

「本当に気持ち良かったです。ありがとうございます。」

お風呂から上がってきたミレイ。ほんのり赤くなっていていい感じになっている。

「でしょう？よければ今度がんばって村にも作ってみて。あ、温めるのは本来は下から火を焚くんだよ。村に作って、ずっとミレイが温めるのは大変だから火を使って温めるようにしないかね。」

「そうですね。私がいないと入れないっていうのも不便ですしね。」

「作るにあたっては、みんなでいろいろ考えてみてよ。風呂桶なんかは作るのが大変だけど、他にももっといい方法だってあるはずだしね。」

「そうですね。でも、入ったことがあるのは私だけですし・・・他の人にも入ってもらわないとよく分からないかもしれません。みんなにもここで一度入ってもらっても良いですか？」

「うーん。ここに入るのはミレイだけにしたいんだけどな。あんまりこの家の事みんなに話したくないんだ。だめかな？」

「え、私だけ？ 私だけ特別なんですか？ありがとうございます。嬉しいです。」

「うん。いろんな事を村の人に伝えていこうとは思ってるけど、まずはミレイに伝えて、それを村のみんなに伝えるようにしていきたい」

いんだ。そうするとミレイばかりが大変になっちゃうかもしれないけど、それでいいかな？」

「わ、なんかすっごい大切な役を任される感じですね。がんばります。」

「ありがとう、がんばってね。」

今まで何も出来ないとないがしろにされてきたミレイだけど、治療が出来るようになって今では大切にされている。

自分が直接村に伝えるのではなく間にミレイに入ってもらえると、もっとミレイが大切にされる。

役に立たなかった人でも何かのきっかけで役に立つようになるかもしれないと思ってもらえれば、村の中でないがしろにされる人は出なくなるかもしれない。

ただでさえ少ない人なんだ。そんな所で隔たりなんてできないほうがいい。

それに、この家にはあまり人を入れたくない。

ミレイに会ってから扉を隠しはしたのだが、何かのはずみで潜^くつてしまうかも知れないのだ。

他にもこの家の作りも変わっているし、村には無い変わった物がある。

何より人避けの法の事などあまり知られたくない。
法など陰陽師としてのものは伝えるつもりが無い。
陰陽師の技は、ともすると扉を開いてしまうかもしれないものなのだ。

もし誰かが扉を開いて向こうの世界に行ったら、戻ってこれなくなるかもしれない。

向こうからは扉を開けないのだ。こちらから開いた扉はじきに閉まってしまう。

そうだったら帰ってこれるのは最初に開いていた扉だけ。

今こちらの人が向こうに渡ったら生きてはいけなだろうし、この世界の事を向こうの人が知ってしまったらどうなるか分からない。

そんなリスクはいらない。

「じゃ、そろそろ寝ようか。布団一つしか無いから、一緒に寝れば良いよね。」

いつも雑魚寝してるんだから、気にしなくて良いでしょう。

68話 寝物語

「ふかふかで気持ち良いです。」

「がんばってこれが作れるようになってね。ま、その前にまずは簡単なタオルからの方がいいだろうけど。」

「そうですね。いきなりこんな大きなのは大変ですから、まずはタオルを作ってみます。どうやって作るのか教えてくださいね。」

「まずは糸を作ってからだね。ある材料を全部糸にしてから、それから形にしていこう。どうがんばっても時間はかかるんだから、じっくりやっていこう。」

「長さにしてどれくらいになるんだろう？あるだけで足りるのだろうか。」

「明日からまた出かけるから、僕がいない間にがんばってみてね。」

「え、また出かけちゃうんですか？」

「うん。旅をしている間に村があつてね、そこで用事が出来ちゃったんだ。ついでに糸にする材料をもつと持ってこないと多分足りないからね。」

「やっと帰ってきてくれたのに、すぐいなくなっちゃうのは寂しいですよ。明日一日くらいは居てくれませんか？」

「ごめんね、どうしても急いでやっておかないといけない事が出来

ちゃったんだ。今度戻ってきたらゆつくりしていられると思うから。ごめん、やっぱり明日には出かけないといけないんだ。」

「いじわるです・・・」

腕に抱きついてきた。女の子を悲しませたくはないんだけど・・・

しかし遅くなってケナフが枯れてしまっても困るし、ミーシャの事もある。ついでにナイフも作ってもらいたい。もしかしたら火炎様も分裂しているかもしれない。

一日くらい変わらないかもしれないが、それでも急いでおいたほうがいい。特にミーシャの為に。

「私も付いて行っちゃだめですか？」

「ミレイが居なくなっちゃうと、誰かが怪我したとき困っちゃうからね。ミリヤさんがちゃんと治療できるようになるまではがまんしてね。」

「そっか・・・そうですね。じゃ、代わりに旅の間の事を聞かせてください。」

「それなら僕が聞いて欲しいくらいだよ。ほんとにいろいろあったんだから。」

ゆつくりと話し出す。

自分が話し下手な事がとてももったいないと思った。

それでも順を追っていく。

最初に見たしたの世界は凄く広くてどこまでも続いていたこと。

そこに居た動物はこの近くでは見たこともないような物ばかりだったこと。

村に近くを流れている川が下に流れ落ちていく迫力。

最初に出会った小さな人が、土を美味しそうに食べていたの事。

最初に見つけた村で、水の中に不思議なものが居たこと。

次に見つけた村では女の人が少ない、お嫁さんを探している事。

いつしかミレイは眠りについていた。

69話 ミレイが暴走しました

「ミレイ何してんの!」

「ケイさんの子供が欲しいです。」

朝目が覚めたらミレイが上に居た。

いや、子供が欲しいって・・・ だからっていきなり強姦するか??

「とにかく一度降りて降りて。落ち着いてよ。」

「でも・・・」

「でもじゃなくて!」

「はい・・・」

素直でよろしい。 のか?

「何でいきなりこんな事したの?」

「だって、前にお願ひしたときは駄目って断られちゃったし、また今日から出かけちゃうって言い出すし、そしたらまた暫く会えなくなっちゃうって思ったら・・・」

そういえば前に結婚して欲しいと言われた様な気がする。

でも、その時はちゃんと待ってくれるって納得してくれたはずなのに・・・

「それは前に話したでしょ？今はまだ駄目だから、大丈夫になるまで待ってって。」

「そう言っただけ！でも、他にも村があつて、そこに急いでいかないといけないって！誰かに取られちゃうかもしれないって思ったから！」

あー、他に誰かいい人が居たと思つたって事か？

「急いでいかないといけない理由は話したじゃない？ウィンディーネってというのは、ジンと同じ様な感じの子だって。」

「でも！他の娘に急いで会いに行くって事でしょ？その娘の為に行くんでしょ？」

「いやまあそうだけど。そうなんだけど！言っただけ、その子の姿はミレイそっくりなんだよ？」

いろいろ話したけど、さすがに姿がそっくりだとは言えなかったのだ。

自分がジンに会った時に感じたものを考えると、それを言うのは申し訳なかった。

自分とそっくりな姿のモノが居るというのはかなり複雑な気持ちになる。決していいものじゃないのだから。

「え・・・私と同じ姿なんですか？」

「そう、同じ姿。その子が倒れているのを治そうと思った時、教えてもないのに、僕でも出来ない治癒の力を使うことが出来るミレイの事を思い浮かべたんだ。多分それが原因でだと思っただけど、

姿がミレイそっくりに変わったんだ。」

「じゃ、私とそっくりの娘を助けに行くんですか？」

「そうだよ。実際はもう大丈夫だとも思うけど、それでもね、助けたいんだ。あと、ジンや火炎様を紹介したいっていうのもあるかな。自分と同じ様な存在が居るっていうのは、多分嬉しいことだからね。」

「

「やっぱり待てないです・・・そんな事言われたら待てないです！」

押し倒されました・・・

70話 やっちゃった

元の世界では人との関わりを持とうとしなかったケイ。

小さな頃は学校に行っていて周りに人は居た。

しかし修行に関する事を話すことは禁じられていた。

修行の関係で遊びに行く事も出来ずテレビも見ない。そうなければクラスの人と話す事も無い。

中学を出てからは2年もの間山に籠っていた所為で学校という人との繋がりも無くなった。

仕事を始めると関わってくるのは師匠と顧客。

顧客に関わりを持ち続けたいと思えるような者など居るはずも無く、その周りにも居なかった。

自由な時間もありはしたが、わざわざ自分から知らない相手に関わりを持ちたいと思う事もなかった。世界に馴染めなかった。話す相手は精々が仕事でのやり取りと食堂での注文くらい。

力が無いという理由で周りからは目を向けられなかったミレイ。

周りに村人は居たが、非力な親子二人だけの生活を送っていた。

まともに戦うこともできず、食べ物が入らないこともよくある事だった。

村では15にもなれば普通は結婚をして子を成していく。

年下の者すらみな結婚していくのに、自分は声を掛けられることも無く声を掛けても返事は拒絶。

この先結婚する事は出来ない。それどころか誰かとまともに会話すら出来ない状態に居た。

家族二人だけで生きていく事が、母と過ごす事だけが生きることだった。

今食べることだけが全てだった。

そんな二人が出会った。

虚構を纏わず偽らず、素直に目を合わせ心のまま振舞うミレイ。自分を助け、周りを助け、知らない事を数多く教えてくれるケイ。

二人はお互いを必要とし、求めた。

人としての関わり。

家族以外で初めての安らぎ。

引かれあい、求め合い、仲を深め、馴染んでいく二人。

過ごしてきた生活の違いによる戸惑いなどもありはしたが、些細なことだった。

唯一障害と言える物はケイの事情だけ。

障害の内容が分からない事での不安。内容によっては引き離される事になるという恐れ。

しかし、ミレイの行動によりケイはその事情を跳ね除ける決心をする。

どのような事になろうともミレイと一緒にあり続けよう。

ミレイは離れたくない、誰にも渡したくないという心に従いケイを掴む。

ケイはミレイの求めに応じ、その手を引き寄せ、体を抱きしめ、心を掴み、守っていくと誓う。

お互いにのみ意識を向け、時だけが静かに過ぎていく。

幕間 それぞれの思い

「よお、ミレイどうしたんだ？前から気にはなってたんだが、やけに幸せそうだな。」

「あんた・・・ほんとに大丈夫かい？ ケイさんがふらつと居なくなつてミレイが凄く寂しそうにしてた事は覚えてるかい？」

「そりゃ覚えてるさ。もともとふらつと来たケイさんがふらつと居なくなつちまつたんだ。もしかしたら戻って来ないかもしれないって考えちまつたからな。俺も寂しく思つちまつたんだ。よつく覚えてるよ。」

「その後またすぐに出て行つちまつた事は覚えてるかい？」

「ああ。他にも村があつたつて言つて行つちまつたんだろ？」

「そんな時のミレイはどうだった？」

「・・・そついや、元気に送り出してたな？なんでだ？」

「ごんの朴念仁が！」

「ありがとな、嫁に来てくれて。ほんとに助かったよ。」

「わたしだつてそうよ。こんな強い男に嫁にもらってもらえたんだから。これからもよろしくね。」

「残念なのは来てくれたのはおまえとフミンの二人だけだつて事だな。兄貴や弟に取られっちまわないか心配だあ。」

「あんたが守つて頂戴よ？わたしはあんたの嫁なんだから。フミンと違つて、あんただけの嫁なんだからね？」

「ああ。お前は俺だけの嫁だ。誰にも渡さねえさ。　（フミンは誰のモンでもなく、みんなのもんだよね？）」

「あんた・・・何考えてたか言つてごらん？」

「いやな、おまえも火災様みたいに元気な子供生んでくれよ？」

「ウィンディーネ様も行つてしまつたわね・・・」

「しょうがないさ。仲間がみつかったんだ。一緒に居たいって思うのが普通だろ？」

「そうだけどさ・・・ずっと居てくれたのに居なくなってしまうと寂しくてね。」

「それでも時々来てくださるんだ。それをありがたいと思つたほうがいいぞ？」

「・・・そうだね。気軽にあったかいご飯食べられる事を喜ぼうか」

「そうそう。この、ケイさんが持ってきたもんっていいもんだな。」

「鍋って言うんだってさ。ジュリが作り方を聞きに行ってるんですよ？早く戻ってこないものかしらね。」

ガツガツガツ
モグモグモグ
・・・zzzz

71話 和んです

「やっぱり雪がふるんだなあ。」

ここは山の中のケイの家。今ではミレイと二人で住んでいる。

その為にもう人避けの法はなくなしてしまった。一々手を引かないと入れないのでは不便で仕方ない。

ミリヤさんも連れてこようかというのもあったのだが、新婚の邪魔をしたくないと断られた。

もともと結婚した者は新たに家を作って出るという事が習慣としてあったので、確かに親が居たのでは不都合もあるので二人でここに移ってきた。

それでも2・3日に一度は村に顔を出していたのだが、雪が降ってはさすがに顔を出しに行くのはつらくなる。

（そろそろ向こうではクリスマスか・・・）

12月も暮れようとしている。

この世界にはそんな暦など無いのだが、ケイとしては習慣として無くせ無いので人に告げることは無いがそのまま使っている。

最近のケイとミレイは、布を作る事を仕事としている。
旅はしていない。

二度回ってから、ミレイも連れて各村に回ってミレイを妻として紹介して、それ以降は他の人にまかせている。

村の交流は大体がウィンディーネの居たサウス村と火炎様の居るイ

ースト村の人がミリヤさんの居るノース村に知りたい事を聞きに来て、ノース村からはノーム達が居るウェスに金属をもらいに行く。

村の名前は最初に着いた村を北と決めて自分が分かりやすいように勝手に付けてしまった。

これについては誰も反対意見など無く、そのまま定着した。

火炎様は二度目に行った時に分かれていたので、火炎様に了承をもらい一人小さい方にノース村に来てもらった。

やはりケナフを育てるには暖かくないと難しいだろうと思ったからだ。

今は冬で種をまく時期になっても居ないが、育てて布作りを進めたい。

ミーシャは今家の近くの池に住んでいる。

サウス村には居る必要がなくなったので、ジンの近くに移ってきたのだ。

今では二人でよく遊びに出かけている。

穏やかな日々が続いていた。

「ミレイさ、今度僕の生まれた所と一緒に行ってみない？」

「え？ケイはここで生まれたんじゃないの？」

「ここじゃないんだ。ミレイが知らないところで、ミレイにはすごく不思議なところかな。」

「そつえば、私ケイの事あまり知らないのかもしれない。ケイの

親ってどうしてるの？」

「多分生きてるよ。どこかにはね。」

「あはは、多分って何よ。知らないの？」

「うん。小さい頃に会った記憶はあるんだけどね。ずっと会ってないし、今どこに居るのかも知らない。誰かに聞けば分かるとも思うんだけど、居ない事に慣れちゃってるから気にしてなかったや。」

「ケイの両親でしょ？言わないし会ってないから死んじやってると思ってた。」

「もしかしたら死んじやってるかもしれないけどね。行った時にも聞いてみようかな。」

「行くならもう少し待ってね。がんばってこのタオルを作っちゃうから。それからでもいいでしょ？」

「そうだね。そうしようか。」

72話 はつぴいですか？

「ケイの生まれた所に一緒に行けないかもしれない。」

「ん？どうしたんだ？」

ご飯を作っている最中、ミレイの突然の言葉に糸を作る手を休めて顔を上げる。

「あのね、まだね、はつきりとはしてないんだけどね、もしかしたらね、赤ちゃんできたかもしれないの。」

「本当か！？ よし！ よっしゃ！」

「だから、まだはつきりとは分からないの。ご飯いっぱい食べるようになったし、時々気持ち悪くなるし、でもどこも悪いって感じしないし、チカラを使っても変わらないし。」

もしかしたらそうなのかもしれないって。ケイの生まれた所って、遠いんでしょ？もし赤ちゃんが出来たなら、一緒には行けないかなって。」

「なんだ、違うかもしれないのか・・・そうだな、今出来てるって分かるって事は、初めてでいきなり出来たって計算になっちゃうもんな。いくらなんでもそれは無いかな？ いや、でももしかしたら・・・」

「早く赤ちゃん欲しいの？」

「え？あ、うん？ いや、欲しいけど、こればかりはどうにもな

らないからね。出来てたら嬉しいよ。あ、出かけるのは、遠いけど歩いて行く訳じゃないから・・・いや、あんまり驚かしちゃいけないんだっけ？それなら止めておいたほうがいいのか？」

「どうしたの？ちょっと落ち着いてよ。もしかしてすっごく驚いた？」

「いきなりあっちに行ったら見るものすべてが・・・え？なに？どうした？」

「ケイでも混乱するんだね。もしかして初めてじゃない？ケイがこんなに取り乱してるの。」

「あー、そうかもしれない。いや、ミレイが風の悪魔に襲われた時モかなりあわててたよ？」

「そうなの？あの時は私の方が怖くて何も分からなくなってたからね。ケイがあわてても分からなかったよ？残念。ケイがあわてる所なんて滅多に見られないのにな。」

「赤ちゃんが出来たらいっぱい見られるさ。見たかったら元気に生んでくれよ？」

「だから、まだ出来てるか分からないんだってば！ケイになら分かったりしない？」

「それはわからな・・・一度診てみようか。もしかしたら分かるかも？」

「お願いね。まずはご飯食べましょうか。もう出来てると思うから。」

「

おなかに別の生命が宿っていれば、意識を通せば何か違うと分かるんじゃないかと思う。

お父さんか。自分が父親か。

実感なんて無いし、出来ているかも分からないが、嬉しいなあ。
帰省はどうするかな。

73話 覚悟しました

お腹の中に赤ちゃんがいた。
めでたくパパだ。

28年まともに人と関わってきていなかった自分が父親になる。
とりあえずミレイを抱きしめた。抱きついた。

嬉しいのは分かるのだが、頭の中が真っ白だ。ただただ嬉しい。

「ありがとう。」

抱きしめながらミレイに告げる。

「ありがとう。これからもよろしくね。」

ミレイが告げる。

ああ、もちろんだとも。これからずっと一緒だ。生涯守るぞ。何があっても。

口には出さず、代わりに口付けで答える。

何があっても？

そういえばあるかもしれないんだっとな・・・

その答えを確かめるために帰省しようと思ったんだ。

どうするかな。先に行って確かめてみるか？

それともまだ自由な時間があるのだから、それまでは息を潜めるか？
もう自分だけの事ではなく、ミレイと生まれてくる赤ちゃんの事でもある。

もし逃げ出さなければいけない事態になった時、お腹にいる状態と生まれてきた状態と、どちらが逃げやすい？

先に片付けるか。

生まれるまでミレイには心配など掛けないほうがいいのだが、生まれてから心配掛けるのも似たようなものだ。

先になんとしても片付ける。

どんな話が待っているのかは分からないが、どんなことをしてでも落ち着かせる。

ミレイと子供を認めさせる。

「ミレイ、やっぱり一度一人で行くよ。向こうにはお婆ちゃんが居るんだ。生まれてくる前に先に挨拶してくる。それまでミリヤさんの所にいつてもらえるかな？」

「そうね。お母さんの所で大人しくしてるね。どれくらいかかるの？」

「今すぐ行くわけじゃ無いよ。明日ミレイを送って行って、それから出て・・・どうだろ？5日くらいで戻れると思うよ。」

「あれ、意外と近いのね？もつと遠いつて思ってた。でも、2・

3日って言って帰って来なかった事あったしね。今度は大丈夫？」

「大丈夫だって、ちゃんと戻ってくるよ。赤ちゃんが生まれて来る時にちゃんと側に居たいしね。」

生まれてくるのはまだずっと先だけどね。

74話 なつかしい味

雪がうつすらと降る中、ミレイと連れ立ってノース村に向かう。

今でこそ皮の足袋に下駄もどきを履いているが、今まで靴も無い状態で雪の中を歩いていたと考えると、何故大丈夫だったのか不思議に思う。

道々食べれるものを探して摘んでいくが、さすがに冬ではあまり無い。

干し肉などある程度蓄えはあるが、心細くもある。

向こうから何か冬に食べられる物の種でも持ってこようか。

ミレイの手には出来立てのタオルがある。

糸は太く、ゴワゴワした感じではあるが初めての布だ。

ミレイはそのタオルで生まれて来る赤ちゃんを包むんだと嬉しそうに言っていた。

一つでは足りないだろうと作る為の材料は持たされている。

待っている間にがんばって作り続けるつもりようだ。

その姿を見て他の村人も作り出してくれるとありがたい。

「では、ミレイの事よろしくお願いします、ミリヤさん。」

「気をつけて。ちゃんと帰ってきてくださいよ?」

「もちろんです。僕も早く生まれて来る子を見たいですよ。」

「お願いしますよ? 私のお父さんはそう言って出かけて帰ってこなかったんです。生まれて来る子にそんな寂しい思いをさせないでく

「ださいね？」

「それ、私のおじいちゃんの事？ 私のお父さんはどうなの？ 死んじゃったって思ってたけど、もしかしてそんな風に居なくなっちゃった訳じゃないよね？」

「あんたのお父さんは違うわよ。狩りに行って、帰ってこなかったの。血がいつぱいあった所があったらしいから襲われちゃったんでしょうね。」

「まあ、帰ってきてくれなかったのは一緒なんだけどね。」

「お父さんの事、いつぱい話して？」

「じゃ、僕はこれで出かけますね。二人とも元気でいてくださいね。」

「いつてらっしゃい。」

「帰ってくるの待ってるね。」

これからが戦いだ。

扉をくぐって元の世界。本当に久しぶりだ。

明日顔を出すとメールをしておく。これから向かうと夜になるだろうから、どこかホテルで泊まって行こう。予約もしておく。

シャワーを浴びて身支度を整え、車に乗り込む。

感覚が追いつかない。ゆっくり行ったほうがいいな。事故でも起こして帰れなくなりましたでは笑えない。

部屋に荷物を入れて食事に出かける。

何を食べても、美味しいのだが味付けが濃い。
随分と変わったものだ。

75話 好々爺は爺さん

目覚めてからケイはゆったりと朝を過ごす。

泊まったホテルには朝食が付いていたのでパンとコーヒーを取る。

人の出入りがせわしないが、それを眺めながらゆっくりと食べる。今日は平日である。誰もが忙しそうに、時間に追われるように慌しくしている。

部屋に戻ってシャワーを浴びてチェックアウト。

これから師であり祖母である一族の総帥に会いに行く。

場所は変哲も無いマンション。郊外の4LDKだ。

総帥はそこに付き人と2人で居る。

何故活動の中心が都会である自分が田舎で生活をして、取り纏めをPCで行い出歩く必要も無い総帥が都会で生活をしているのかは不思議でならない。

10時近くに到着して呼び鈴を鳴らすと、付き人に迎えられ中に入る。

中もどこにでもあるような一般家庭の様相だ。奥の一室を除いて。

「お久しぶりです、総帥。」

「会つのは5年ぶりか？元気そうだなによりじゃ。」

リビングに座る相手に挨拶をする。

すでに80を超えているはずだが背筋は伸び、目には力が籠っている。

る。

「来いと言ったのは来年だったはずじゃが、何かあったのか？」

目には力があるが、威圧するでもなく突然の引退宣言を咎めるでもなく、気楽に話しかけてくる。

「それが気になりました。来年何かあるんでしょうか？理由も告げず引退したいと言っても叱責も無かったので気になりました。」

「それが落ち着かんかったか？」

「はい。最初は気ままに居たのですが、時が経つにつれ気になります。」

「気ままに何をしておった？」

「見知らぬ所を見て回っておりまして。それまで自分の世界を閉じていたので、気持ちが変わると見るものが変わると実感しておりました。」

「ほう、確かに目に生氣があるようだしな。5年前ですでに死んだような目をしておったのが今は力が感じられる。」

「そうでしょうね。」

「余程仕事が嫌じゃったようじゃな。」

「はい。やる意義を見出せませんでした。」

「はつきり言いよるの。これが代々続いている家業じゃ。それを否定するか？」

「はい。過去ならばいざ知らず、現代において必要なものとは思えません。」

「なくして良い物でも無いと思うがな。」

「技の継承であれば仕事とせずともできましょっ？」

「繋ぐならば仕事とした方が都合がいいでな。使わぬ物は消えて無くなるものじゃ。」

「消えて困ることも無いでしょう。」

「困らぬ事も無いのじゃがな。まあよい。そんな話をしに来たのも無かる？」

これからが本題か。

76話 探りあい・腹

「来年どんな話があるかですよ。今聞くことは出来ないんですか？」

「いやかまわんよ。おそらくそれに関わる事じやろうから聞くが、今まで何をしておった？詳しく話せ。」

「ですから、色々なところを見て回っていたんですよ。海外とも思っただんですが、まずは国内を見て回っていました。」

「それはどこじゃ？いつ頃何を見てきた？詳しく話してみよ。」

「詳しくと言っても・・・どこというでも無くふらふらしてただけですからね。ドライブをしながら適当に泊まったり、どこにでもあるような公園で昼寝を試みたり、言ってしまうえば他愛も無いことばかりですよ。」

「では昨日は・・・家におったのじやろうか。一昨日はどこにおた？その前はとうじゃ？」

「あの、それが何か？」

「嘘は要らんから正直に話せと言っておるのじゃ。色々見て回ってはあったのじやろうが、国内ではあるまい？」

「・・・海外には出ていませんよ？」

「じやろうな。海外とは言えんような所じやろ？」

「・・・何か知ってるんですか？」

「大体の想像はつく。一族の者はお前ぐらいになると同じ様な行動を取るでな。爺さんもそうじゃったよ。家業として習った事が役に立っただじやろ？」

「・・・ええ、大変役に立ちました。周りを気にせずに思いっきり振るえたのは気持ち良かったですよ。」

「やはり異世界へ行っておったようじゃな。何かあったら連絡を入れるように言っておったはずじゃがな？」

「すいません。報告は向こうを調べてからと考えていたものですから。」

「その割りには中々言い出さんかったな。まあいい。ここで締め上げるつもりは無い。どんな生活しておった？」

「原始人のような生活ですね。山の中での修行が役に立ちましたよ。もしかしてこの為のものですか？」

「まあそうじゃな。生活出来るようになっておると、色々探索するのに都合が良かる？」

「無くてもいいような気もしますがね。テントやら持ち込んでも良かったと思いますし。」

「そんな無粋な真似は許さんよ。」

「無粋ですか。確かにそんな事をしたんではキャンプに行くのと変

わらないでしょうからね。異世界を楽しむとは言えないでしょう。」

この婆さんどこまで知ってやがる？

もしかしてどこからか監視でもしていたのだろうか。

だとするとミレイの事も知っているのだろうか？

「話というのは異世界についてだったんでしょうか？」

「そうじゃよ。扉が開くじやろうからな。その事を話すのもうつ。見合いじゃな。どうせ付き合いのある女子もおらんのじゃろ？はよう結婚して子供を作れ。」

77話 とりあえずはっぴー？

「扉ですか。確かに開きましたね。あれはどういった形で開くものなんですか？こちらの世界から開けようとしても開きませんし、向こうから開けたものは直に閉まってしまいます。」

「実はよく分かつてはおらん。30近い年の、本家の者の近くで開く事はわかっておるのじゃがな。何故か枝葉の者には開かず本家のみじゃ。おそらくは血の濃さとチカラが関係しておるのじゃろう。」

「チカラ・・・住む所にチカラが溜まるという事ですか？」

「そうなんじゃろうな。じゃから住む家を田舎に用意してある。いつ消えるかも定かでは無いんじゃ、都会で開かれても都合が悪かる？」

「そうですね。マンションで開いて、取り壊しが決まりでもしたら非常にまずいでしょうね。」

「それで不便でも田舎に家を用意してある。修行にも都合がいいしな。続けていよう？」

「はい。必要無い物とは思っていましたが、止めると調子がおかしくなりますから。」

「それで見合いじゃ。枝葉の者から勝手に決めるがかまわんよな？」

「それがですね・・・すでに相手は居りまして。他を娶る気にはな

れません。すでに子もなしております。」

「それはどこの者じゃ？異界か？」

「はい。」

「なんとも・・・胸糞の悪いことじゃな。名前は？」

「初めて受け入れる気になった人ですよ。反対されても従う気はありません。」

「決まった相手が居た訳でも無かった以上反対してもしょうがないわな。これが浮気だったら許さんがな。名前はなんと言っ？」

「ミレイです。異界の者が気に入らない訳では無いと？」

「ああ。爺おじいが異界で浮気をしおってな。気に入らただけじゃ。そのミレイの親の名は？」

「ミリヤです。父親の名前は分かりません。狩りをしている時に死んだそうです。」

「ミリヤか。これを偶然と言っか・・・髪の色は薄かったか？」

「はい。何か関わりでも？」

「おそらくはお前のいとこじゃな。一族の者であるなら血の濃さを保つことにはなるか。」

「・・・おじい様の浮気相手の孫ですか？」

「多分な。昔あの家はわしらが住んでいたところでもあるしな。出た先も似たような場所だったんじやろう。これは血筋か？それとも異界の女はそんなにいいか？」

「一応言っておきますが、私は浮気ではありませんよ？ 混同なさいませんよう。」

「そうじゃな。お前に当たってもしかたないわな。すまん。」

「しかし、いとことしては年が離れていませんか？ミレイはまだ20になっていないように思えますが。もしかして向こうと成長が違うとか？」

「そんなこともあるかも知れんな。確認はしておらん。人が見つかったのもそれほど昔では無いしな。まだ数が少ないじやろ？あまり関わりを持たんように決めてあるしな。」

ミレイの事を反対されないのはいいが、あまり関わりを持つな？
思いつき関わってしまったっている。これはまずいんだろつな・・・

78話 逃げ切りました・・・か？

「あまり関わりを持たない様にですか？それはまた何故？」

「それは決まっている。わしらは向こうの人間では無いからじゃ。」

「その割には色々関わった形跡があったのですが。」

「どんなものがあつた？」

「まずは食べ物。こちらの物が数多くありました。食べて美味しいと思えるのは、品種改良された物が育っているのだと感じました。」

後は動物ですね。知らない物も居ましたが、だからこそ恐竜の様な物が居る中で熊が居たのはおかしいのでは？

極めつけは地形です。 あんな地形は自然に出来たとは思えませんよ。」

「地形は行つてみると分かんが、食べ物に関しては種を蒔いた覚えはある。ちゃんと育つておつたようじゃな。動物じゃが、確かにウサギは連れて行つたが熊は知らんぞ？ しかし、どれも直接人に関わった訳では無い。文明を伝える様な事はしないようにしておつたという事じゃよ。」

これはまずい。非常にまずい。

まさか皆殺しにしたりはしないと思うが・・・

「それは何故です？」

「文明の発達に問題が出そうだからじゃよ。考える事をしなくても

誰かが教えてくれるでは誰も考えんだろう?」

「そうですね?ある物をより良くしようとする人は何時何処にでも居ると思いますが。」

「ふむ・・・すでに何かしたか?」

「焼き物を少々・・・」

「土器か?教えてしまった物はしかたないが、もつするなよ?文明がいきなり進みすぎるのはまずい。」

「あと布も少々・・・」

「・・・他には?」

「金属もありますが、これは現地で出来ていたものですから。」

「焼き物が無かったのに金属は使っておったのか?」

「使っていたわけでは無いのですが、土を食べて金属を吐き出す者が居りまして。その者は指で加工できておりました。材質まではいじれないようですが。」

「そんな者があるのか?わしは知らんぞ?」

「では、水の精霊や火の精霊などは?」

「知らんな。そんな者があるのか?」

「はい。それが倒れておりましたので、救う為にチカラを使いました。継続して使う必要があったため現地の人間にチカラを教えたのですが、そのチカラを使って新たに生み出す者も出ました。何か分かりますか？」

「それは生き物を作り出したという事か？そんな事が出来ると聞いたことも無いぞ？」

「西から伝わった物の改良したチカラです。一度西に聞いてみては？使い魔などがあつたと言われている所です、何かあるかも知れません。こちらにも式神などおりますし。」

チカラを伝えたことは有耶無耶にしたいなあ・・・

「いや、いい。元々居た者について詮索しても仕方なからう。これ以上は何もするな。その上で観察をしておけ。何かあるかもしれないが、その時の判断は任せる。無闇に干渉し過ぎるなよ？」

「分かりました。」

「今度その嫁と一緒に挨拶に来い。一族として迎え入れる。」

「子が生まれたら連れてきます。それでは失礼します。」

79話 男にはつらい場所

「ああそうそう、俺の両親がどこに居るのかご存知ですか？20年も会ってませんが、一応孫が出来た報告くらいした方がいいでしょうから。」

「あやつらなら異世界におるぞ？お前ら兄弟を連れて探検すると言っておったので、殴り倒して取り上げたんじゃ。それで諦めると思ったんじゃが、二人だけで行きよった。」

音沙汰も無いでな、何処におるのか生きておるのかも分からん。2代阿呆がつづいたと思っておったんじゃが3代だったようじゃな。あやつらの異世界の扉は違う所に出ておる。何処におるかは気長に探すしか無いな。」

「それですつと見かけなかったんですか。異界に魅せられたにしても酷いものだ。俺は子供を放置する気はありませんよ。」

「結果として異世界に入り浸るなら同じ様なものじゃ。これでわしの後を継がせられる直系の者は真治だけになったか。」

「あいつになら任せられましよう？少なくとも俺よりはずっといいはずです。」

「お前の様に家業を否定したりはせんだろうからな。血の継承の事を考えると見合いはあいつにさせるか。」

「あいつならば相手くらい決まっているかも知れませんが。無理強いはなさいませんよう。」

「全てお前の取った行動のとばっちりじゃ。精々謝り倒すことじゃな。」

「跡目の事も含めてそうしましょう。」

「真治に異界の扉が開くまでは話すなよ?」

「そうか、そうですね。知識の継承が終わるまでは会わない様にしておきますよ。ミレイの事を聞かれても答えられませんから。」

「これから兄弟仲良くやっていけ。そろそろ昼じゃ。飯を食っていくか?」

「相伴にあずかりましょう。」

付き人が何か作るのかと思ったが、外食だった。

何か作ってもらえるなら薄味にしてもらえたのだが、外食ではそうもいかない。

総帥の今の生活について等聞きながら食事を終え、送った後買い物に出る。

ミレイを一度紹介するために連れてくるのだ、服がいる。

女物を買に行くのは抵抗があるが、誰かに頼むわけにも行かない。諦めてデパートで適当に見繕ったのだが、下着も買わないといけないう事に気が付いた。

赤ちゃんが生まれてくるのはおそらく夏頃だろう。つまりは薄着になる。薄着に下着無しはありえない。

周りの目に耐えながら買い求めた。

今日は落ち込んだまま眠ろう。

80話 早く逢いたい

昨日の精神的ダメージを回復させ、朝食を取り車を走らせる。

その心は軽い。

これで心置きなくミレイと暮らせる。

子供が生まれてくるのを楽しみに待っていていられる。

今は早くミレイに会いたい。会って抱きしめたい。

お土産としてタオルと布団、それに食料を用意した。

手作りでタオルは作っているが、おそらくいくら作っても足りないだろう。

食料はこちらの世界を知ってもらうきっかけ作りの為だ。

妊娠している今、いきなりこちらの世界を教えるのはいい事ではない。

色々な文明の利器を持ち込むのは、おかしい物を見るのに慣れていてもおかしすぎる。

少しずつ慣れてもらおうと考えたのが食料と、それを入れている容器だ。

食料としてビニールに入った米と瓶詰めの調味料。

まずこれらを見て味わってもらおう。

ミリヤさんには内緒にしてもらわないといけないのが心苦しいが。

・・・ミリヤさんだけならいいのか？

自分の叔母だ。身内だ。直系と言える血筋になるのだから。

ミリヤさんも一緒に住めば・・・だめか。
村に治療が出来る人が居なくなってしまう。

やはりミリヤさんには知らせる事は無理が出てくるか。
そうなると何処まで話そうか・・・

ミリヤさんの父親については話したほうがいいのだろうけれども、
今更、自分が父の浮気で出来た子だと知らされるのもどうなのだろう。

・・・そういえば祖父はどうしているのだろうか？

葬式に出た記憶が無いから生きているのだろうか、どこに居るのか
どうしているのかは聞いていなかった。

・・・もしかしたら未だに罰を受けているのかもしれない。

あの人ならやりかねないと思うってしまう。

未だに浮気の事を怒ってる様だしなあ。

家に着いたらメールで聞くだけ聞いてみよう。

”子に罪は無いのだから”で気を治めてくれる事を祈ろう。

家に着くと日が暮れていた。

すぐに会いたいのが、この時間では遅くなりすぎるか。
荷物を降ろしてメールしておこう。

”ミリヤさんに父親の事を話しても大丈夫でしょうか？”

文章に思った。

これ、神経逆撫でしてる。

81話 おあずけです

メールを出す事を思いとどまって眠り、再会の朝が来た。
菓子パンとコーヒーで朝食を済ませて着替え、異世界へ。

皮を着るのは慣れたとはいえ、洋服を着た後だと違和感が酷い。
早く布で服を作りたいものだ。

早速迎えに行こうと扉を開けると大雪が降っている・・・

さて困った。すでに雪は膝上位まで積もっている。
熊の毛皮を重ね着しているとはいえ、これは寒い。歩いて行つては
力尽きそうだ。

傾斜があるとはいえ、新雪なためスキーやスノボでは自分ではたど
り着けそうも無い。
早く逢いたいが行く手段が無い。

大自然には勝てないか。

ため息をついて諦める。

今日は糸でも作つてみよう。

迎えに行けると思つていただけに落胆が酷いが、嘆いていても仕方
が無い。

糸を紡ぎながら考え事でもして過ごそう。

向こうの世界にミレイを連れて行ったら、どんな反応をするだろう？
やっぱり固まるくらい驚くだろうか？

それとも面白がるだろうか？

行く時どんな感じになるだろうか？

連れ出すには自分の故郷に連れて行くと言っていけばいい。

ついでに祖母が会いたがっていると言えれば問題はないだろう。

着替えはかつてあるので服装に問題は無い。

ちゃんと着せれるかは問題あるか？羞恥心さえなければ問題ないだろう。

車に乗る事も問題は無いだろう。走り始めたら質問攻めにあいそうだが。

食事は・・・外食は止めておいたほうがいいな。

文字が読めないし、注文するのもひと悶着くらいはありそうだが何かを買って車の中で食べるのが無難か。

宿泊。一番問題になりそうだな。

シングルで泊まったらどうなるか面白そうだが、トラブルを起こすとどうなるか分からないのでツインしかないな。
もしくは車で寝てしまふのもいいかもしれない。寝づらいが。

やはり総帥の所に連れて行く前に慣れておかないと大変だな。
ちよくちよく向こうの部屋に入るくらいはしておくか。

扉の前のカモフラージュを無くしておこう。
これから挨拶に行くまではずっと付いていられるんだ。偶然入ってしまったって構わない。

安定期っていつ頃なんだっけ？

82話 やればできるじゃん

翌日も雪。

吹雪く事はなかったが、積雪は凄い。すでに腰辺りまである。

「家の周りくらいは雪掻きをしておくか。」

板を使って雪を寄せていく。中々に重労働だ。

こんな中、餌も取れないだろうし動物はどうしているんだろ？冬眠してるのかな？

家の周りの雪を外側に押しやり場所を開けた。

固定化の法を使ってある壁は腐ったりはしないが、雪が張り付いているのは嫌だ。

壁から部屋の温度を取られている気になる。

カマクラの事を考えると意外と保温性はあるのかもしれないが、離して風除けの壁にする。

ふと思って雪に意識を通して、土を動かすようにチカラを使ってみると動かすことが出来た。

「これなら道が作れそうだな。」

村まで作る事が出来るかどうかは分からないが、途中まででも作っておこう。

雪がやんだらやる事にはなるのだ。

家の前から先10m程意識を通して道を作る。土よりも軽い分楽に出来た。

これならもしかしたら村に着けるかもしれないと食料を持って道作りに取り掛かる。

水は要らないだろう。何せ周り全て水みたいなものだ。

道作りも半ば辺りまで進んだ所で一休みする。

休み場所として大きな力マクラを作り、枯れ枝に火をつけ暖を取り、その火で軽く炙^{あぶ}った干し肉を齧^あってから一眠り。

雪を掻き分けながら来たのであれば体も温まっているのだろうが、チカラを使っているので疲れはしても暖かくはならないのだ。毛皮のありがたさが身にしみる。

小一時間程で目を覚まして、作業再開。

「今までにこれほどチカラを使い続けたことあつたかなあ。」

片手に松明を持って進んでいく。

手を使っているわけでは無いので出来ることだ。少しは温まれる。

「もう少しで逢えそうだな。」

しかし・・・村は今どんな状態なんだろうか？

背の低い家だし、見えなくなっているかもしれない。

間違つて家を壊してしまつたら怒られるだろうな。

森から出たあたりからは気をつけて行こう。

そう思っていたのだが、杞憂に終わったようだ。

村は簡単にだが雪掻きがされており、ところどころに焚き火がある。屋根は雪を固めているのだろう。カマクラ状態だ。

出入り口と思われる所には板がある。風・雪除けにしているのだろ

う。

雪のおかげで普段よりもすっかりしたものになっているんじゃないだろうか。

まさか家の場所が変わっている事はないだろう。ミリヤさんの家に向かう。

「ミレイ帰ってきたよ。中に居るかい？」

83話 呼ばせない

「おかえり、ケイ。早かったじゃない。」

「うん。もしかしたら拗れるかも知れないって思ってたんだけど、案外すんなり挨拶できたんだ。よかったよ。本当は昨日戻ってきてたんだけど、雪が凄かったから家で休んでたんだ。はい、お土産。」

持つて来た干し肉を渡す。

「ありがと。丁度これからご飯の用意するところなの。ケイはゆっくり休んで。ここまで来るのも大変だったでしょ？」

そう言つてミレイは出て行つた。

ミリヤさんと二人つきりになる。ちよつと会話に困るなあ。

「でも、ケイさんの生まれた所は本当に近くなんですね。3日で戻つてこられるなんて。どの辺りなんです？」

「いえ、本当は凄く遠いところなんですよ。ただ、ちよつと特別な方法があつて急ぐことが出来たんです。そこに行く以外には使えないのでみんなには言えないんですけどね。」

「本当にケイさんはいろんな事を知ってるのねえ。あなたの生まれた所はどんなところなんです？」

「ここと比べるととても不思議な所ですよ。ただ、あんまりいろんな事を教えるとその村の為に良くないって怒られちゃいました。」

「あら残念。それじゃあこれからは教えてもらえないんですか？」

「そういう事になっちゃいました。みんなで考えて行く事が大事だから、他所から来た者があれこれやって生活を変えてしまつていい訳が無いって。そう言われて、僕も納得しちゃいましたから。」

「それじゃあしょうがないのでしょうか。でも、ミレイの事はお願ひしてもいいんでしょう？」

「はい。ミレイとの結婚は喜んでもらえましたよ。今度ミレイを連れてきなさいって言われましたので、僕の祖母を紹介しに連れて行きます。子供が生まれてからですけどね。」

「それはよかつたわ。反対されて、戻つて来てくれなかつたら、あの子泣いちゃいますよ。ミレイを泣かせたりしないでくださいね？」

「はい、それはもう！僕もミレイと離れたくないですから。」

「あらまあ、ご飯を食べる前にごちそうさまだわ。」

「お義母さんうまい！」

「やつとお義母さんて呼んでもらえたわ。これで私にも息子が出来て、それでもう暫くすると孫ができるのね。そうすると私もおばあちゃんと呼ばれるのかしら？」

「ご飯の用意できたよ。二人とも出てきて。」

「用意が出来たみたいですよ。行きましょう。」

「そうね、で、おばあちゃんと呼ばれるのかしら？」

「・・・気にします？」

「いえ？孫にならそう呼ばれたいわよ？ただし、あなたは駄目！ミレイにも呼ばせないわよ？」

「は～や～く～！」

「はいはい、今行きますよ。ケイさんも行きましょう。」

本当にミリヤさん元気になりましたね。

84話　そこでやきもち？

ミレイの作ったご飯を食べていると、ジンが寄って来た。随分久しぶりに会った気がする。

こちらに預けてから、随分と火炎様（の子供）と仲良くなっていた。やっぱり似たものだからかな？

そこで頼まれたのが、火炎様の名前を付けてやって欲しいとの事だ。

確かにジンやウィンディーネと違って火炎様には自分の名前が無いからね。

火炎様だと親との区別がつかない。

どうしようかと考えたのだが・・・これは僕が付けるんじゃないかと親か村の人が付けたほうがいいんじゃないか？

そう提案したのだが、ジンもウィンディーネも僕が付けたんだから火炎様の名前も考えてくれとの事。

ミリヤさんにも連れてきたのが僕だから付けてやって欲しいと頼まれてしまった。

それで考えて・・・いろんな人からチカラをもらっているとそのうち人型になると思うから、その時に付けてもらおうと試してみた。

人型に丁度なつた時にあげた人が名付け親になればいい。

そう思ったのだが、それならその時が来るまでの間使う名前を考えてくれと言われた・・・

それ、いるのか？

しかし、どうしても付けて貰いたい様で引く気はなさそうだならばとイフリートと付けた。

そして名付け親が決まったら種族の名前がイフリートとしてもらう。これには首を傾げていたが、ウィンディーネに別の名前がついている事を説明して理解してもらった。もう一つの名前は教えないけどね。

そうすると今度はミレイが拗ねだした。

いや、ミレイさん？ミーシャと浮気はできないよ？

あなたは一体何を怒っているのでしょうか？ 妻に隠し事をしだすとか言われましても・・・

拗ねたミレイを宥めるのは大変だった。宥める時に言った言葉で周りからは随分と冷やかされる事になったし・・・

しかしミレイのこの反応は意外だった。

愛されている事に不安を感じている訳では無いだろうが、どうしたんだろう？

独占欲？

・・・なのか！？

甘えていただけだと信じたい。

食事を済ませた後は、ミリヤさんの所で眠りについた。

今までは狭いので帰るようにしていたのだが、さすがにこの寒さの中ミレイを連れて帰るのはまずいと思い泊めてもらう事にしたのだ。家の中も実際は寒いのだが、外で焚き火をしているのと、ミレイと体を寄せ合って暖をとり、時々ジンとイフリートがそれぞれの家を暖めて回っているので結構快適に眠ることが出来る。

ジンもイフリートもありがとうね。

この村には自分以外にチカラを使える人が5人居る。

ミレイがミリヤさんに教えてから、ミレイとガズとで一人ずつチカラを教えていた。

その5人が居るからこそ出来る贅沢だろう。

そうでないとジンとイフリートが倒れてしまいかもしれない。

翌日朝ごはんを食べてからミレイと二人家路についた。

85話 これから

ミレイを連れ帰って、まずはゆっくりと暖をとった。
そして、ゆっくりと話し出す。

祖母に会って、今度ミレイを連れてくるように言われた事。
チカラが自分の一族に伝わって来ているものだという事。

そして、自分がこことは全く違うところから来た事。

よく分からないみたいだったので、扉をくぐってもらった。凄く驚いてたなあ。

周り全てが見たことの無い物で埋まっているんだから、当然だよな。

ただ、今日は部屋に連れてきただけで引き返した。

いきなりいろんな物を見せても驚くばかりだからね。

ミレイの中で好奇心が膨らんで、溢れるのを待ったほうがいいと思った。

そのほうが驚きを楽しめると思う。

帰ったら食事の用意だ。

用意した物をみせて説明しながら作っていく。今日は雑炊にしよう。

昆布で出汁をとり、見慣れない野菜と米。

食べさせてみると美味しいと驚きながら言ってくれた。

お風呂に入って一緒に眠る。

好きだと言って、愛していると囁き、付いて来て欲しいと願う。
これからもずっと一緒だ。

もう随分とミレイも異世界に慣れた様だ。

今では洋服を着て普通に助手席に乗り町を歩けるようになっていて、世界に随分と慣れてきたので、子供が生まれてからと考えていたのだが祖母にも会いに行つて来た。

曾孫を宿した孫の嫁。自分が驚くほど祖母は蕩けていた。

これで異世界への恨み（？）も無くなるかな。

ミレイのお腹も随分と大きくなつて来た。

ただ、ミリヤさんに聞いたところ妊娠期間は少し違う様で、分かったのが冬の始め頃だったなら生まれて来るのは秋の終わり辺りだそうだ。

生まれてくるまで一年弱くらいかかることになる。ちょっとだけ長い。

何とか産婦人科にかかつて生んでもらった方がいいかなと考えてもいたのだが、これでは無理だ。

どんな違いがあるか分からない。

ミレイと話し合つて、子供はこちらの世界で育てようという事になった。

問題はあると思うが、こちらの世界のいろんな事を知つて、伝えるかは分からないが向こうに伝えれる様にしてあげたい。

その為に必要な戸籍をどうしようか迷ったが、総帥に頼み一族の女性の中から誰か都合のいい人を選んで、その人の子供として届けを出す事になった。

早く生まれておいで。待っているよ。
これから君の物語が始まるんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3152q/>

陰陽師の憂い

2011年4月18日22時49分発行